

い ば や し き
射場屋敷遺跡

— 津波避難タワー整備に伴う発掘調査報告書 —

2016.2

香南市教育委員会

い ば や し き
射場屋敷遺跡

— 津波避難タワー整備に伴う発掘調査報告書 —

2016.2

香南市教育委員会

序

香南市は平成 28 年 3 月で合併 10 周年を迎えます。豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、古くから先人たちが歴史を創ってきた地域です。平成 21 年には香南市文化財センターを開設、遺跡の調査や文化財の保護を進めてまいりました。

射場屋敷遺跡のある吉川町は物部川河口東岸に位置します。太平洋に面して田園地帯が広がり、鰻やらっきょうなどの特産品が知られています。吉川から東の赤岡・岸本・夜須へと続く砂丘上には街道が延び、集落が形成されます。この美しい海岸線には、南海地震のたびに起こる津波の記憶が刻まれています。

東日本大震災を機に、香南市では近い将来予想される南海地震に備えて津波避難タワーの建設に取り組んできました。平成 27 年度末までには 12 基のタワーが完成 さらに 10 基の建設計画を進めています。

射場屋敷遺跡は、津波避難タワー建設に伴う事前の発掘調査で新たに確認された遺跡です。今回の調査は吉川町で初めての本格的な発掘調査です。建設予定地である錦児童公園跡地から弥生時代の竪穴住居が確認されるなど、2 千年前から当地で連綿と人々の暮らしが営まれてきたことが明らかになりました。

遺跡は大地に刻まれた歴史そのものであり、私たちの祖先の偽らざる営みを今日に伝えるかけがえのない遺産です。吉原城跡をはじめ中世の史跡が多いことで知られる吉川町吉原地区の歴史に新しい 1 ページが加わりました。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただくことを願って刊行するものです。歴史を考える資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査期間を通して、地元の皆様をはじめ多くの方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成 28 年 2 月 29 日

香南市教育長 安岡 多實男

例言

1. 本書は、香南市教育委員会が平成26年度に実施した津波避難タワー整備事業に伴う射場屋敷遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 射場屋敷遺跡は、高知県香南市吉川町吉原字射場屋敷1010番地3に所在する。
3. 本発掘調査は、香南市の委託を市教育委員会が受託し、調査及び整理作業は生涯学習課文化振興保護係(市文化財センター)が主体となって実施した。試掘調査は平成25年7月11日に実施し、本発掘調査は平成26年4月2日～6月3日にかけて実施した。
4. 調査対象面積 約550㎡
試掘調査面積 約10㎡
本発掘調査面積 約300㎡
5. 試掘調査時(平成25年度)の調査体制は以下の通りである。
調査担当 宮地 啓介 香南市教育委員会 生涯学習課 文化振興保護係 埋蔵文化財調査員
6. 本発掘調査時(平成26年度)の調査体制は以下の通りである。
事務担当 小松 誠 香南市教育委員会 生涯学習課 文化振興保護係 係長
〃 松村 信博 〃 〃 〃 主監調査員
調査担当 宮地 啓介 〃 〃 〃 調査員
7. 報告書刊行時(平成27年度)の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下の通りである。
課 長 近森 孝章 嘱託職員 藤方 正治
係 長 寺内 より子 〃 宮地 啓介
主監調査員 松村 信博 臨時職員 宮本 幸子
主 査 小川 哲弘 〃 齋藤 美幸
〃 澤田 佐世
8. 本書の編集・執筆は宮地が行った。遺物の写真撮影は宮地、画像補正は岩神印刷が行った。
9. 本報告書中で使用する方位は真北(方眼北)を基準とし、公共座標は世界測地形第IV系に拠った。掲載した地形図等は、特に表示のない場合は上方が北である。
10. 発掘現場作業に際しては下記の方々^の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
[発掘調査] 宗圓良一 永野宏幸 河村美佐子 川村正廣 植田秀夫 小笠原正貴
(小川哲弘 藤方正治 宮本幸子 齋藤美幸 澤田佐世)
[重機オペレーター] 清藤勝秀
[機械・器具] (株)東部レントオール 香南営業所 (株)ジッタ 高知支店
11. 遺物整理・報告書作成等に際しては下記の方々^の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
松村信博 藤方正治 宮本幸子 齋藤美幸 澤田佐世
12. 遺構の略号は、ST(竪穴住居状遺構)・SB(掘立柱建物跡)・SK(土坑状遺構)・SX(性格不明遺構)・P(ピット状遺構)等と表記し、本報告書において包括的な総称として用いている。
13. 掲載した遺物実測図は通し番号で表示し、挿図・写真図版とも同一番号を使用している。出土遺物は「14 - IB」と注記し、仮番号を付して関連図面・写真と共に香南市文化財センターで保管している。

14. 調査に当たっては香南市防災対策課の協力を得た。また地元住民の方々には埋蔵文化財保護に対する御理解と御協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。
15. 本報告書作成に際して、池澤俊幸氏、吉成承三氏、久家隆芳氏(公益財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター)、宮里 修氏(高知大学人文学部人間文化学科講師)、浜田恵子氏(高知市教育委員会)、島田豊彰氏(徳島県埋蔵文化財センター)、乗岡 実氏(岡山市教育委員会)、尾野善裕氏(独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部)、松村信博氏、藤方正治氏(香南市文化財センター)ら諸氏に貴重な御教示・御助言を頂いた。記して謝意を表する次第である。

※本書図版は全体的に見苦しい仕上がりとなっています。記してお詫び申し上げます。



※吉川町津波避難タワー整備位置図(香南市防災対策課)

本文目次

第I章 調査の経緯

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査対象地の概要	2
第3節 試掘調査	3

第II章 香南市域の地理・歴史的環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8

第III章 調査の成果

第1節 調査の方法	13
第2節 調査対象地の土壌	15
第3節 基本層序	15
第4節 弥生後期後葉の遺構と遺物	18
第5節 古代～中世期の遺構と遺物	35
第6節 近世期の遺構と遺物	43
第7節 下層確認調査	44

第IV章 総括

第1節 射場屋敷遺跡における弥生後期後葉の様相	61
付. 野口遺跡出土の弥生土器	63
第2節 射場屋敷遺跡における古代～中近世期の土器様相	65
第3節 射場屋敷遺跡からみた吉原庄の景観	67
第4節 射場屋敷遺跡周辺(香南市域)の主な中世集落関連遺跡	69

挿図目次

第 1 図	香南市及び射場屋敷遺跡位置図	1
第 2 図	射場屋敷遺跡包蔵地及び調査対象地位置図(S=1/5,000)	2
第 3 図	試掘坑位置図(S=1/400)	3
第 4 図	TR1 遺構検出状態概要図・柱状図(S=1/40)/出土遺物(1:S=1/3)	4
第 5 図	野口遺跡出土遺物(2:S=1/3)/同関連記事	5
第 6 図	射場屋敷遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図(S=1/45,000)	9
第 7 図	調査区位置及び公共座標(S=1/500)	13
第 8 図	基準点「点の記」(香南市防災対策課)	14
第 9 図	調査区東壁 土層断面図(S=1/60)	15
第10 図	遺構配置図(S=1/80)	17
第11 図	弥生土器片等出土遺構(S=1/100)	18
第12 図	ST1 出土遺物 1 (3:S=1/3)	19
第13 図	ST1 平面図・土層断面図・遺構断面図(S=1/40)	20
第14 図	ST1 出土遺物 2 (4~25:S=1/3)	22
第15 図	ST1 出土遺物 3 (26~51:S=1/3)	23
第16 図	ST1 出土遺物 4 (52~65:S=1/3)	24
第17 図	ST1 出土遺物 5 (66~69:S=1/3)	25
第18 図	ST2 出土遺物 1 (70~76:S=1/3)/P3 平面図・遺構断面図(S=1/40)	26
第19 図	ST2 平面図・土層断面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物 2(77:S=1/10)	27
第20 図	ST2 出土遺物 3 (78~98:S=1/3)	28
第21 図	SX1 平面図・遺構断面図(S=1/50)/出土遺物 1(99:S=1/3)	29
第22 図	SX1 P4~6 平面図・土層断面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物 2(100~106:S=1/3)	30
第23 図	SX1 SK1 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物 3(107~116:S=1/3)	31
第24 図	P41・81 平面図・土層断面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(117~119:S=1/3)	32
第25 図	P86・101・282 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(120~132:S=1/3)	33
第26 図	SB1 平面図・遺構断面図(S=1/40)/包含層出土遺物(133~136:S=1/3)	34
第27 図	古代~中世土器片等出土遺構(S=1/100)	35
第28 図	SK2 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(137・138:S=1/3)	36
第29 図	SK3 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(139~141:S=1/3)	37
第30 図	P2・16・172・284 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(142~145:S=1/3)	38
第31 図	P80・68・82 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(146~148:S=1/3)	39

第32図	P87・200・155 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(149～153:S=1/3) ……………	40
第33図	P91・273・264 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(154～160:S=1/3) ……………	41
第34図	包含層遺物出土状況図1(S=1/80)/出土遺物1(161～171:S=1/3) ……………	42
第35図	包含層遺物出土状況図2(S=1/80)/出土遺物2(172～188:S=1/3・182:S=1/2) ……………	43
第36図	下層確認トレンチ ……………	44
第37図	野口遺跡出土遺物(189～193:S=1/3) ……………	63
第38図	射場屋敷遺跡 中世土器編年案(S=1/5) ……………	64
第39図	船戸遺跡出土遺物 ……………	65
第40図	吉原庄略図(S=1/50,000) ……………	67

表目次

第1表	遺物観察表1 (TR1) ……………	4
第2表	ST1 ピット状遺構(主柱穴)計測表 ……………	21
第3表	ST2 ピット状遺構(主柱穴)計測表 ……………	27
第4表	SX1 ピット状遺構(主柱穴)計測表 ……………	30
第5表	SB1 ピット状遺構(主柱穴)計測表 ……………	34
第6表	ピット状遺構 計測表1 ……………	44
第7表	ピット状遺構 計測表2 ……………	45
第8表	ピット状遺構 計測表3 ……………	46
第9表	ピット状遺構 計測表4 ……………	47
第10表	ピット状遺構 計測表5 ……………	48
第11表	ピット状遺構 計測表6 ……………	49
第12表	ピット状遺構 計測表7 ……………	50
第13表	ピット状遺構 計測表8 ……………	51
第14表	ピット状遺構 計測表9 ……………	52
第15表	遺物観察表2 (弥生土器・他) ……………	55
第16表	遺物観察表3 (弥生土器・他) ……………	56
第17表	遺物観察表4 (弥生土器・他) ……………	57
第18表	遺物観察表5 (弥生土器・他) ……………	58
第19表	遺物観察表6 (中世土器・他) ……………	59
第20表	遺物観察表7 (中世土器・他) ……………	60
第21表	遺物観察表8 (近世陶磁器・他) ……………	60
第22表	遺物観察表9 (石器・他) ……………	60

写真図版目次

- 図版 1 調査対象地
- 図版 2 調査Ⅰ区
- 図版 3 ST1
- 図版 4 ST2/ピット状遺構・他
- 図版 5 調査Ⅱ区
- 図版 6 SX1/土坑状遺構・他
- 図版 7 弥生土器
- 図版 8 弥生土器
- 図版 9 弥生土器
- 図版 10 弥生土器
- 図版 11 弥生土器
- 図版 12 弥生土器
- 図版 13 弥生土器
- 図版 14 弥生土器
- 図版 15 弥生土器
- 図版 16 弥生土器
- 図版 17 弥生土器
- 図版 18 弥生土器・土師器・須恵器
- 図版 19 須恵器・土師質土器・瓦質土器・製塩土器
- 図版 20 須恵器・土師質土器・緑釉陶器・青磁
- 図版 21 瓦質土器・土師質土器・土錘・錢貨・近世陶磁器・石器
- 図版 22 石器
- 図版 23 石器
- 図版 24 石器・弥生土器
- 図版 25 調査日誌抄 4月 2日～4月 7日
- 図版 26 調査日誌抄 4月 8日～4月 16日
- 図版 27 調査日誌抄 4月 17日～5月 1日
- 図版 28 調査日誌抄 5月 3日～5月 13日
- 図版 29 調査日誌抄 5月 14日～5月 22日
- 図版 30 調査日誌抄 5月 23日～6月 3日
- 図版 31 射場屋敷遺跡周辺の史跡・津波避難タワー

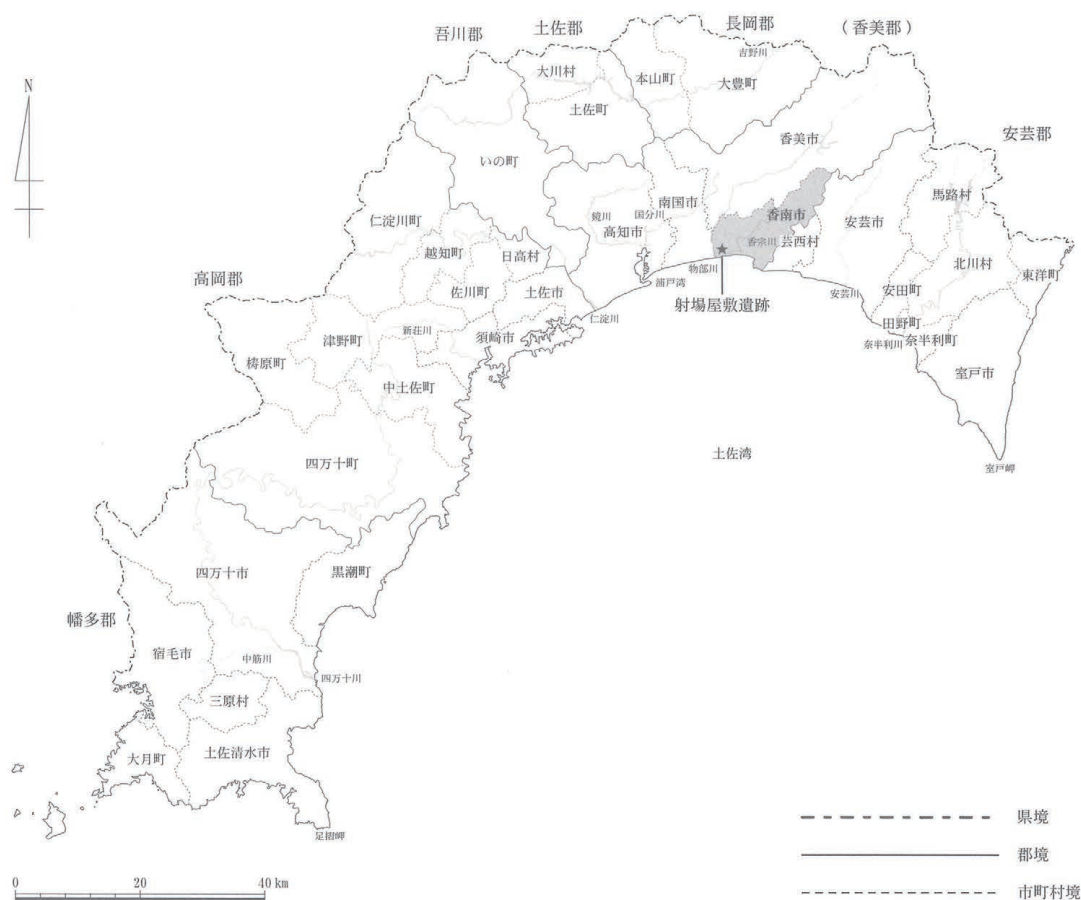
第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査の経緯

本調査は高知県吉川町吉原字射場屋敷(錦児童公園)に建設予定の津波避難タワー(Y7)整備事業に伴う、記録保存のための緊急発掘調査である。

本事業は国の防災対策事業の重点施策として、住民避難の安全性を図り、地域の発展に資するものとした社会基盤整備事業である。事業対象地周辺に、周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、地理的・歴史的環境(第 2 節 調査対象地の概要)を鑑み、埋蔵文化財が遺存している可能性が考えられた。これに伴い、事前に事業計画区内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、香南市教育委員会(市文化財センター)が主体となって試掘調査を実施した。

調査の結果により、比較的良好な遺構が遺存することが判明した。埋蔵文化財包蔵地の所在把握に伴い当該地の小字名を採って「射場屋敷遺跡^{いばやしき}」として新設し、遺跡発見の通知(文化財保護法第 97 条)を進達した。関係機関との協議の結果、当事業の施行により対象地の埋蔵文化財が影響を受けることが考えられた。県教育委員会より通知を受け、同法第 99 条の規定に基づき、香南市から発掘調査業務の委託契約を受託した市教育委員会(同)が主体となり、調査対象面積約 550 m²の内約 300 m²について、平成 26 年 4 月 2 日から 6 月 3 日にかけて遺跡の調査と記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施した。



第 1 図 香南市及び射場屋敷遺跡位置図

第2節 調査対象地の概要

調査対象地の所在する香南市吉川町吉原は、西に流域の基幹を成す物部川が貫流し、瀬戸川(吉原溝)の小流を境として東に同町古川、北に沃野の広がる野市町下井と接する低平な田園地帯で、米作や施設園芸農業などの第一次産業が盛行している。南に土佐湾を臨んで複数列の浜堤(砂堆)が旧汀線を示し、海成複式堆積低地による堤間湿地(堤列低地)の発達により、背後に潟湖性の低湿地が認められる。対象地は物部川旧河道による河成堆積扇状地(野市台地)に位置しており、標高8m未満の扇端部から沖積低地へと漸次的に逓減する地形的特性に立地している。

当該地には鎌倉初期に立荘したとされる吉原庄(「壬生文書」)の歴史が伝えられており、耕地の存在形態や村落の地域構造をホノギ図等により傍証ながら復原し得る景観を呈している。同庄は高倉院法華堂に寄進後、室町期には細川氏の守護領国となるが、長宗我部氏の台頭に及びその支配領域となる。西徳世(善)八幡宮を中心として、周辺小村を含めて約70筆の屋敷が『長宗我部地検帳』(「吉原庄御地検帳」)に記されており、当該区は八反畠村に属していたとされる。対象地の小字は「射場屋敷」であり、地内の集落は「西木戸/(錦)」の地名が遺されているが、『地検帳』に記される「弓場」「西キト」に現地比定すると考えられ、城館関連遺称を想起させる。また寺堂・屋敷地名として「孝(光)善寺屋敷」「新養寺屋敷」等の『地検帳』に遡るホノギも散見される。周辺に吉原城跡(中世)や野口遺跡(弥生後期末)などの周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、埋蔵文化財が遺存している可能性が予察される地域である。



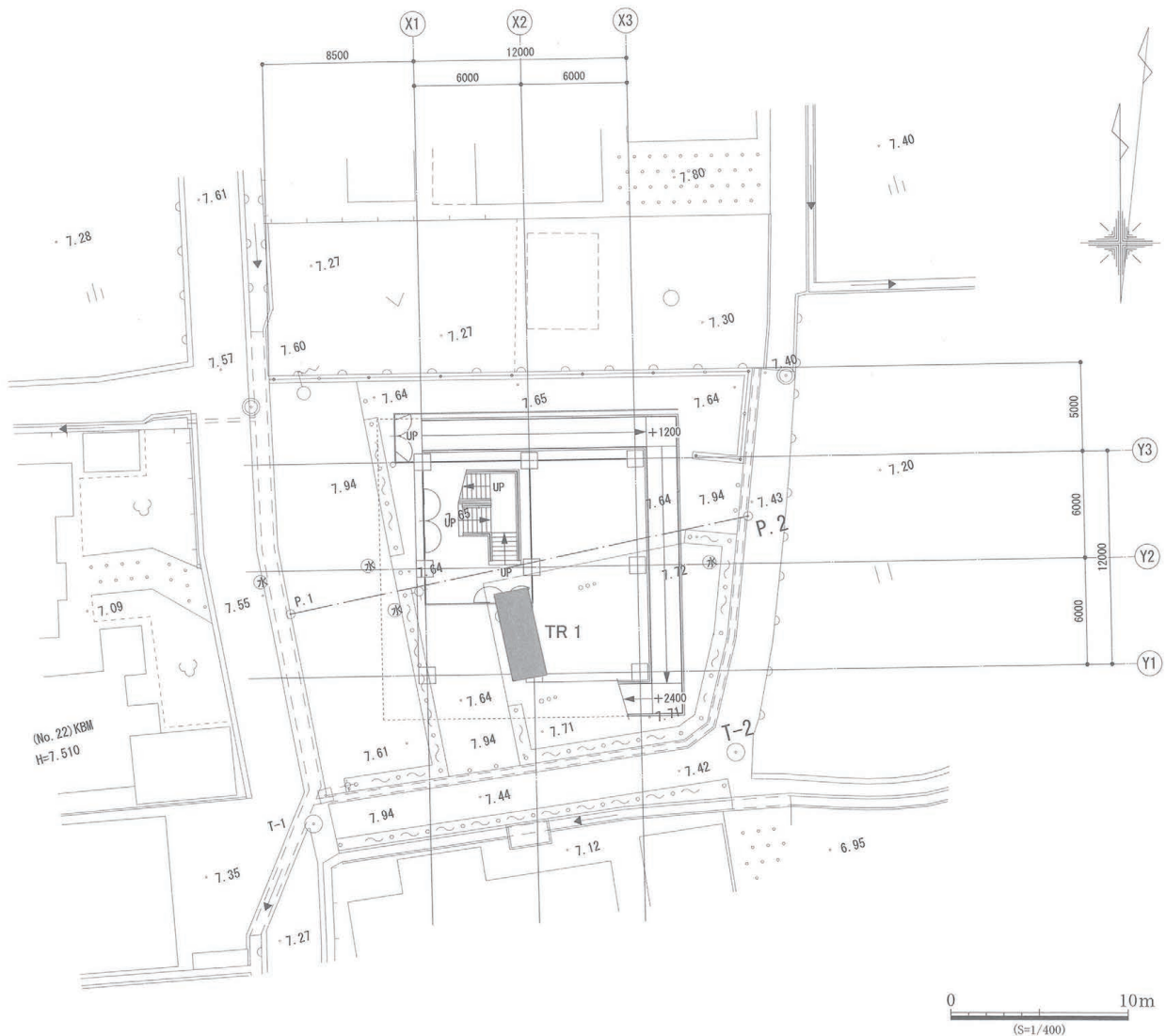
第2図 射場屋敷遺跡包蔵地及び調査対象地位置図 (S=1/5,000)

第 3 節 試掘調査

津波避難タワー整備計画の事業対象地(錦児童公園)において、遺跡分布調査による周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかった。これに伴い、事前に事業計画区内の埋蔵文化財の遺存状況を把握し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、平成 25 年度に香南市防災対策課と協議の上、市教育委員会(市文化財センター)が主体となって試掘調査を実施した。

試掘調査は平成 25 年 7 月 11 日に行った。調査対象地において、遊具・給水管等既存の公園施設の保全を期して範囲を画定し、トレンチ(試掘坑)を設定して確認調査を実施した。調査面積は約 10 m² である。調査方法は、重機(バックホウ)を用いて表土・旧耕作土を掘削した後、手作業で包含層を剥除し、土層の堆積状況や遺物・遺構の有無について確認した。土層断面については、土色観察と層理面による分層を試み、柱状図・写真撮影等により調査結果を記録した。試掘坑位置・検出遺構等については平板測量による作図を行い、図示している。レベル測量については任意に設定した仮 BM(7.8m※)を基準とし、水準儀を用いて視準・計測を行った。

※「(香南市)地図システム」参照

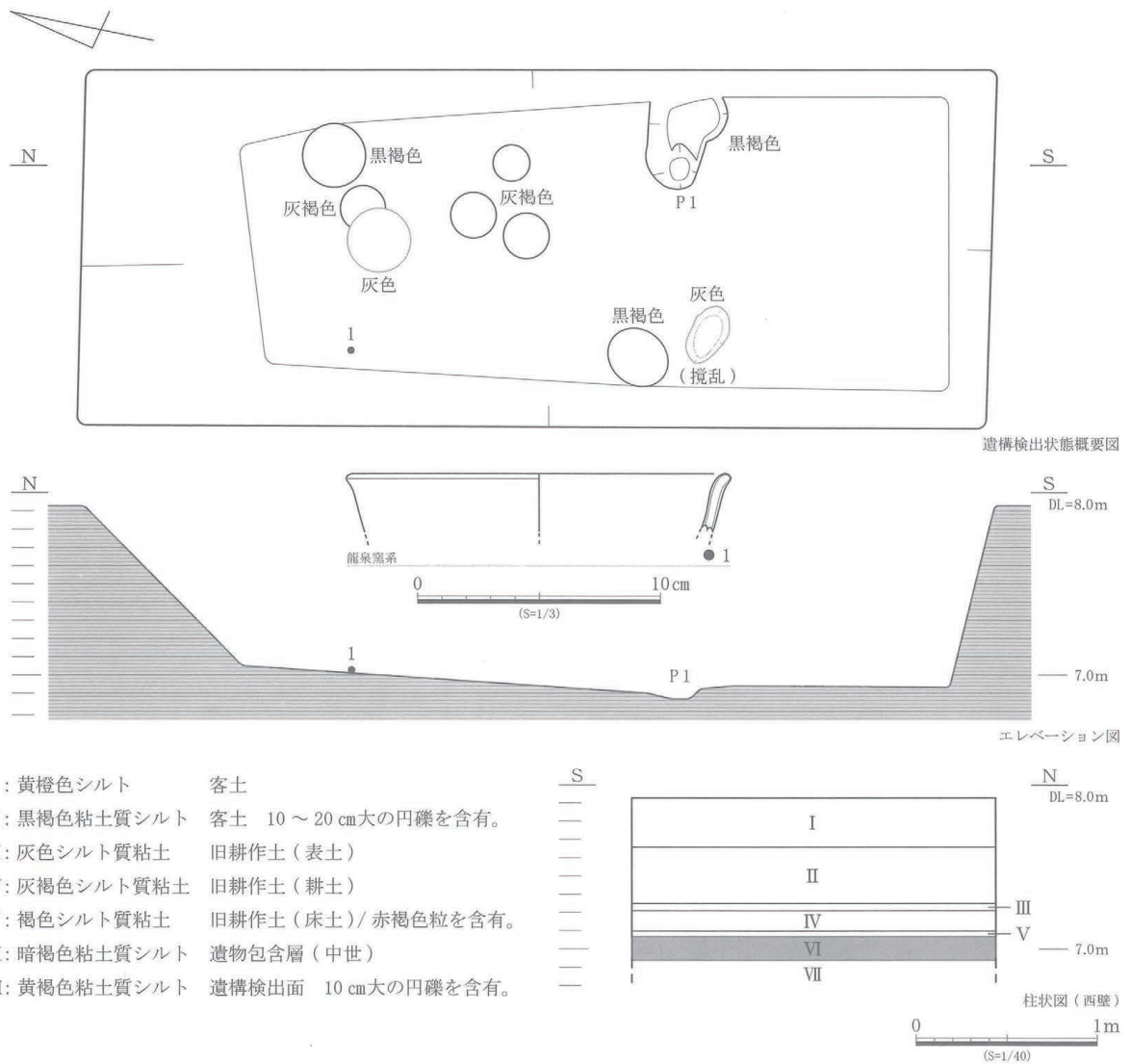


第 3 図 試掘坑位置図 (S=1/400)

基本層序

試掘坑西壁で堆積状況を観察した。周辺の地形状況から、対象地(児童公園)と遺物散布(表採)が認められた隣接耕作地との立地に約50cm前後の比高差を看取できた。児童公園造成以前は同様の地目であったとの証言から、Ⅰ～Ⅱ層は造成に伴う客土(搬入土)と観ることができる。Ⅲ～Ⅴ層は旧耕作土の可能性を含んでおり、近世以降の所産と考えられる陶磁器類は当該層からの出土である。Ⅵ層からは土師質土器片や青磁片が埋存するなど、遺物包含層の埋積を認められ、Ⅶ層上面で遺構の検出に至る。

対象地の層序区分は、1. 表土(客土) 2. 旧耕作土 3. 遺物包含層 4. 旧地表面(遺構検出面)に大別され、下層の確認については現状の保全を優先し、後事を俟つこととした。



第4図 TR1 遺構検出状態概要図・柱状図(S=1/40)/出土遺物(1:S=1/3)

遺物観察表凡例

- 貿易陶磁器の分類は大略において『土佐神社西遺跡・土佐神社』(高知市教委 2006)所収一覧(小野分類)に準拠した。
- 法量()は残存値、[]は復元値である。

図版番号	出土遺構(層位)	器種器形	法量(cm)			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径			
1 (第4図)	TR1 (包含層)	青磁碗	[16.0]	(2.4)	-	内) 暗オリーブ 外) 暗オリーブ	胎土は密で黒い細粒を含む。全面に厚く施釉する。口縁部は端反りし、端部は丸く収める。残存部無文。	龍泉窯系D類 14C前半～16C

第1表 遺物観察表 1 (TR1)

調査の成果

TR 1 (第4図)

調査対象地の中央付近に設定した約2.0×5.0mの試掘坑である。遺物はIV層(暗褐色粘土質シルト)を中心に弥生土器片、土師質土器片、瓦質土器片など約50点(細片)を出土している。遺物は全体的に摩耗がみられ、弥生土器片は後期後葉の様相(タタキ目)を呈する細片を含んでいる。他に青磁碗の口縁部(1)を出土している。地山(旧地表面)からピット状遺構を数個検出し、遺構埋土から黒褐色及び灰褐色の土色を看取できた。遺構確認のため1個(P1)を掘削し、比較的低床ながら明瞭な遺構埋土(黒褐色シルト)と遺物(土師質土器細片)を確認できた。

所見

調査対象地における試掘調査の結果、TR 1において地表下約0.9~1.0mに遺物包含層及びピット状遺構(遺構検出面)の所在を把握し、埋蔵文化財包蔵地の新設と本発掘調査に向けての基礎資料を得ることができた。



今回の試掘調査で出土した遺物は何れも細片であり、相互の共伴関係や層位による相対的な出土状況を把握できる資料は乏しいが、瓦質土器片や青磁片等の出土がみられることから、12世紀後半~13世紀代(鎌倉時代)を中心とした遺物・遺構が遺存している可能性が考えられる。また、弥生後期後葉(末期)を示唆する土器片の出土は、同期を主要な帰属時期とする野口遺跡(第2・5図)の存在が大きく影響していると予想され、物部川下流域東岸に形成される野市台地縁辺部(扇端部)に展開する弥生後期末~古墳初頭にかけての遺跡群との関連性が考慮される。

当該地の小字は「射場屋敷」の遺称であり、中世に遡る屋敷地跡の遺存が予察されたことは既述したが、試掘調査に先行して対象地周辺を踏査(予備調査)した結果、隣接耕作地において遺物(土師器片)を表採しており、本調査時でも同地で弥生土器片、須恵器片、土師質土器片等の散布が認められた。今後は旧地形の観察などを含めた埋蔵文化財包蔵地(遺跡)としての範囲の把握が検討課題となる※。

※『平成25年度 香南市吉川町吉原 錦児童公園 試掘確認調査概要報告書』

香南市教育委員会 2013年

第5図 野口遺跡出土遺物(2:S=1/3) / 同関連記事

第Ⅱ章 香南市域の地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

射場屋敷遺跡は高知県香南市吉川町吉原に所在し、県中央部に広がる高知平野の東半に位置している。

平成18年(2006)3月に旧香美郡の香南5町村(赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村)が合併し、面積126.5km²、人口約3万4,000人の香南市が誕生した。市域の西端には剣山山系白髪山(香美市物部町)に源を発して香南市吉川町吉原で土佐湾に注ぐ物部川(流路延長71km)が縦貫し、同香我美町別役峠を源流とする香宗川(流路延長19.5km)と共に流域の基盤を成している。これらの河川により形成された扇状地や沖積平野(河成堆積低地)には沃野が広がり、最下流域の低湿な海岸平野(汐入湿田)は圃場整備が成され、米作や施設園芸農業などの第一次産業が盛行している。平野部には標高100m未満の小起伏丘陵(残丘)が点在し、山裾及び現・旧河道周辺に断続的に分布する自然堤防沿いに集落が発展している。

当遺跡の所在する香南市吉川町は物部川河口東岸に位置し、近世の古川村と吉原村から成る面積4.25km²の小村であった。東は迂曲する香宗川を中分して香南市赤岡町と町域を画し、西は物部川を隔てた西岸に字「西大境」などの飛地を有して南国市との境界を成す。南に土佐湾を臨んでドロメ(シラス)漁や養鰻業などが活況を呈し、北は香宗川支流烏川や古川山、瀬戸川の小流を境に香南市野市町と接している。近世には高知城下から下田(南国市)を経て東進する旧下街道(郡道：県道春野赤岡線)が村域を横断し、隣接する町には県都高知市と県東部を結ぶ主要国道55号線が東西に開通するなど県中心部からの交通・輸送の便も申し分なく、高知龍馬空港(南国市)に目撃して他地域への利便性にも優れている。

香南市は野市町域を中心に開発・都市化が進行し、高規格道路である南国・安芸道路の建設や、平成14年(2002)には第3セクターによる鉄道「ごめん・なはり線」が開通するなど、社会基盤の整備も進みつつある。一方、市内では山北をはじめとする「棒踊り」や「手結盆踊り」(県保護無形民俗文化財)などの伝統的な祭礼が継承されている地区も多く、民俗文化を次世代に伝える地域社会が残っている。

南部は太平洋(土佐湾)に面する海岸地帯(急深海浜)であり、外洋性の高い波浪や沿岸流が海岸に作用して形成された複数列の浜堤(砂堆)が弓状に延びて旧汀線を示している。海成複式堆積低地による堤間湿地の発達により、背後に潟湖性の低地が認められる。この浜堤上に連檐する赤岡と岸本は在郷町として商圈を確立し、旧町並みは昔日の繁栄を偲ばせている。また一帯の海岸は嘗て製塩業が盛行し、赤岡から物部川上流の大栃(香美市物部町)へ続く峠越えの往還路が、現在「塩の道」として整備されている。

東部には夜須川が南流し、河口付近に位置する手結内港は往時の景観を今に伝える藩政期の掘り込み港である。手結港の東には地質区分による四万十帯の露頭(横浪—手結住吉メランジュ：県指定天然記念物)が観察できる住吉海岸(香南市夜須町～安芸郡芸西村)が所在する。海洋底移動により遠隔地の枕状溶岩や層状チャート・多色凝灰岩などが混在する岩石群が分布し、また同帯の走行に対して上・下盤の剪断方向が異なり、その規模から地殻変動によるものと考えられるなど、プレート理論を実証している。

地理的にみた当遺跡の立地は、自然堤防(浜堤)や砂州を形成する現海岸線から約1.2kmの扇状地性低地に所在し、周辺は平均傾斜区分3°未満の低暖地帯が広がっている。扇端が沖積層下に埋没する当地域は標高8m未満の低平な地形であり、三宝山(秋葉山山系)の山並みを遠望できる環境にある。

秋葉山(標高490m)を主峰とする秋葉山山系は香我美町の北に位置する聞楽山(標高368m)より南西方向に標高を減じ、三宝山(金剛山 標高265m)の南西方向で野市台地(扇状地性中位段丘)の下に沈む。その

秋葉山山系の北方に平行して烏ヶ森の山列があり、同じく南西に向かって標高を減じて物部川にその山裾を侵蝕されている。三宝山の尾根上には仏像構造線が北東—南西の方向性を示して走向しており、尾根中腹に連なる急斜面(断層崖:傾斜角 30~40°)は、同地質構造線の衝上断層によるものである。

西南日本外帯に属する高知県地域の基盤は、四国脊梁山地をほぼ東西方向に走る御荷鉾構造線及び仏像構造線によって、北から三波川変成帯(御荷鉾緑色岩帯)・秩父累帯及び四万十帯に分類され、大観的には南ほど新しい地層が層状に累重して分布する覆瓦状構造を成している。当該地周辺は地帯構造的には四万十帯北帯に属しており、安芸構造線によって南帯と分けられる。北帯北部は断層帯が狭間隔で併走する白亜紀前期の地層(付加体)から成り、当地域は下部白亜系の新庄川層群に属する半山層(ギリヤーク世)に該当する。主に砂岩と頁岩で成層された等量状互層で形成され、海底堆積物(混濁流)によるタービダイト層(砂泥互層)を主体に構成されており、堂ヶ奈路層の南側に推定断層で接する地層である。当遺跡の北約 3.7kmにある山峰が三宝山で、中生代の地質構造帯「三宝山帯」の名前の由来となった山であり、尾根上より北部が秩父帯南帯(三宝山帯)である。構造線の北側に沿って石灰岩(トリアス期)が散在しており、北東約 7.9kmには我が国有数の石灰鍾乳洞穴として奇勝に富む龍河洞(香美市土佐山田町)が存在する。

裾野に広がる野市台地は物部川下流域に発達した開析扇状地(古期扇状地)であり、海拔約 40~10mと北から南へ緩傾斜し、香長平野(香美・長岡郡南部の河成堆積低地)の東半を形成している。この台地は、秋葉山山系西端の三宝山山麓部で遮られた物部川旧河道が東南東へ流下したためできた扇状地性堆積物(砂礫層)によって形成されたものである。また物部川に面した台地の西端部は 5mほどの段丘崖となり、下段は沖積扇状地(新期扇状地)と成っている。野市台地は長岡台地(南国市・香美市土佐山田町)を含む段丘中位面と地形的に連続性がみられることから、ほぼ同時期に離水したと推測されている。降灰時期が約 7,300年前とされる K - Ah 火山灰(鬼界アカホヤ)の堆積(濃集層準)が段丘上に認められ、AT(始良 - Tn)火山灰(約 25,000年前)の降灰層準が不明瞭なことから、氷河性海面移動に基づく世界規模の海水準変動(海退)がみられた最終氷期(ヴェルム氷期)極相期(約 20,000年前)以前に形成されたと考えられている⁽¹⁾。

野市台地は粗粒砂岩礫層を呈して透水性が高く、伏流による低地下水位の乏水地であり、原野の広がる非条里地域と考えられていたが、近年の発掘調査や地形観察などにより香宗川旧河道(埋没流路)の復原が試みられている⁽²⁾。物部川は下刻作用により河床が低下し、台地への灌漑は容易ではなかったが、近世初期以降の大規模な水利事業の展開により、今日にその遺産を見ることができる。

第2節 歴史的環境

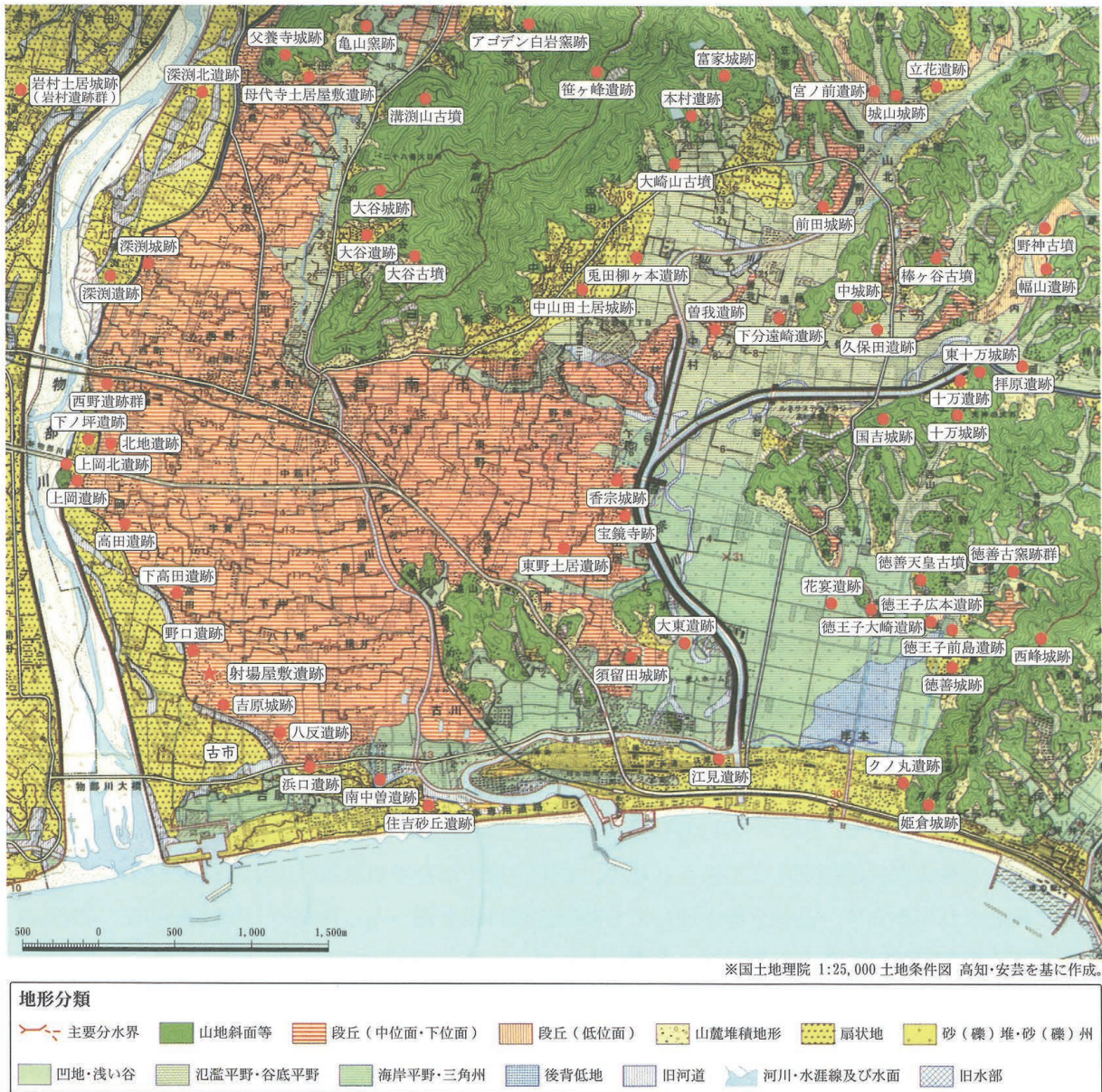
射場屋敷遺跡の所在する香南市は、北部に聞楽山山系の山塊を背負い南に平野部と土佐湾が開けている。中央附近を香宗川(二級河川)が流下して恵みを齎し、西は一級水系物部川が市域を画している。

物部川は野市町をはじめ、高知平野東部(香長平野)を潤しているが、現在の流路を形成したのは近世初頭に堤防が築堤されて以降のことであり、それ以前に西偏していた複数の旧河道や凹地列の派流が緩勾配の扇状地上に微地形として遺されている。下流域には旧河道地形に沿って断続的に自然堤防が形成され、縄文後期以降の遺物分布がみられる。その中でも当遺跡から約 3.0km西に位置する田村遺跡群⁽³⁾(南国市)は地勢的な優位性もあり、弥生時代における南四国最大級の拠点的(母村)集落として知られている。

香南市域における縄文時代以前の遺跡は、有舌尖頭器(草創期)が採集された手結遺跡、後期(宿毛・片粕・松ノ木式)の土器片を出土した拝原遺跡⁽⁴⁾、晩期の貯蔵穴が確認された十万遺跡⁽⁵⁾、晩期末の突帯文土器が

採集された深淵遺跡⁽⁶⁾の例が知られていたが、何れも断片的な出土状況でしかなかった。これまでは縄文・旧石器の空白地帯といわれるほど縄文時代以前の遺跡の例は僅少であったが、平成23年(2011)に確認された庭ヶ淵遺跡⁽⁷⁾において、香長平野では初の事例となる縄文晩期の集落遺跡が発見された。近年の調査により旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石器文化期・縄文早期にかけての岩陰遺跡である奥谷南遺跡⁽⁸⁾(南国市)、小型のナイフ形石器が確認された新改西谷遺跡⁽⁹⁾(香美市土佐山田町)、西日本有数の縄文早期の定住跡を検出した刈谷我野遺跡⁽¹⁰⁾(同香北町)、無文厚手土器・押型文土器(縄文早期)を出土した開キ丸遺跡⁽¹¹⁾(同土佐山田町)など、香長平野周辺に縄文後期を遡る遺跡の存在が明らかになりつつあり、香南市域から該期の遺跡が更に確認される可能性は高いと期待されている。

平成20年(2008)、高規格道路建設に伴う発掘調査で、物部川以東で確認例の無かった弥生前期前半の遺構(土坑跡)が、香宗川下流域の海岸平野微高地(丘陵部)に立地する徳王子大崎遺跡⁽¹²⁾で発見された。出土した土器は前期前半の西見当I式(畿内I様式古段階併行)であり、前期の早い段階でも物部川左岸に集



第6図 射場屋敷遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図(S=1/45,000)

落が展開していたことを示す遺跡として注目されている。庭ヶ淵遺跡でも弥生前期前葉から中葉の土器片(遠賀川式)の出土がみられ、移行期の遺跡として田村遺跡群の影響(伝播)が考えられている⁽¹³⁾。

弥生前期末になると、上岡遺跡⁽¹⁴⁾・北地遺跡⁽¹⁵⁾・下分遠崎遺跡⁽¹⁶⁾・拝原遺跡・十万遺跡など集落数は急増する。物部川右岸に所在する田村遺跡群からの分村による集落数の増加だと考えられている。下分遠崎遺跡ではカツオの脊椎骨をはじめツキノワグマ・シカ・イノシシ・イヌなど様々な魚骨・獣骨類や、農工具を含む多様な木製品、また遺構出土の炭化米から熱帯ジャポニカのDNAが検出されるなど、自然科学分析により多くの知見が齎された。

下分遠崎遺跡や北地遺跡など幾つかの遺跡では、集落が弥生前期末から中期前葉・中葉にかけて継続して営まれるが、前期末のみの短命な遺跡もみられる。香南市域において中期中葉から後葉(Ⅲ様式中段階～Ⅳ様式古段階)にかけての遺跡は殆ど確認されていない。

中期末から後期の初めにかけては、当遺跡の北東約4.9kmの地点に高地(丘陵)性集落的な要素を持つ本村遺跡⁽¹⁷⁾が所在している。この遺跡からは竪穴住居(建物)跡や段状遺構など当該期の高地性集落の典型的な遺構群と共にガラス製の勾玉も出土している。同遺跡は標高約30m前後を測る低丘陵斜面部に立地しており、土器は凹線文土器が主体である。遺跡の北東に連なる山稜上に所在する笹ヶ峰遺跡や、日本屈指の鍾乳洞である龍河洞内で発見された龍河洞遺跡(香美市土佐山田町)などがほぼ同時期に営まれるなど、周辺一帯の土器の分布状況から、当該期には標高の高い地点を利用していたと考えられており、成立の背景として中部瀬戸内地方の影響を受けた可能性が指摘されている。

物部川と香宗川に挟まれた野市町域は、青銅器についても注目される地域である。当遺跡の北方約3.9kmの地点には、絵画銅剣で知られる兎田八幡宮があり、物部川段丘崖上段には、銅鏡(破鏡)の出土した北地遺跡と、銅矛の再加工品が出土した西野ルノ丸南A遺跡⁽¹⁸⁾(西野遺跡群)が所在している。この段丘崖の下段面からも後期前半の竪穴住居跡(下ノ坪遺跡⁽¹⁹⁾・上岡遺跡)が確認されており、下ノ坪遺跡では高知平野最大級の竪穴住居跡1棟から多数のガラス小玉が出土している。段丘崖の上下段に分布するこれらの遺跡は、弥生後期前半に一連の集落を形成していたものと考えられている。

弥生後期後半から古墳時代初頭にかけては、深淵遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡⁽²⁰⁾・幅山遺跡⁽²¹⁾・野口遺跡・南中曾遺跡など集落数も更に増加する。深淵遺跡・東野土居遺跡・幅山遺跡では竪穴住居跡と土器棺墓が確認され、兎田柳ヶ本遺跡⁽²²⁾では「方形周溝墓」の可能性を残す遺構を検出しているが、当地域において当該期の墓制や祭祀空間などの様相を把握するには資料の蓄積が不十分で、今後の調査結果に期待したい。これらの集落は物部・香宗両河川流域に展開しており、他地域からの搬入土器(庄内式土器・東阿波型土器)の存在からも、河川が当時の交通に果たしていた役割を推察することができる。

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降、高知平野では遺跡の確認例が殆ど無くなるなど、遺跡数急減の可能性が指摘されている。その中で拝原遺跡は古式土師器Ⅲ期(4世紀)の竪穴住居跡が2棟確認されており、県内でも数少ない検出例として注目される。香南市域では初期須恵器の出土は徳王子広本遺跡⁽²³⁾を除いて確認されておらず、高知平野を通じても前期古墳は殆ど例がみられない。丘陵先端部に立地していた徳善天皇(花散里)古墳は5世紀代の古墳とされているが、それ以外は6世紀後半以降に築造された後期古墳が大半であり、存在が伝えられるが旧態を存していないものも少なくない。大谷古墳⁽²⁴⁾・大崎山古墳⁽²⁵⁾など発掘調査の実施された古墳もあるが、詳細な時期特定のできないものも多く、古墳時代については4～5世紀前後の様相は殆ど解明されていないのが実情である。6世紀後半から7世紀初めにかけての古墳時代後期の竪穴住居跡が、深淵遺跡・下ノ坪遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡などで確認され

ているが、古墳被葬者の帰属集落との関連性については検討を要すると思われる。

古代(律令期)の遺跡としては、下ノ坪遺跡が白眉である。8世紀前半～9世紀中葉頃に盛行し、古代の出土遺物は硯や丸軋、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡などが出土している。コの字状に配置された南四国最大級の規模を持つ総柱建物跡を検出しており、物部川に面した立地から奈良時代から平安時代にかけて川津として機能していた遺跡だと考えられている。深淵遺跡も同様に官衙としての役割を果たしていたと考えられており、二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・陶硯・蛇尾などが出土している。対岸に位置する岩村遺跡群⁽²⁶⁾(南国市)からも畿内・近江・東海産の緑釉陶器が出土しており、9世紀後半～10世紀中葉頃に盛期を迎えている。中世には城館(岩村土居城跡)の出現がみられ、長期に亘る拠点として存続した要因として、物部川(旧河道)に臨む川津としての水運掌握が背景にあると考えられる。

香宗川流域にも香我遺跡⁽²⁷⁾や十万遺跡など官衙関連と考えられる遺跡が点在している。また条里地割(「香長条里」)の可能性を持つホノギ(一ノ坪・四ノ坪・中ノ坪・大坪など)が随所にみられる。

古代の窯跡として野市町佐古地区周辺に亀山窯跡・アゴデン白岩窯跡、香我美町徳王子に徳善古窯跡群(7世紀後半～8世紀初頭頃)が確認されている。亀山窯跡で生産された瓦は平安京大極殿や、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていた記録が遺っており、古代における土佐と中央との関係を知る上で重要な遺跡と考えられている。物部川に面して深淵北遺跡⁽²⁸⁾が9世紀末～12世紀代にかけて成立していたとみられ、周辺には亀山窯跡関連集落の可能性のある母代寺土居屋敷遺跡⁽²⁹⁾が所在している。

古代末から中世初頭にかけて各地で荘園の成立がみられ、香美郡内に立荘された大忍庄(荘)は、土佐湾に面した岸本(クノ丸遺跡⁽³⁰⁾)から山間部の奥物部に跨る広大な荘域を有していた。『和(倭)名類聚抄』(10世紀前半頃成立)にみえる大忍郷が荘園化したものと考えられ、鎌倉時代の後期には鎌倉の律宗寺院極楽寺が、次いで南北朝期には紀州の熊野新宮が荘領主となり、15世紀には室町幕府管領で土佐守護でもあった細川氏の所領となるなど、権門による支配の動向が当該地域に影響を与えてきた。

中世には香美郡南部において香宗我部氏の台頭をみる。香宗我部氏は鎌倉時代初頭に西遷した中原秋通が香美郡宗我部・深淵両郷の地頭職に補任したのに始まるとされている。地名を氏として宗我部氏を名乗ったが、長岡郡の宗我部(秦)氏と区別するため、郡名を冠して香宗我部氏を称したとする。香宗城を居館とし、室町時代(戦国期)には土佐守護細川氏の権力を背景に大忍庄へ進出するが、安芸氏との抗争で衰退する。長宗我部国親の三男親泰を後嗣として迎え局面を打開し、以後長宗我部氏の勢力拡大に貢献する。慶長5年(1600)主家の改易に伴い、地域権力としての香宗我部氏は終焉するが、本流は中山田氏として土佐に家名を遺している。現在香宗城跡は市史跡に指定され、八幡社と土塁の一部を存しており、香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡(県指定史跡)には観音堂や五輪塔などが造立している。周辺の遺跡(東野土居遺跡)からは中世の土師質土器や瓦質土器の他に貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられ、字「野々土居」からは堀跡と考えられる2条の溝状遺構を検出するなど、同氏との関連が指摘されている。

また香宗川左岸の標高13m前後を測る丘陵縁辺部の微高地に立地している十万遺跡でも、「重濠複郭式屋敷城」(松本豊寿『城下町の歴史的地理的研究』1967年)と考えられる溝跡を検出している。大忍庄内において名主層などの在地勢力が構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されており、周辺の中世城館なども含めて、当該地域が緊張状況下にあった可能性を示唆している。

近世前期になると、物部川山田堰からの分水(引水)により高燥な野市台地の開墾が進み、豊かな穀倉地帯へと景観を変えた。上岡北遺跡⁽³¹⁾からは、物部川の治水を手がけた野中兼山(土佐藩執政家老)による築堤と推測される17世紀頃の石積み遺構が確認されている。当遺跡の立地する吉川町は臨海平野地帯に

位置しており、地形的な観点から津波の常襲地帯としての側面も有している。宝永4年(1707)に発生した地震の被害として西徳善八幡宮や大八幡宮の古記物等が流失した記録(「亥の大変」)が残り、住吉神社には民話として伝承されている。段丘中位面に位置する野市は物部川西岸の後免(南国市)に対する東岸の開発拠点として西野(東町)周辺に街村集落が形成され、民家・商家が発展する。明治以降の近代化に伴う町村制度施行による合併を経て、香南地域の行政・経済・文化の中心地となり、今日に至る。

【註】

- (1) 研川英征「河岸段丘の形成と、地形学見地からみる物部川および高知平野」『土佐山田史談』2004年
- (2) 前田光雄氏、菊池直樹氏、辻 康男氏の御教示に拠る。
- (3) 前田光雄・吉成承三 他 『田村遺跡群Ⅱ 第1～9分冊』(財)高知県埋蔵文化財センター 2004・2006年
- (4) 出原恵三 『拝原遺跡』 香我美町教育委員会 1993年
- (5) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生 『十万遺跡発掘調査報告書』 香我美町教育委員会 1988年
- (6) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生 『深淵遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989年
- (7) 宮地啓介 『庭ヶ淵遺跡』 香南市教育委員会 2012年
- (8) 松村信博・山本純代 『奥谷南遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(財)高知県埋蔵文化財センター 1999・2000・2001年
- (9) 中山泰弘 『新改西谷遺跡・勝楽寺跡』 土佐山田町教育委員会 2002年
- (10) 松本安紀彦 『刈谷我野遺跡Ⅰ・Ⅱ』 香北町・香美市教育委員会 2005・2007年
- (11) 小林麻由・藁科哲夫 『開キ丸遺跡』 土佐山田町教育委員会 2002年
- (12) 下村 裕・島内洋二 他 『徳王子大崎遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2009年
- (13) 出原恵三 『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』 新泉社 2009年
- (14) 更谷大介・溝渕真紀 『上岡遺跡』 野市町教育委員会 2005年
- (15) 松村信博・宮地啓介 『北地遺跡』 香南市教育委員会 2011年
- (16) 高橋啓明・出原恵三 他 『下分遠崎遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』 香我美町・香南市教育委員会 1989・1993・2010年
- (17) 坂本憲昭 『本村遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1993年
- (18) 更谷大介「西野遺跡群ルノ丸地区南・ルノ丸地区南A」『埋文こうち 第21号』 高知県教育委員会 2008年
- (19) 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋 他 『下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 野市町教育委員会 1997・1998・2000年
- (20) 出原恵三・下村 裕・久家隆芳・矢野雅子・筒井三菜 『東野土居遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2015年
- (21) 岡本 修 『幅山遺跡』 香我美町教育委員会 1999年
- (22) 松村信博・宮地啓介 『鬼田柳ヶ本遺跡』 香南市教育委員会 2010年
- (23) 下村 裕 他 『徳王子広本遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2014年
- (24) 山本哲也 『大谷古墳』(財)高知県文化財団 1991年
- (25) 山本哲也 『大崎山古墳』 香南市教育委員会 2013年
- (26) 三谷民雄 『岩村遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 南国市教育委員会 1997・1998・1999年
- (27) 高橋啓明・吉原達生 『曾我遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989年
- (28) 吉成承三・佐竹 寛 『深淵北遺跡』 野市町教育委員会 1996年
- (29) 松村信博・宮地啓介 『母代寺土居屋敷遺跡』 香南市教育委員会 2010年
- (30) 松本安紀彦・舛田龍也 他 『クノ丸遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2010年
- (31) 更谷大介・溝渕真紀 『上岡北遺跡』 香南市教育委員会 2009年

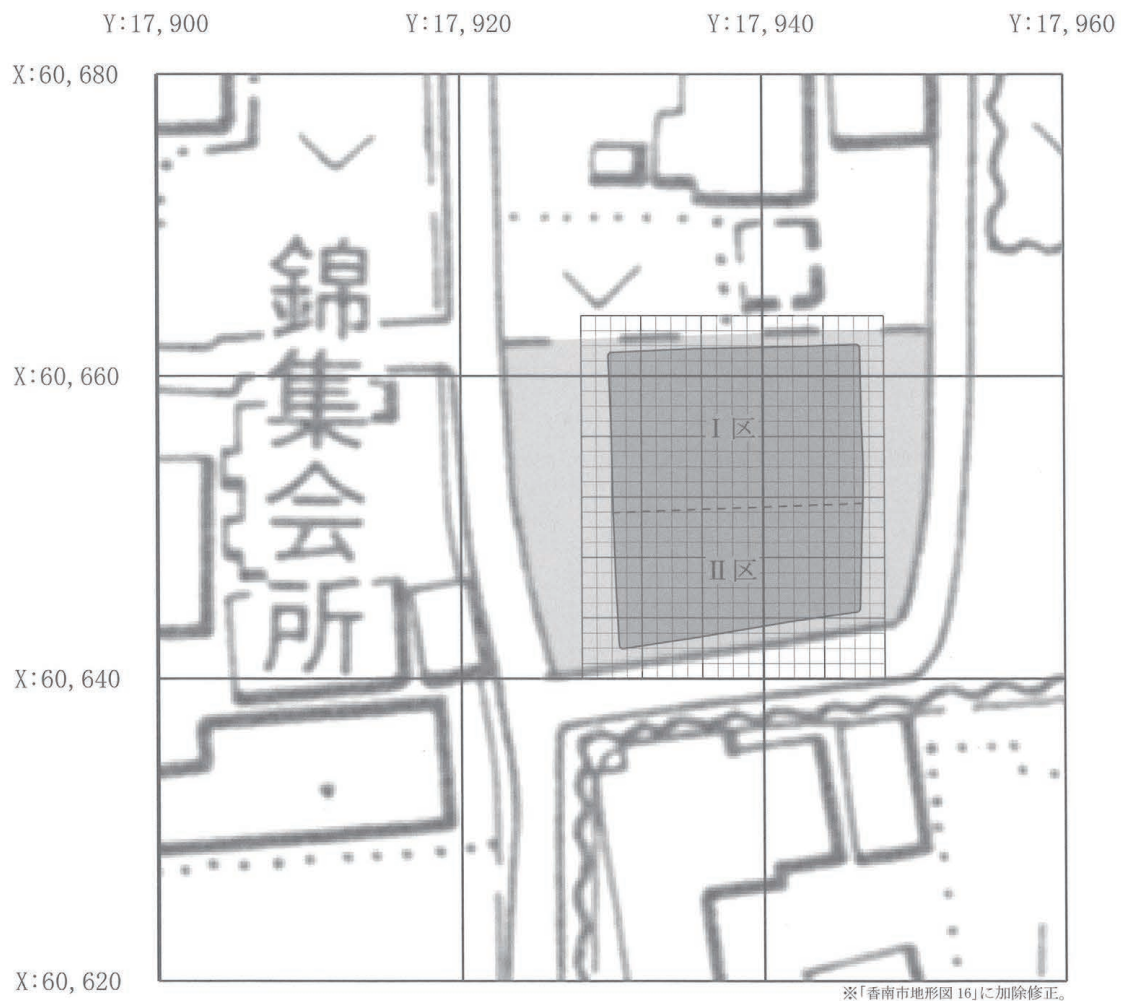
第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査対象地において、花壇・擬木柵等既存の公園境界施設の保全を期して実掘範囲を画定し、排土置場など工程上の事由により、便宜的にⅠ・Ⅱ区に分割して調査区を設定した。また住宅地内での発掘作業のため、排土の措置及び調査区内への立入等の安全に留意した。調査の手順としては、重機を用いて表土を剥除した後、遺物包含層掘削・遺構検出・遺構埋土掘削等を手作業で精査しつつ、調査を進捗させた。

遺構の調査については、対象遺構の形状に即して任意の基線(実測基準点)を設定し、平面実測・レベル(海拔高)測量及び写真撮影等による記録を行った。水平・垂直位置の測量は、路上に既存する金属標(図根多角点)等を共用し、光波測距儀と水準儀を併用して視準・計測を行った。層相については目視による土色観察と層理面による分層を試みた。遺構平面図及び土層断面図は、縮尺20分の1を基本として測量を行い、遺物出土状況図等は縮尺10分の1を適用した。

本報告書では、世界測地系に則した公共座標に基づいて1mの方眼を展開し、グリッド番号を付して遺構配置図として使用している。調査時における任意の方向軸は、方眼北(国土座標第Ⅳ系)を基準としたものに修正して本書図版に掲載している。



第7図 調査区位置及び公共座標 (S=1/500)

第三章 調査の成果

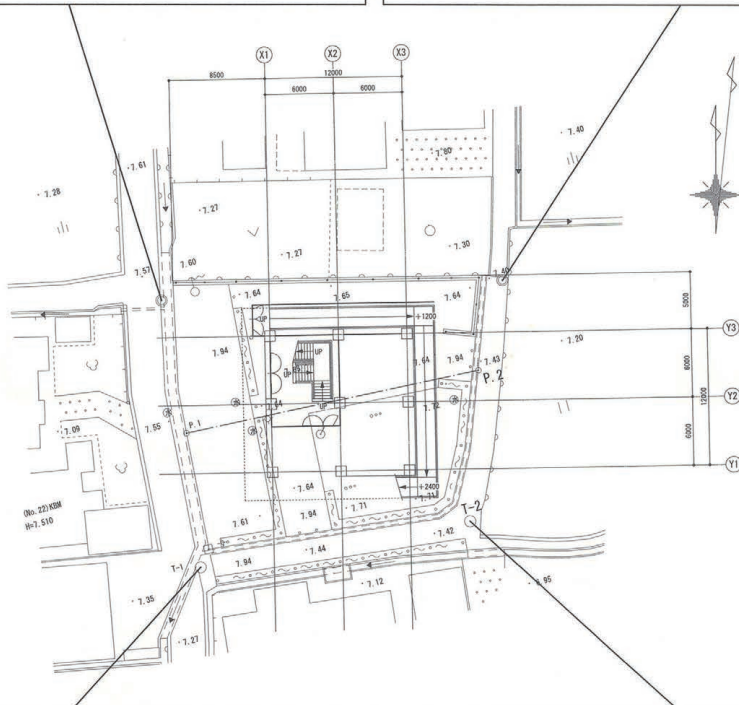
名称	E07交23	平面座標	X	60661.374
等級	図根多角点		Y	17922.659
標識種類	金属標	標高	H	7.610
備考	世界測地系 第IV系 標高は基準点計算より算出			

遠景写真



名称	ETET 238-2	平面座標	X	60663.202
等級	図根多角点		Y	17952.717
標識種類	金属標	標高	H	7.447
備考	世界測地系 第IV系 標高は基準点計算より算出			

遠景写真



名称	T-1	平面座標	X	60637.925
等級	4級基準点		Y	17926.127
標識種類	金属標	標高	H	7.499
備考	世界測地系 第IV系 標高は基準点計算より算出			

遠景写真



名称	T-2	平面座標	X	60642.009
等級	4級基準点		Y	17949.858
標識種類	金属標	標高	H	7.481
備考	世界測地系 第IV系 標高は基準点計算より算出			

遠景写真



第8図 基準点「点の記」(香南市防災対策課)

第2節 調査対象地の土壌

調査対象地周辺の土壌は『土地分類図 高知県 39』（経済企画庁 1974年）に拠れば多湿黒ボク土壌で、物部川下流域(南国市・香美市土佐山田町・香南市野市町他)を主要な分布域とする未固結堆積物(第四期)である。黒色土層の層厚が25~50 cm以上に及ぶ地域もあり、下層は灰色または灰褐色の場合が多く、大部分が水田として利用されている。『土佐州郡志』（宝永年間）吉原庄の項には「其土白黒」と記されている。

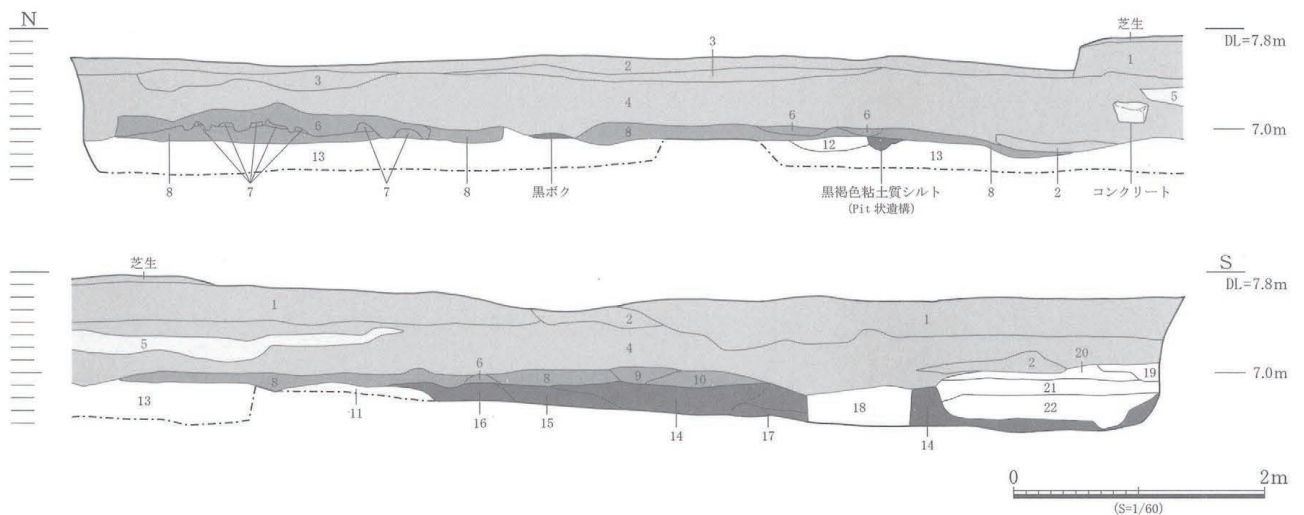
第3節 基本層序

調査区東壁で堆積状況を観察した。1~5層は公園造成による搬入土(客土層)であり、給水管施工に伴う巻砂(5層)等の検出も認められた。6~10層は旧表土面と考えられ、耕作に由来する残滓の埋存がみられる土壌で灰色化が進行している。灌漑水田土壌の下位には、強還元状態の作土層から溶出した鉄・マンガンが酸化・濃集して斑紋集積帯が形成されることがあり、7層においてマンガン斑紋が確認できる。

調査区における基本層序は以下の通りである。

基本層序

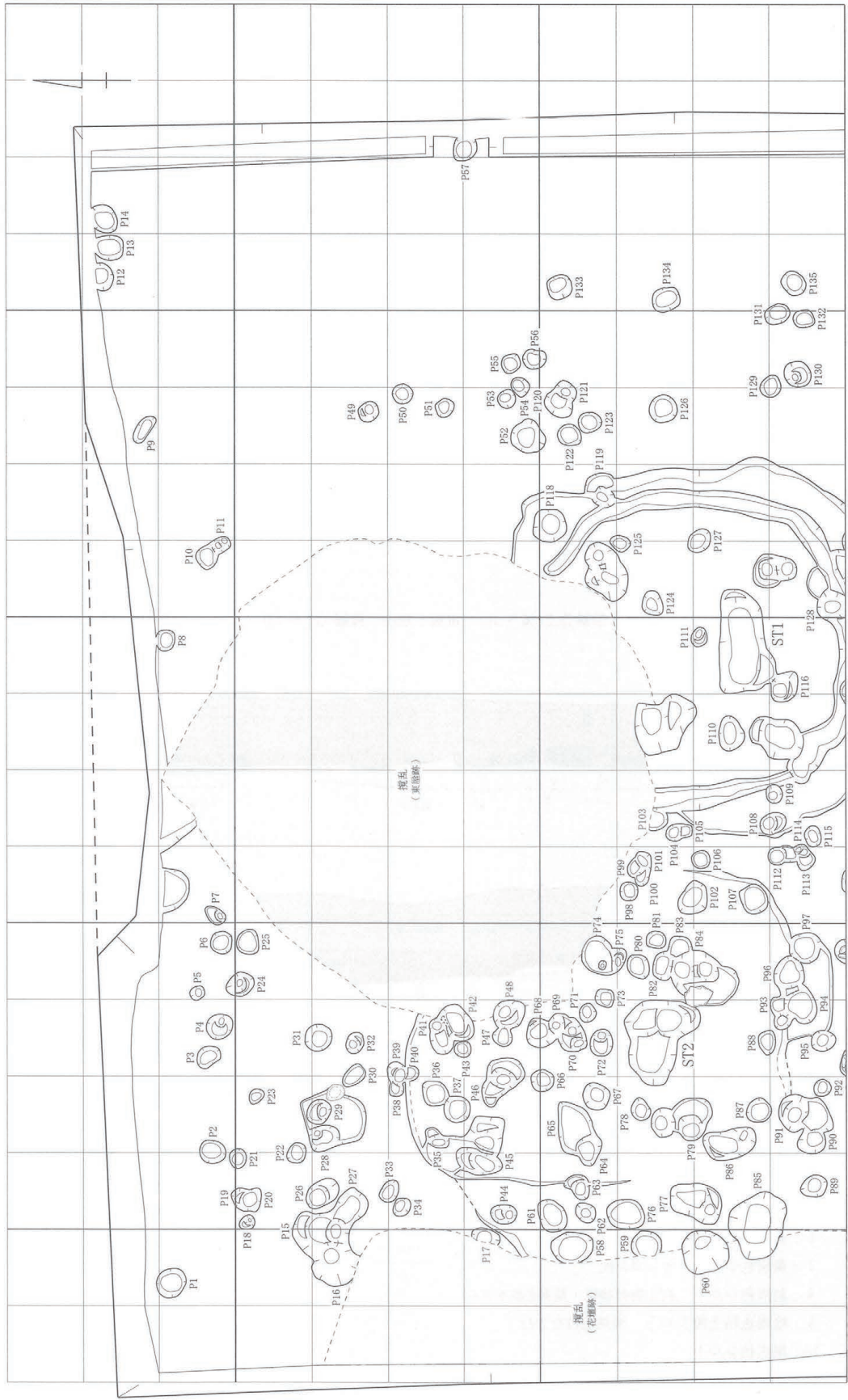
I層：造成土(1~5) II層：旧耕作土(6~10) III層：地山/礫層(11~13)



- | | |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 1：明黄褐色シルト 客土 | SX 1 |
| 2：砕石 | 14：暗褐色粘土質シルト 3~5 cm大の小礫を含む |
| 3：暗灰色粘土質シルト 0.5~5 cm大の小礫を含む | 15：黒褐色粘土質シルト 5~10 cm大の礫・遺物を含む |
| 4：暗オリーブ褐色粘土質シルト 0.5~10 cm大の小礫を含む | 16：黒褐色粘土質シルト 黄褐色粒・遺物を含む |
| 5：砂 水道管理設時の巻砂 | 17：黒褐色粘土質シルト |
| 6：灰色シルト 0.5~3 cm大の小礫を含む | 攪乱(溝渠状遺構) |
| 7：黄灰色シルト マンガン化 | 18：10~20 cm大の礫集中 |
| 8：黄灰色シルト 炭化物微細粒・黄褐色粒を含む | 19：黒褐色粘土質シルト ブロック状 |
| 9：暗褐色粘土質シルト 黄褐色粒を含む | 20：灰色粘土質シルト |
| 10：褐灰色シルト | 21：褐灰色粘土質シルト |
| 11：褐色粘土質シルト | 22：暗褐色粘土質シルト 10~15 cm大の礫を含む |
| 12：明黄褐色粘土質シルト 黒褐色粒を若干含む | |
| 13：礫層(黄褐色砂質シルト) | |

第9図 調査区東壁 土層断面図 (S=1/60)

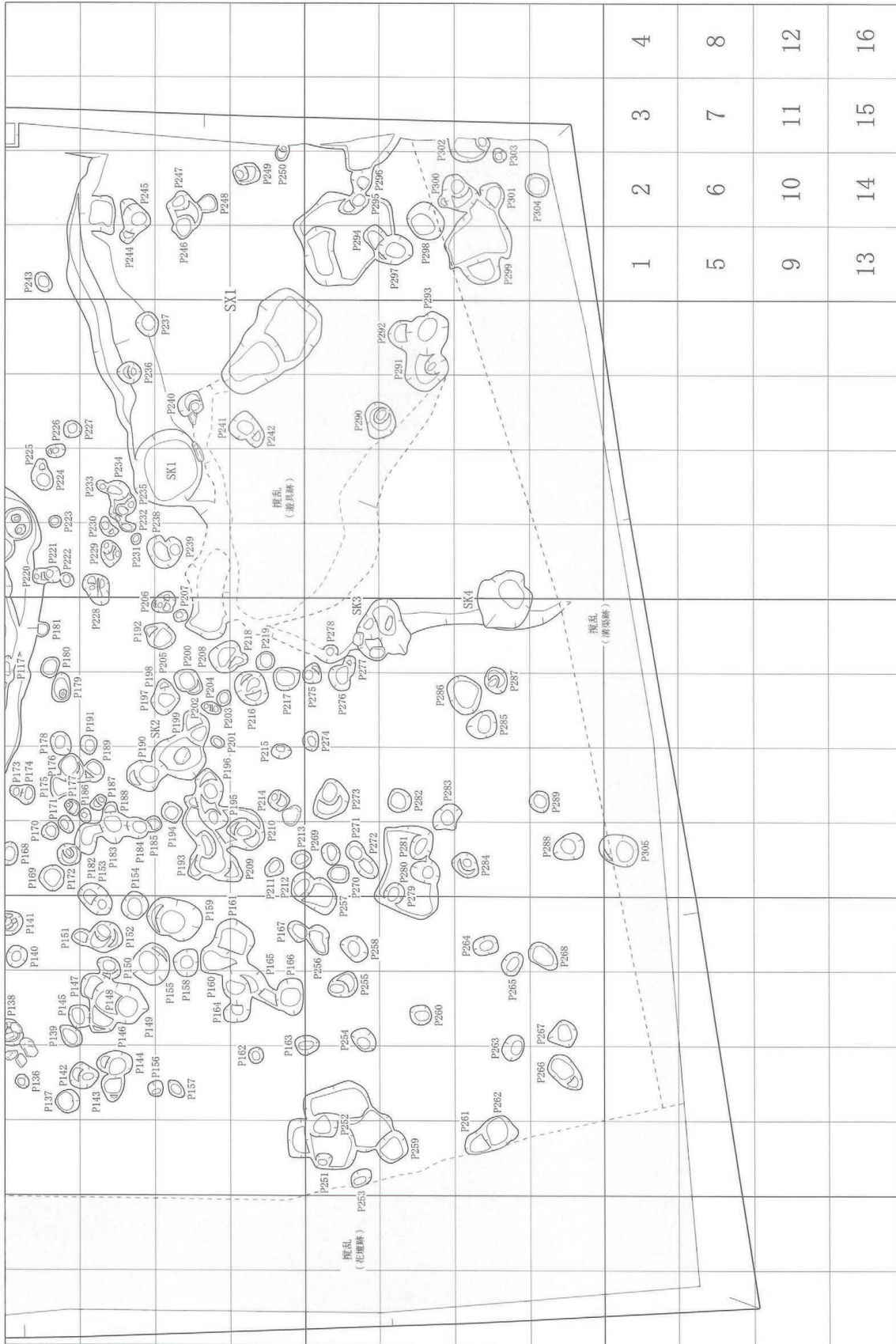
A B C D E



I

II

III



第10図 遺構配置図 (S=1/80)

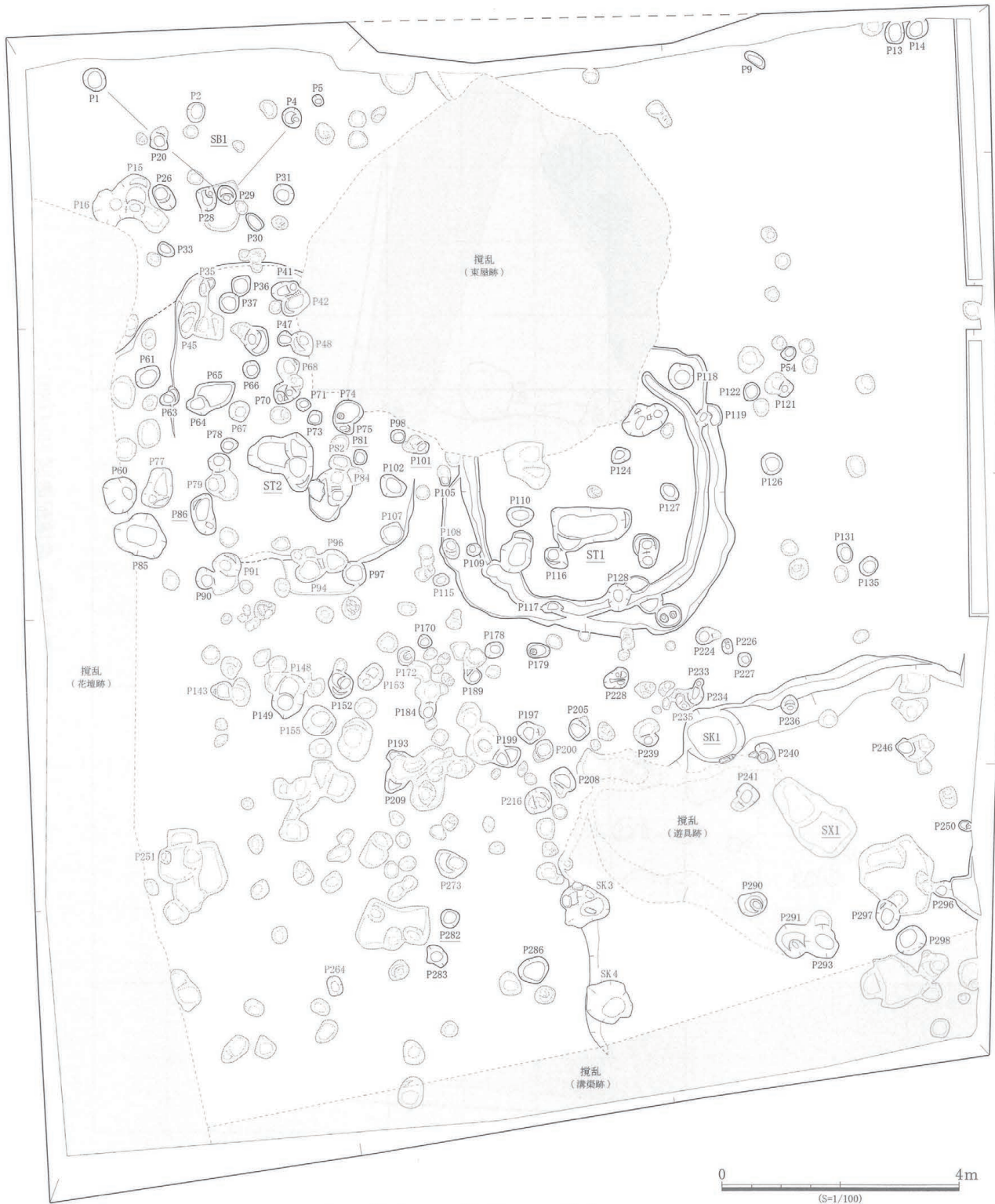
IV

V

VI

第4節 弥生後期後葉の遺構と遺物

本調査区で検出した弥生後期後葉を示唆する主な遺構は、竪穴住居状(建物)遺構 2 棟(軒)、性格不明遺構 1 基、ピット状遺構約 80 個である。分布には粗密がみられ、調査区中央附近を中心に検出が認められるが、遺構の多くは重複しており、当該期における相互の先後関係の把握については困難を伴う。



第 11 図 弥生土器片等出土遺構 (S=1/100)

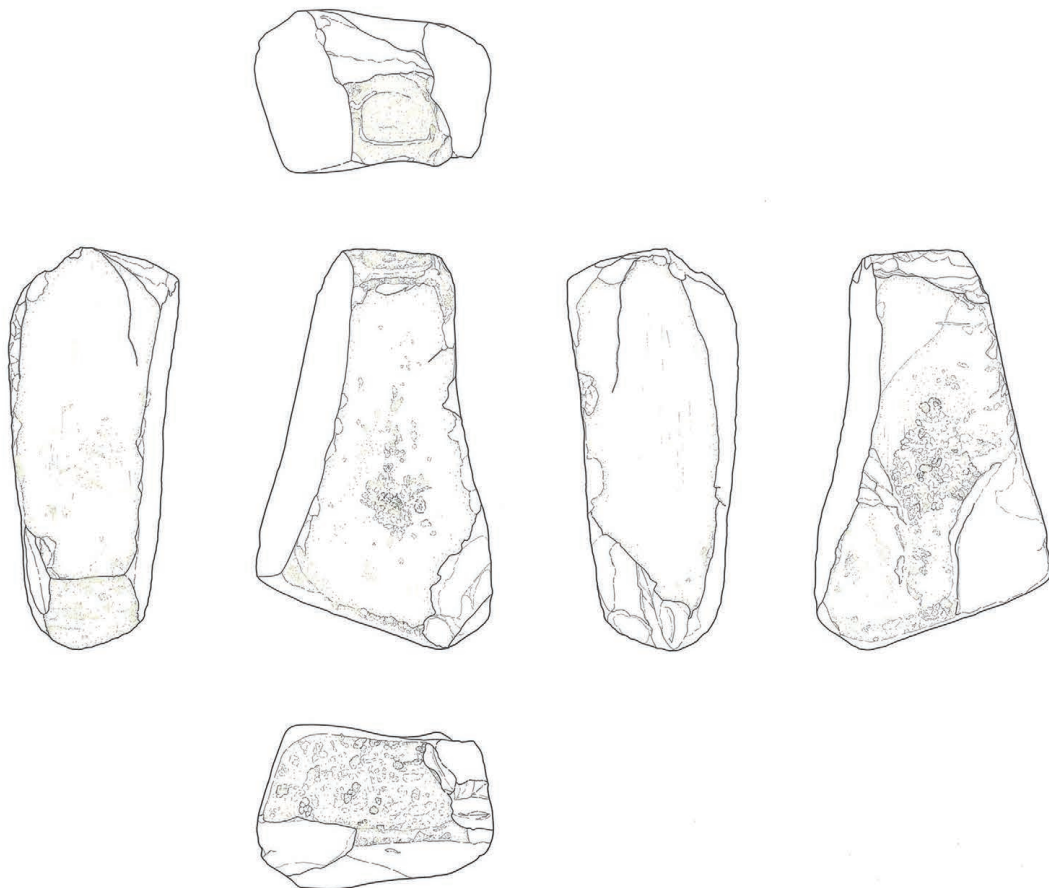
竪穴住居状遺構(ST)

「竪穴住居」とは掘立柱等による上部構造を有する半地下式の遺構を従来表現していたが、近年この名称に対して工房など住居施設以外の可能性を指摘して「竪穴建物」という用語が普及しつつある。本調査区における竪穴遺構の営為の証左は不明であるが、構造的属性として主柱穴とみられるピット状遺構と土坑状遺構(中央ピット)を検出しており、形態的に本報告書では慣例を考慮して旧称を用いて報告している。

調査の手順として土層(埋土)観察用に十字形畦(バンク)を設定し、サブトレンチを加工面まで掘削して埋積過程や床面状態の把握を行い、精査して覆土を除去した。遺構埋土中の遺物は状況に応じて水平・垂直位置を計測し、個体が確認できる遺物は図化や写真撮影等で記録した。尚、本書図版において遺物等の出土位置を示した垂直分布図は、空間的上下関係を重複的に模式図化したものであり、便宜上遺構断面図等に表示している。

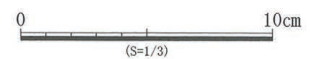


竪穴住居状遺構調査風景 (2014. 4. 15)



砥石 (ST 1 中央ピット出土遺物)

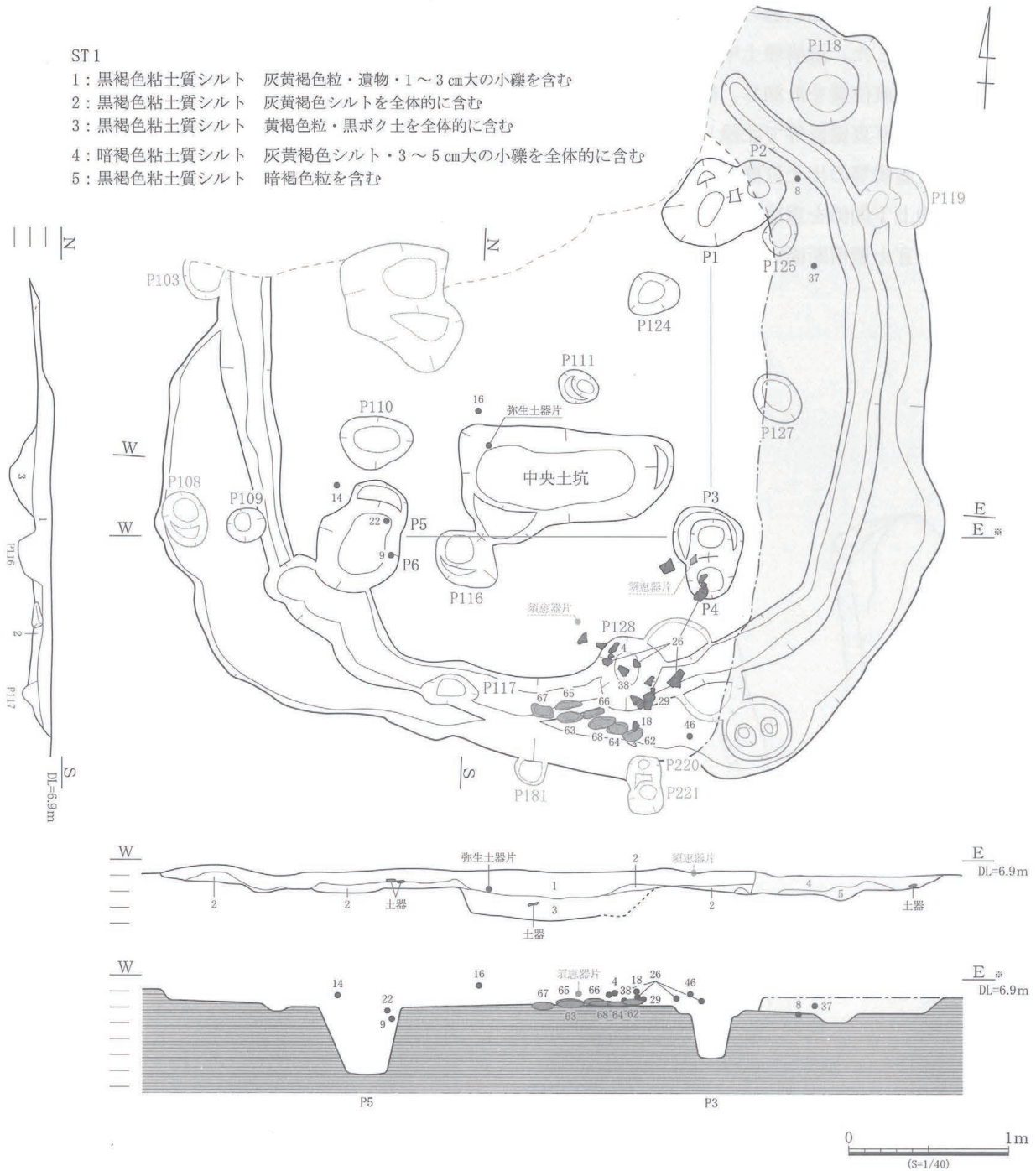
3



第 12 図 ST 1 出土遺物 1 (3 : S=1/3)

ST 1 (第 13~17 図)

調査区CⅢ・Ⅳ/DⅢ・Ⅳグリッドに位置し、検出高は6.84mを測る。北端は公園施設(東屋)撤去に伴う攪乱により未検出であるが、平面形態は隅丸形状を呈しており、長・短軸方向共に約5.0m前後を測る。上部は作土層により削平された可能性が考えられ、本来の竪穴部の深さは把握できないが、現状で約10~15cm前後が残存している。埋土は黒褐色粘土質シルト(1層)を基調とするが、小礫を包含する暗褐色粘土質シルト(4層)とは検出状態で境界が認められた。4層についてはベッド状遺構(高床部)等の残部の可能性も視野に検討が残り、その評価が課題となる。



第 13 図 ST 1 平面図・土層断面図・遺構断面図 (S=1/40)

ST1 調査風景 (2014. 4. 10)



遺構の主な平面構成要素としては、柱穴、壁溝、中央ピット等を検出している。主柱穴と考えられるのはP1～6で、配置から北西隅の柱穴は攪乱により未検出(削失)の可能性が高い。径約30～50cm前後、深さ27～43cmで、立柱に適合した形態を有しており、柱間寸法は約2.0～2.5mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、何れも重複している。半截による断面調査でも柱痕跡等は確認できず、先後関係は不明瞭であるが、4層をベッ

ド状遺構と捉えるならば、状況判断からP2・4・6が一次遺構の可能性が推察できる。4本主柱構造であり、南北軸方向はN-3°-Wを指向している。

壁溝は幅約30cm、断面は皿状を呈し深さは6cm前後を測る。壁際から約30～50cmほど離れて床面を囲繞しているが、東側は4層(ベッド状遺構：二次)下位より検出しており、一次遺構の可能性を示唆している。遺物は弥生土器片(60)十数点を出土している。検出面上からP4上面遺物と同一個体(26)の土器片(接合資料)の散布がみられ、同時期埋没の可能性を残している。また南側の壁際(床面)から礫石器(敲石：62～68)を集中して検出しており、遺構廃絶に伴う意図的な埋置(遺棄)の可能性も考慮される。

中央ピットと考えられる土坑状遺構は、長軸径1.34m、短軸径0.57m、深さ22cmを測る隅丸長方形状を呈している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調に黒ボク土由来の堆積物や黄褐色粒を多留しているが、炭化物・焼土等の検出は殆ど認められず、「炉」(燃焼施設)を意図した可能性は低いと考えられる。本遺構の機能は不明であるが、埋土中から砥石(3)を出土している。

遺物は1層を中心に弥生後期後葉を示唆する土器片約620点(40～61)が埋存しており、4層からも約70点(58・59)を出土しているが、1層は遺構廃絶後堆積層(覆土)と考えられるため、出土遺物の全てを積極的に存続期間との同時性に帰属させることは示せない。遺物は細片を主体として多くは床面から遊離しており、礫石器を除くと一括性を把握できる資料は僅少である。図示し得たものは壺(4～9)・甕(11～13)の口縁部及び底部(15～22)、鉢(26～37)等である。37はミニチュア土器で4層中より圧壊した状態で出土しており、遺構改修(ベッド状遺構増設)に伴う意図的な埋置(祭祀性)の可能性も考慮される。

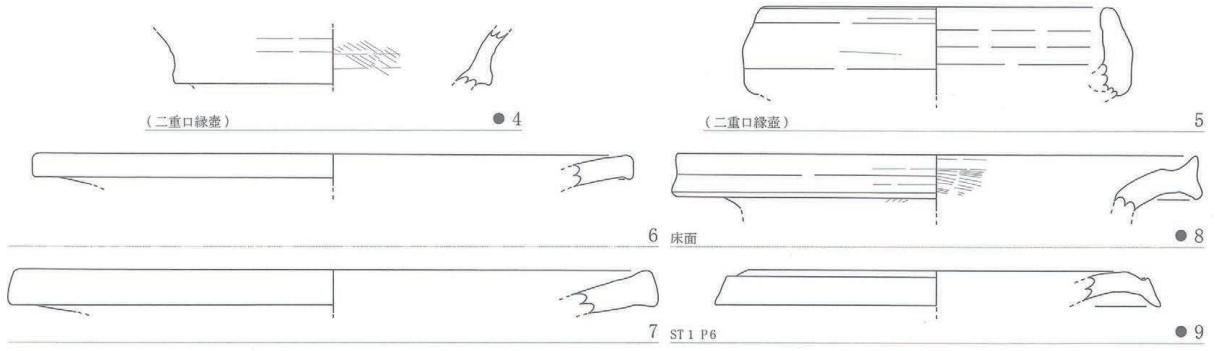
また弥生土器片に混在して須恵器片2点、土師器片1点(10)、土師質土器片約20点を出土しており、同片の多くは摩耗がみられる。これらは人為的作用を含む擾乱等の様々な要因により、埋積過程で混入した可能性が考えられる。

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	出土遺物・ (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ					
ST1 P1	楕円形状	55	45	32	6.676	黒褐色粘土質シルト	ST1 P2	—	
ST1 P2	楕円形状	45	30	27	6.668	黒褐色粘土質シルト	ST1 P1	—	
ST1 P3	楕円形状	45	35	33	6.716	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	ST1 P4	弥生土器 5点	
ST1 P4	円形状	30	25	27	6.720	黒褐色粘土質シルト	ST1 P3	弥生土器 8点	
ST1 P5	円形状	40	30	41	6.704	黒褐色粘土質シルト	ST1 P6	弥生土器 1点	
ST1 P6	円形状	55	50	43	6.693	黒褐色粘土質シルト	ST1 P5	弥生土器 8点	

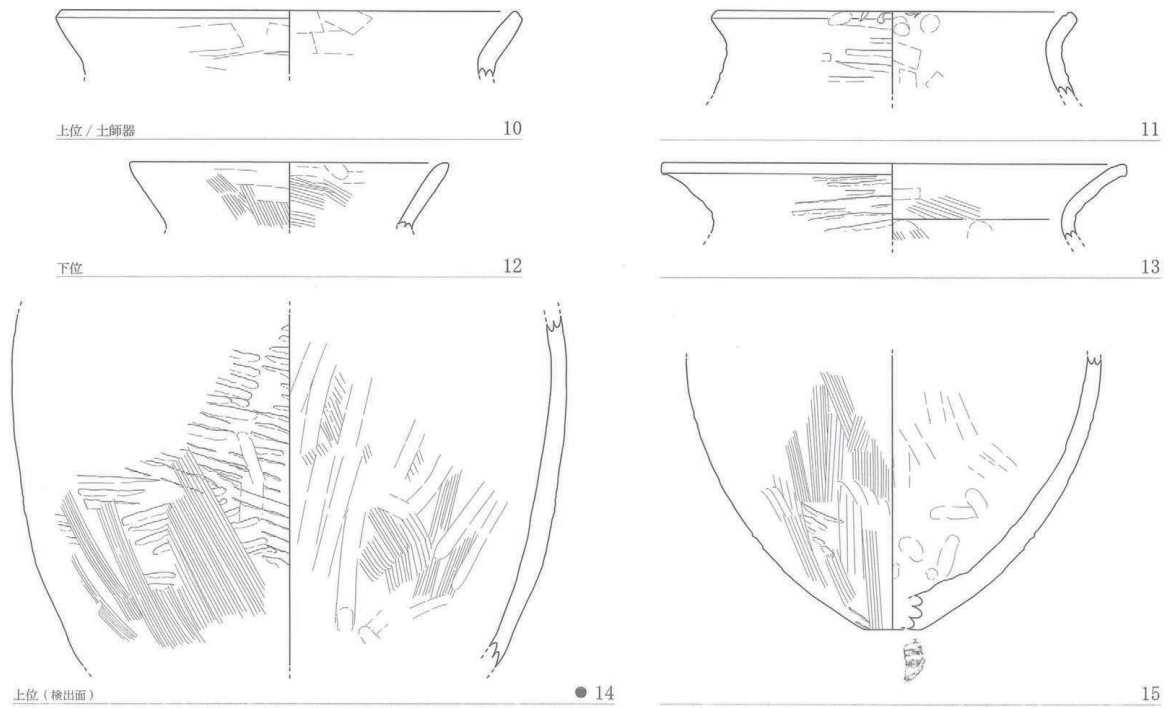
※ 径は概測 / 単位：cm

第2表 ST1 ピット状遺構(主柱穴)計測表

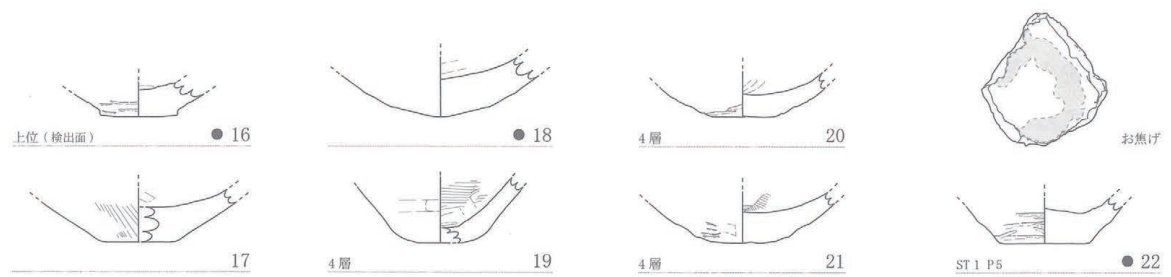
壺



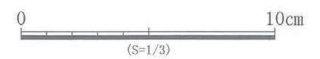
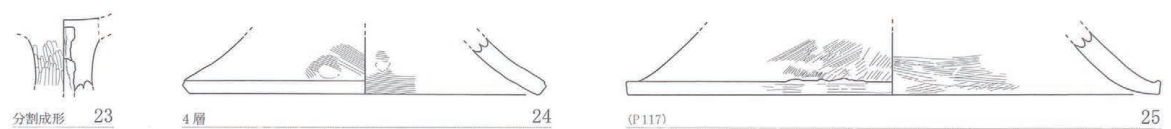
甕



底部

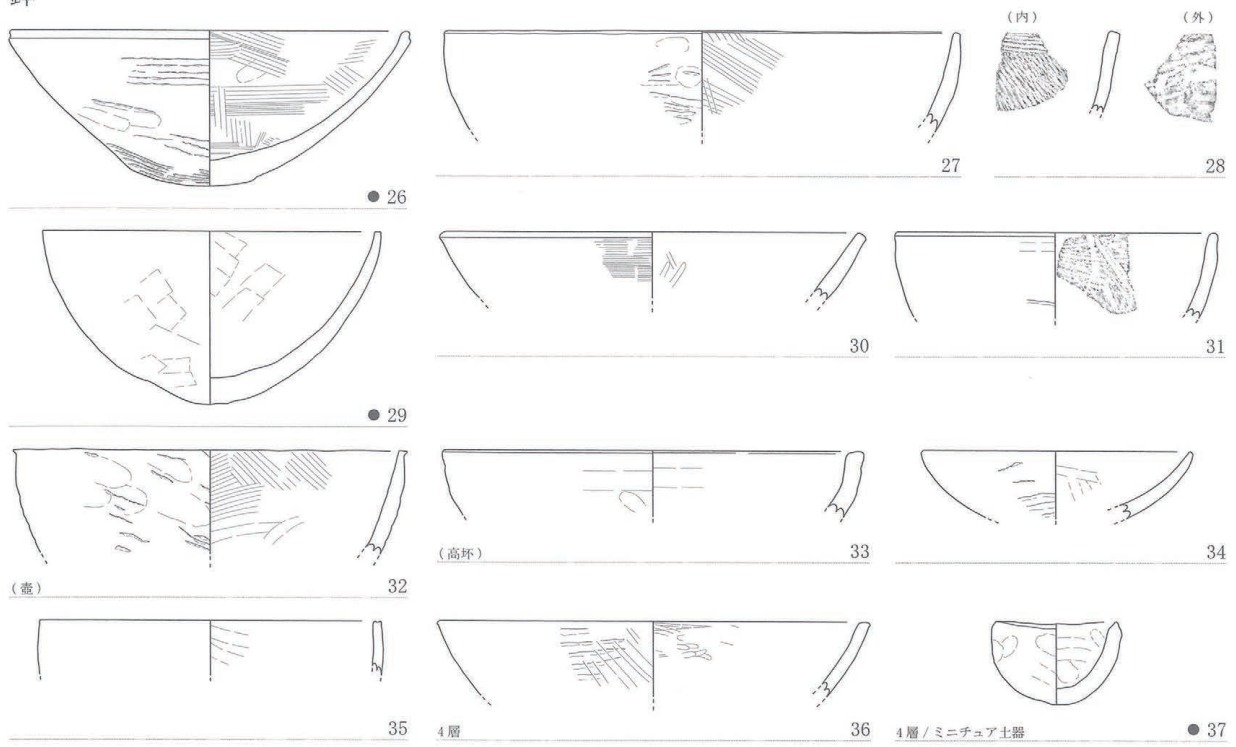


高坏

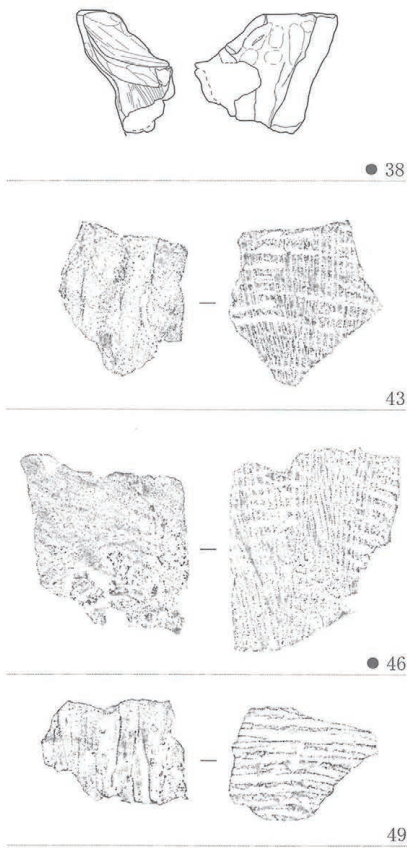


第14図 ST1 出土遺物 2(4~25 : S=1/3)

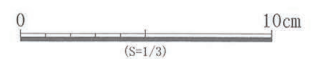
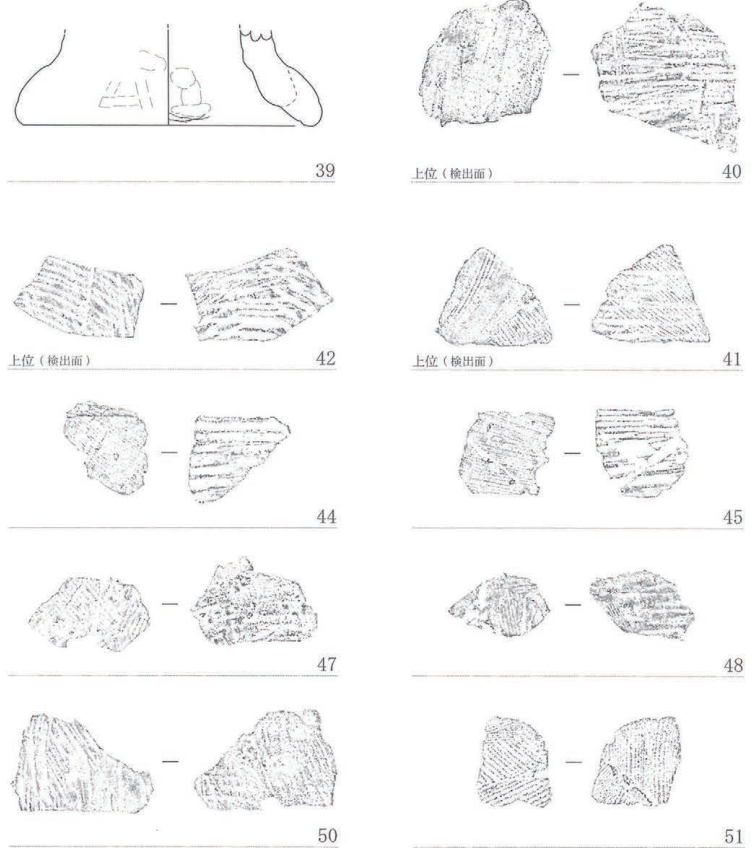
鉢



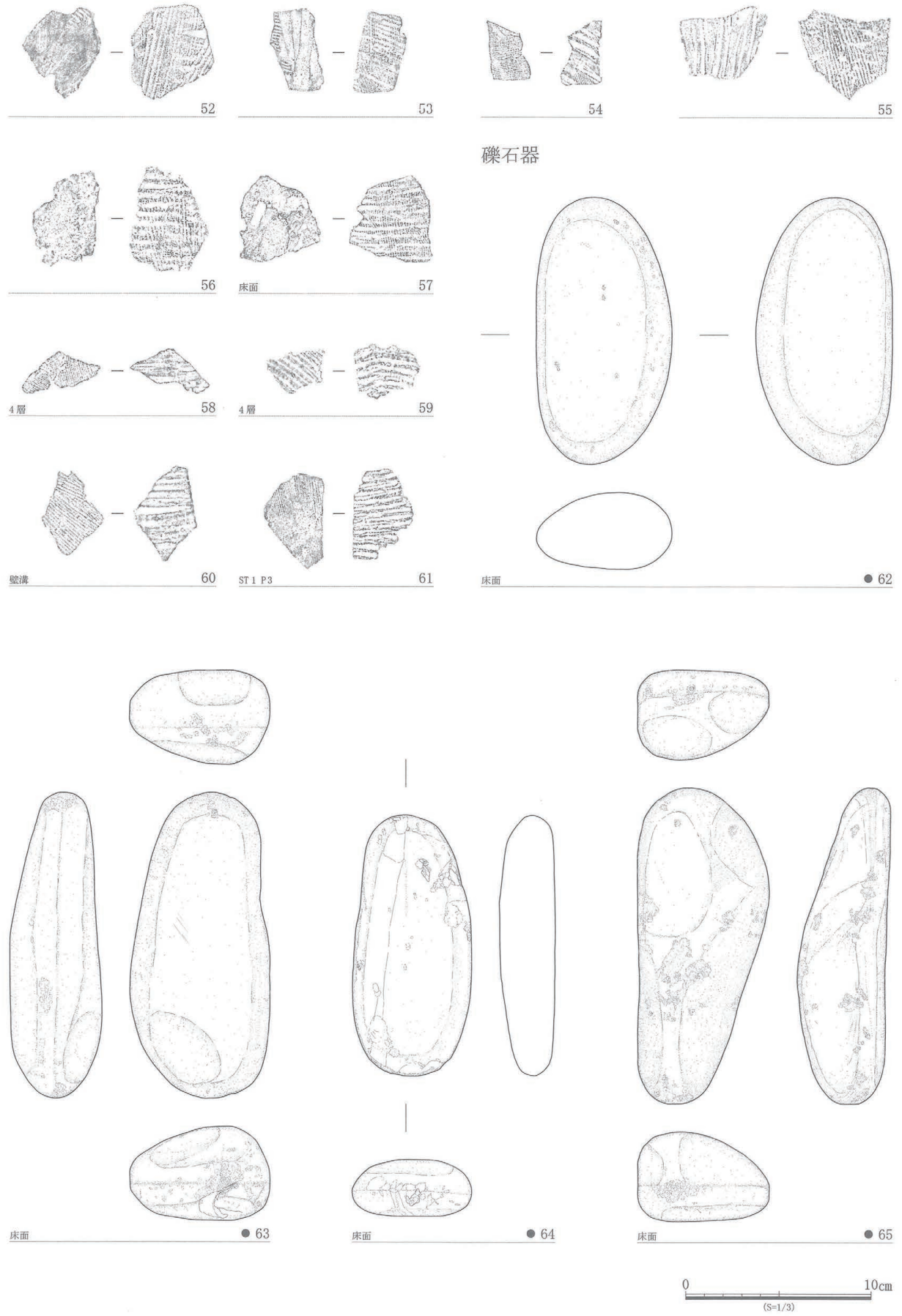
土製支脚



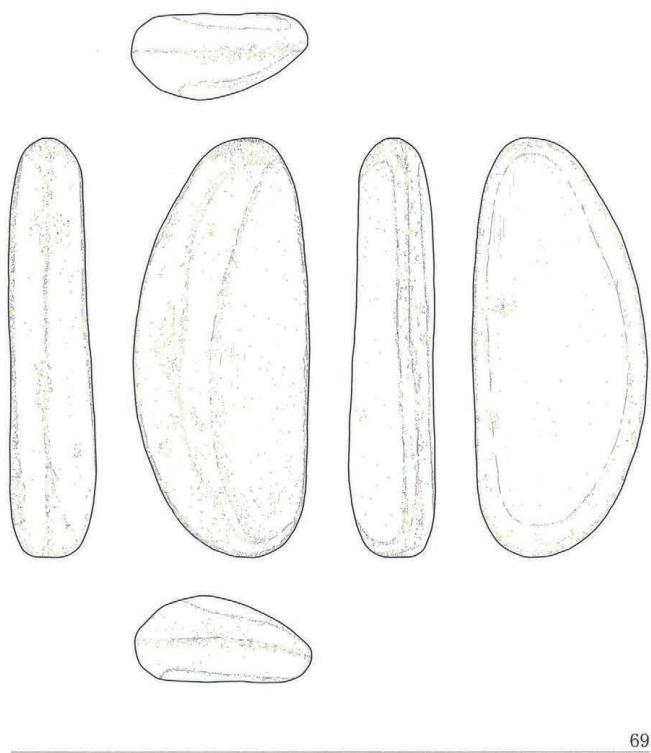
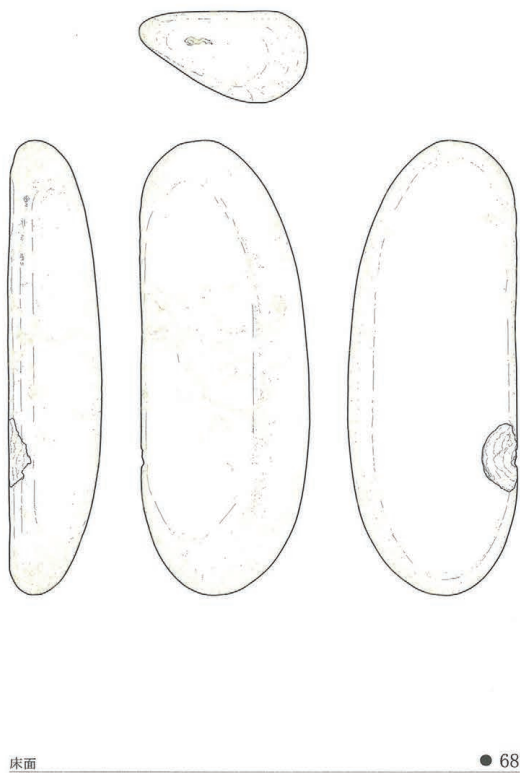
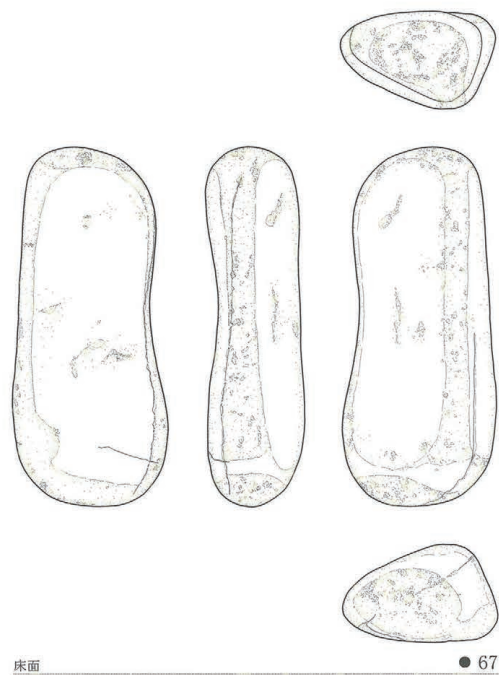
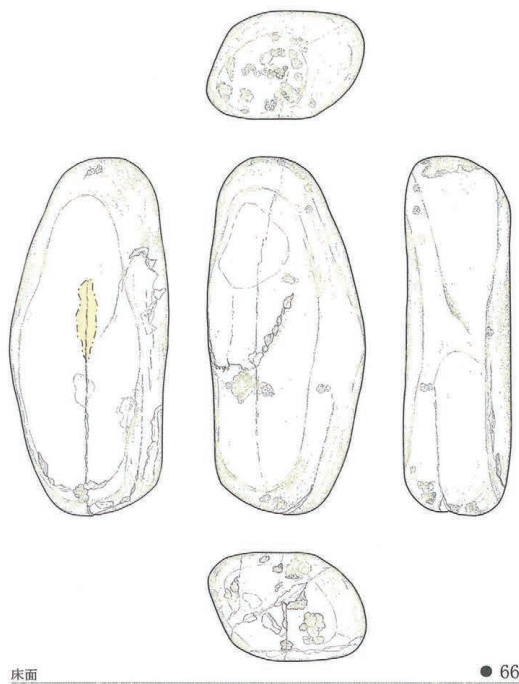
胴部 (拓本)



第 15 図 ST1 出土遺物 3(26 ~ 51 : S=1/3)



第16図 ST1 出土遺物4(52～65 : S=1/3)



第17図 ST1 出土遺物 5(66 ~ 69 : S=1/3)

ST 2 (第 18～20 図)

調査区 B II・III/C III グリッドに位置し、検出高は 6.90 m を測る。北東及び西端は公園施設(東屋・花壇)撤去に伴う攪乱により未検出であるが、平面形態は隅丸方形状を呈していると想定され、長・短軸方向共に約 5.0 m 前後を測る。上部は作土層により削平された可能性が考えられ、本来の竪穴部の深さは把握できないが、現状で約 10～15 cm 前後が残存しており、埋土は黒褐色粘土質シルト(1層)を基調とする。

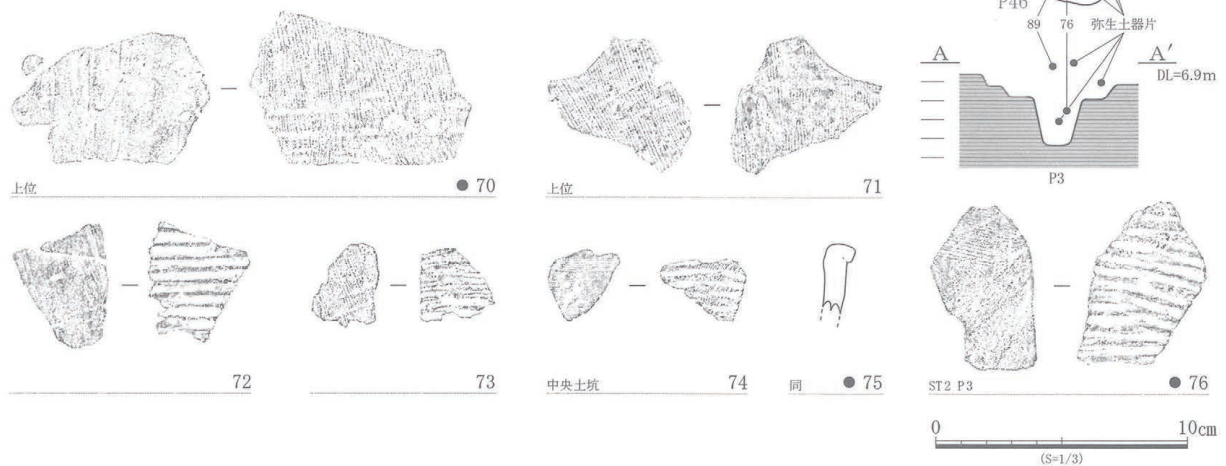
遺構の主な平面構成要素としては、柱穴及び中央ピット等を検出している。主柱穴と考えられるのは P1～3 で、配置から北東端の柱穴は攪乱により未検出(削失)の可能性が高い。径約 30～50 cm 前後、深さ 24～36 cm で、立柱に適した形態を有しており、柱間寸法は約 2.1 m を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、何れも他遺構と重複している。半截による断面調査でも柱痕跡等は確認できず、先後関係は不明瞭である。状況から 4 本主柱構造と想定でき、南北軸方向は N-16°-E を指向している。

中央ピットと考えられる土坑状遺構は、長軸径 1.12 m、短軸径 0.62 m、深さ約 20～30 cm を測る隅丸方形状を呈しており、東端凹状部の形状や断面観察により切合関係を有していると思われる。埋土は 5 cm 大の小礫が混じる黒(暗)褐色粘土質シルトを基調とし、凹状部は僅かに黄褐色粒を含んでいる。同所から被熱変色し炭化物(煤け)が付着した礫石器(98)を出土しているが、炭化物・焼土等は殆ど認められず、「炉」(燃烧施設)を意図した可能性は低いと考えられる。本遺構の機能は不明であるが、隣接する低床な土坑状遺構の機能面から、全長約 40 cm を測る台石(石皿)状の礫石器(77)を据置いた状態で検出しており、関連性の有無も含めて留意したい。

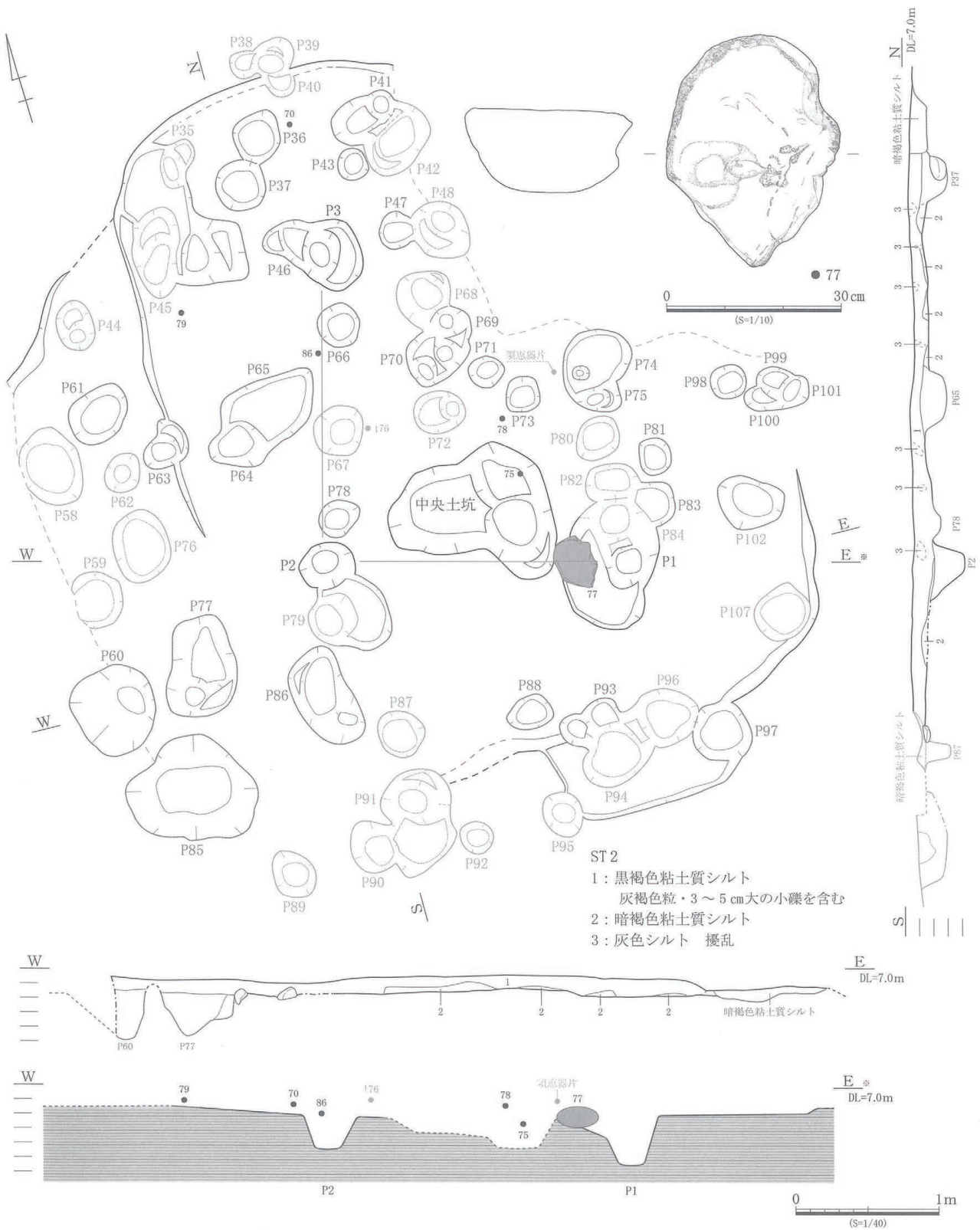
遺物は 1 層を中心に弥生後期後葉を示唆する土器片約 600 点(70～97)が埋存しているが、同層は遺構廃絶後堆積層(覆土)と考えられるため、出土遺物の全てを積極的に存続期間との同時性に帰属させることは示せない。図示し得たものは壺(78)、甕(79・80)、鉢(81～84)及び底部(85～87)等である。

また弥生土器片に混在して須恵器片 6 点(162)、土師器片 8 点(178)、土師質土器片約 100 点(166・167)、瓦質土器片 2 点(176)を出土しており、同片の多くは摩耗がみられる。これらは人為的作用(重複)を含む擾乱等の様々な要因により、遺構埋土中に混合された可能性が考えられる。

竪穴の掘削底面(加工面)からは扇状地性礫層を産出し、小礫を包含しない 2 層を貼床(機能面)と捉えることも考えられる。検出した多数のピット状遺構は、幾つかの古代～中世期の遺構を除いて本遺構に伴う可能性を含んでいるが、同一土壌による埋積のためその識別は判然とせず、積極的に構成要素として示せていない。



第 18 図 ST2 出土遺物 1(70～76 : S=1/3) / P3 平面図・遺構断面図 (S=1/40)



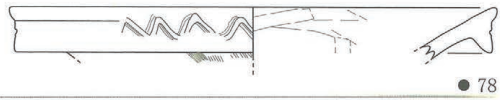
第19図 ST2 平面図・土層断面図・遺構断面図 (S=1/40)/ 出土遺物 2 (77: S=1/10)

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	出土遺物 (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ					
ST2 P1	楕円形状	50	30	35	6.810	黒褐色粘土質シルト	P84	弥生土器 22点	
ST2 P2	楕円形状	40	30	24	6.796	黒褐色粘土質シルト	(P79)	弥生土器 6点	
ST2 P3	垂円形状	50	45	36	6.803	黒褐色粘土質シルト	P46	弥生土器 23点	

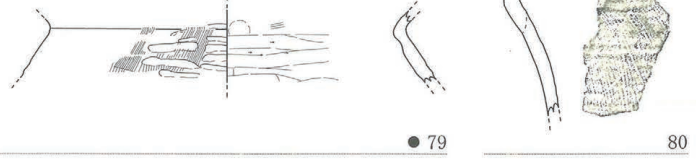
※ 径は概測 / 単位: cm

第3表 ST2 ピット状遺構(主柱穴)計測表

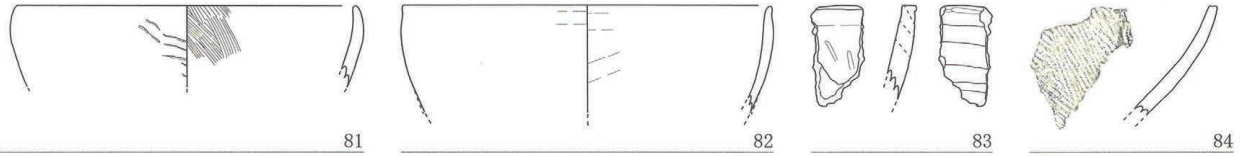
壺



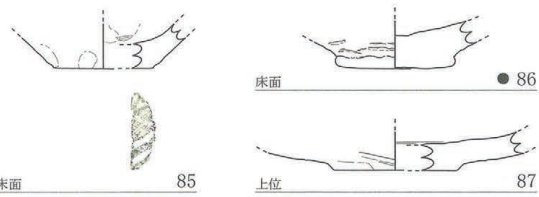
甕



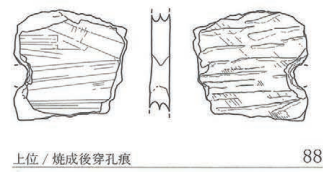
鉢



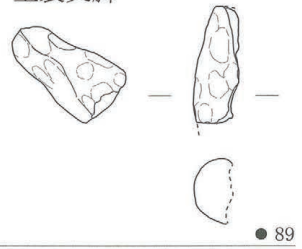
底部



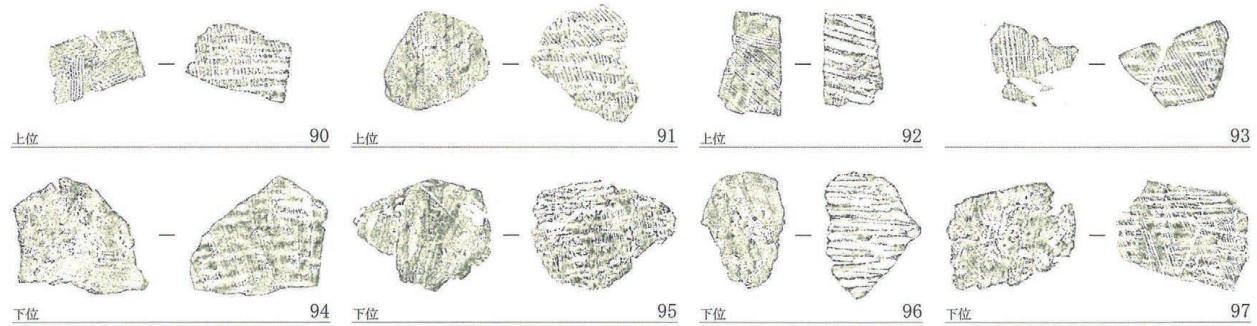
土製品（転用）



土製支脚



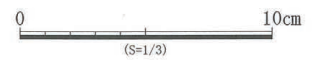
胴部（拓本）



礫石器



中央土坑（凹状部）/ 煤け・被熱痕



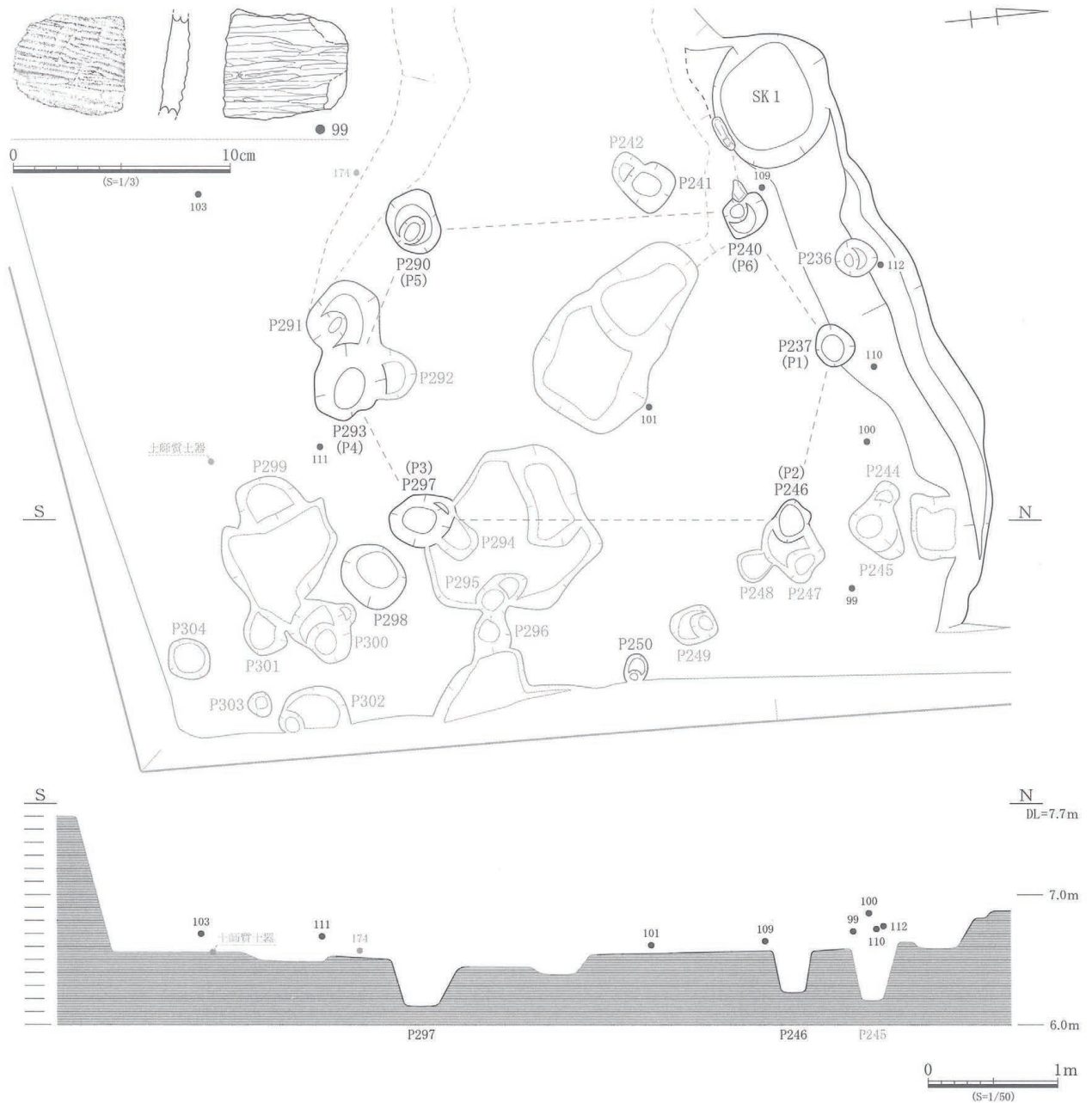
第 20 図 ST2 出土遺物 3(78 ~ 98 : S=1/3)

性格不明遺構(SX)

SX 1 (第21～23図)

調査区DIV・V/EIV・Vグリッドに位置し、検出高は6.84 mを測る。東端は調査区外に展開していると考えられ、遺構の大部分は溝渠状遺構及び公園施設(遊具)撤去に伴う攪乱により人為的擾乱を受けるが、平面形態は残存部から一辺約5.0～6.0 m前後を測る隅丸方形形状を呈していた可能性が看取できる。調査区東壁の土層断面図から上部は作土層により削平されたと考えられ、本来の掘方(堅穴部)の深さは把握できないが、現状で約30～40 cm前後が残存している。埋土は暗褐色粘土質シルト(14層:第9図)を基調とするが、小礫を多留する黒褐色粘土質シルト(15層/礫層)とは、検出状態で境界が認められた。

本遺構は調査区南東に位置する性格不明遺構(凹状地形)として調査したが、底面から幾つかのピット状遺構(柱穴)を検出し、形状から凹状部を掘方とする堅穴建物状遺構として捉えることとする。

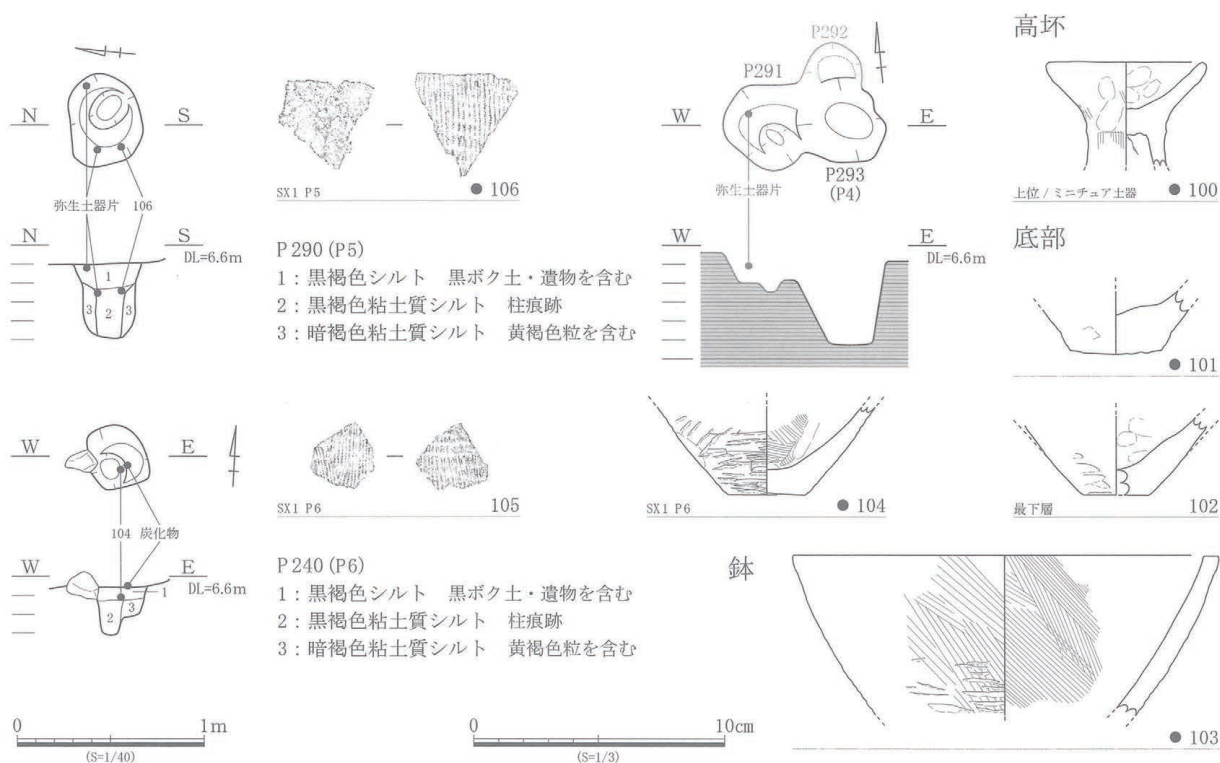


第21図 SX1 平面図・遺構断面図 (S=1/50)/出土遺物1(99:S=1/3)

遺構の主な平面構成要素として柱穴等を検出しており、支柱穴はP1~6の可能性が考えられる。径約30~50cm前後、深さは8~45cmを測り、P1を除いて立柱に適合した形態を有している。6本支柱構造と想定した場合、柱間寸法は梁行で約1.1~1.4m、桁行で約2.5~2.9mを測り、南北軸方向はN-3°-Eを指向している。埋土は黒褐色粘土質シルト及び黒褐色シルト(黒ボク土)を基調とし、一部の柱穴からは炭化物を検出している。半截による断面調査で、P5及び6において柱痕跡を観察できた。

遺物は14層を中心に弥生後期後葉を示唆する土器片約300点(110~115)が埋存しており、15層からも約40点(107~109)を出土しているが、14層は遺構廃絶後堆積層(覆土)と考えられるため、出土遺物の全てを積極的に存続期間との同時性に帰属させることは示せない。遺物は遺存状況から細片を主体として復元度は高くなく、多くは床面から遊離しており一括性を把握できる資料は乏しい。

また弥生土器片に混在して須恵器片4点、製塩土器片1点(160)、土師器片2点(173・174)、土師質土器片約60点、瓦質土器片1点を出土しており、同片の多くは摩耗がみられる。これらは人為的作用(攪乱)を含む擾乱等の様々な要因により、埋没過程で混入した可能性が考えられる。

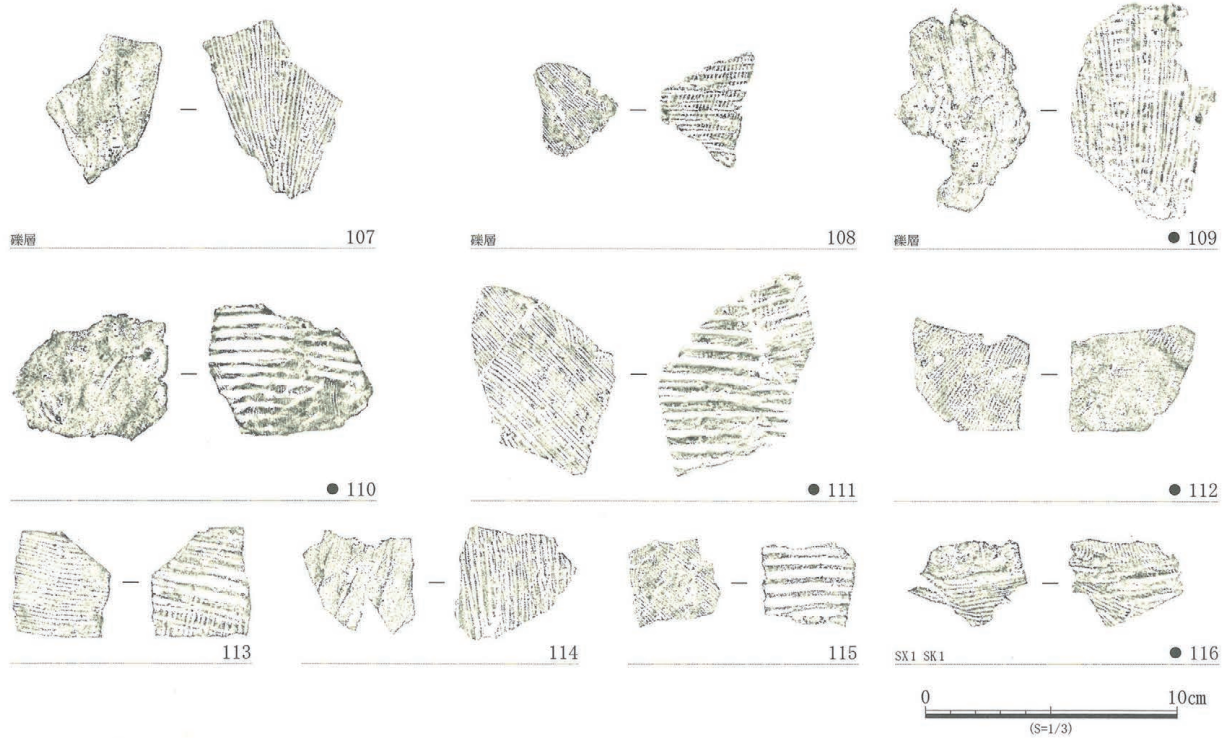


第22図 SX1 P4~6 平面図・土層断面図・遺構断面図 (S=1/40)/出土遺物 2(100~106: S=1/3)

遺構番号	平面形状 (概形)	規模 (cm)			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	出土遺物 (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ					
SX1 P1	円形状	33	30	8	6.617	黒褐色粘土質シルト	—	—	P237
SX1 P2	不整形形状	34	28	32	6.568	黒褐色粘土質シルト	(P247)	弥生土器 1点	P246
SX1 P3	楕円形状	53	41	36	6.501	黒褐色粘土質シルト	P294	弥生土器 1点	P297
SX1 P4	不整形形状	56	55	45	6.518	黒褐色粘土質シルト	P291・292	弥生土器 炭化物 20点 少量	P293
SX1 P5	円形状	48	37	42	6.506	黒褐色シルト (黒ボク土) 暗褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	弥生土器 炭化物 7点 少量	P290
SX1 P6	楕円形状	38	34	31	6.560	黒褐色シルト (黒ボク土) 暗褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	弥生土器 炭化物 5点 少量	P240

第4表 SX1 ピット状遺構(支柱穴)計測表

胴部（拓本）

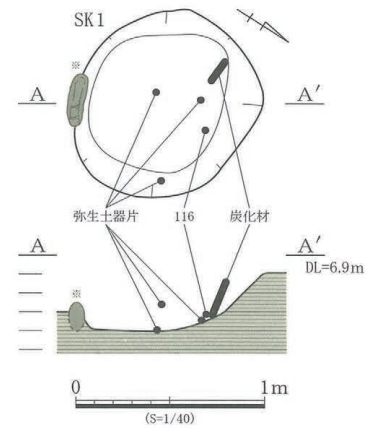


SX 1 (第 23 図)

調査区DIV-6・7・10・11 グリッドに位置し、SX 1の北西隅から検出した土坑状遺構である。検出高は6.61(6.79)mを測る。平面形態は円形状を呈し、長・短軸径共に0.9~1.0m前後を測る。断面形態は浅鉢状を呈し、深さは約10cm前後を遺存しているが、北側の掘方(SX 1)からは深さ約30cm前後を測る。埋土は黒ボク土を由来とする黒褐色シルトの単層であるが、炭化物・焼土粒を多留しており、壁面から炭化材を検出している。

遺物は埋土中から弥生後期後葉を示唆する土器片(116)を出土している。

南側の上端から袖石状に礫(※約30×10cm)を検出しているが、扇状地性礫層に伴う産状と考えられ、また被熱の痕跡も認められない。本遺構は検出状況などからSX 1に附帯する可能性を主眼に、機能については慎重な検討が求められる。



第 23 図 SX 1 SK 1 平面図・遺構断面図 (S=1/40) / 出土遺物 3(107 ~ 116 : S=1/3)



SK 1 炭化材検出状態 (2014. 5. 27)



SK 1 土層断面 (2014. 5. 27)

ピット状遺構(P)

本調査区においてピット状遺構は時期不明を含めて約 300 個を検出している。弥生後期後葉の遺物を出土するなど当該期の可能性を含む遺構は約 80 個を抽出できるが、規則性(相関関係)は殆ど認められなかった。重複関係を有している遺構も多数存在しており、擾乱等により土師質土器片等が混入している状況も散見されるなど、当該期及び古代～中世期の遺構が混在している状態が看取できる。

遺構の平面形状は概形で円形状を基本とし、径は 30 cm 台を測るものが 4 割弱を占めている。断面形は立柱を意図した形状を呈するものが多いが、検出面から底面までの高低差が低床な遺構は柱穴として根入れが不十分な印象を受け、固定力(自立性)に不安が残る。これは主に調査区南西を除く遺構群の掘方上部が作土層に削平された可能性や、堅穴住居状遺構等の底面から検出していることが要因であり、浅いピット状遺構は主体部を削失した残部の可能性も考えられる。

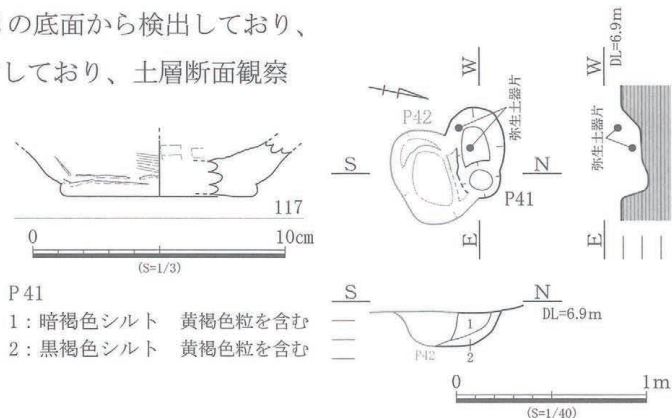
検出したピット状遺構は平面観察の後、半截して柱痕跡等の有無を確認するなどして精査したが、殆どの遺構は黒褐色粘土質シルトを基調とする単層埋土であった。重複関係を有する遺構では先後関係を確認するため適所で断面調査を行い、必要に応じて土層断面図を作成した。

調査区に散在する多数のピット状遺構は柵列(柱穴列)跡等を含む遺構群を構成していたと考えられるが、建物状配置等の企劃的な位置関係を有する柱穴群を抽出することは現状では困難を伴い、不等規格などの変則的な平面形の可能性も考慮するなど、復元作業には留意する必要がある。

P41(第 24 図)

調査区 B II-11 グリッドに位置する。ST 2 の底面から検出しており、検出高は 6.81 m を測る。P42 と重複関係を有しており、土層断面観察等により先行する時期の遺構と考えられる。平面形状は楕円形状を呈し、現状で長径 48 cm、短径 31 cm、深さ 14 cm を測る。埋土は暗褐色シルトを基調としている。

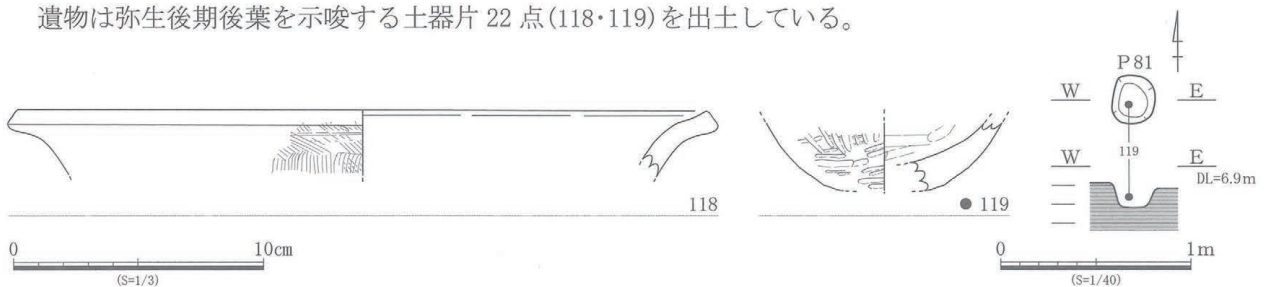
遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片 10 点(117)を出土している。



P81(第 24 図)

調査区 B III-8 グリッドに位置する。ST 2 の底面から検出しており、検出高は 6.79 m を測る。平面形状は円形状を呈し、現状で長径 26 cm、短径 23 cm、深さ 13 cm を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

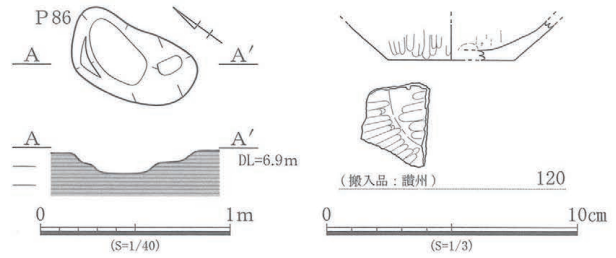
遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片 22 点(118・119)を出土している。



第 24 図 P41・81 平面図・土層断面図・遺構断面図 (S=1/40) / 出土遺物 (117～119 : S=1/3)

P 86(第 25 図)

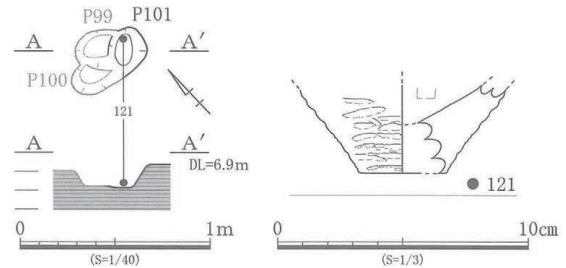
調査区BⅢ-10グリッドに位置する。ST 2の底面から検出しており、検出高は6.76mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、現状で長径69cm、短径37cm、深さ13cmを測る。形状や断面観察により重複関係を有していると思われる。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。



遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片6点を出土しており、120は搬入品の可能性が考えられる。

P 101(第 25 図)

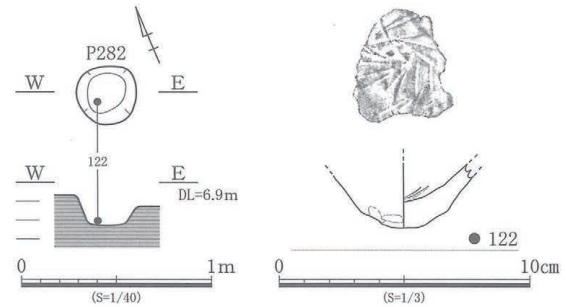
調査区CⅢ-5グリッドに位置する。検出高は6.84mを測り、P99・100と重複関係を有している。平面形状は歪円形状を呈し、現状で長径22cm、短径20cm、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色シルト(黒ボク土)を基調としている。



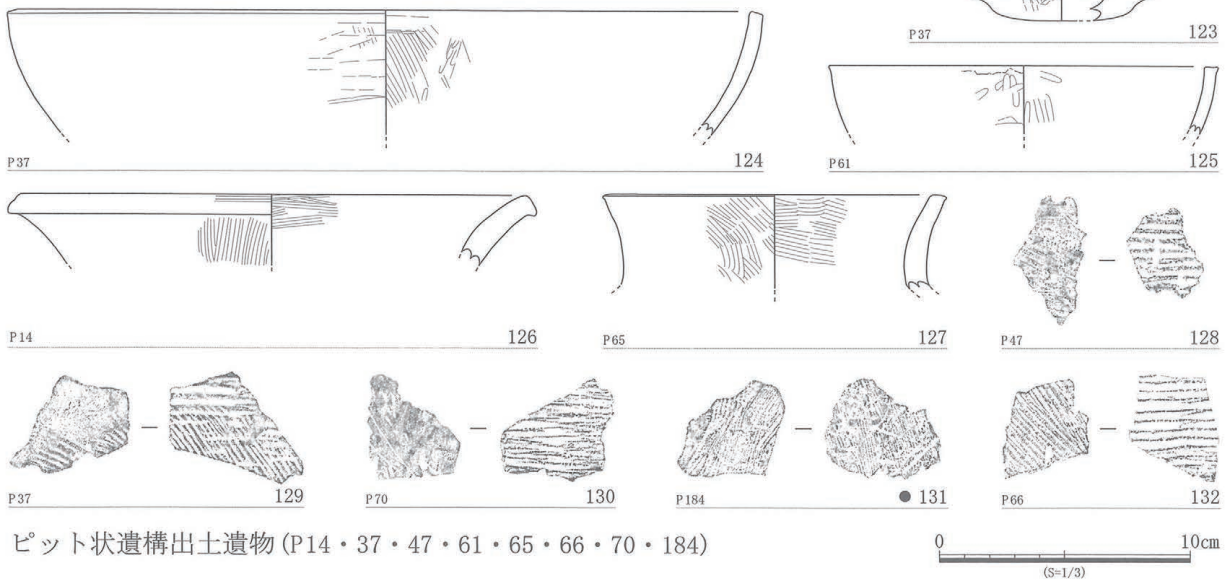
遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片1点(121)を出土している。

P 282(第 25 図)

調査区CV-6グリッドに位置する。扇状地性礫層から検出しており、検出高は6.80mを測る。平面形状は円形状を呈し、現状で長径33cm、短径32cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。



遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片1点(122)を出土している。



ピット状遺構出土遺物(P14・37・47・61・65・66・70・184)

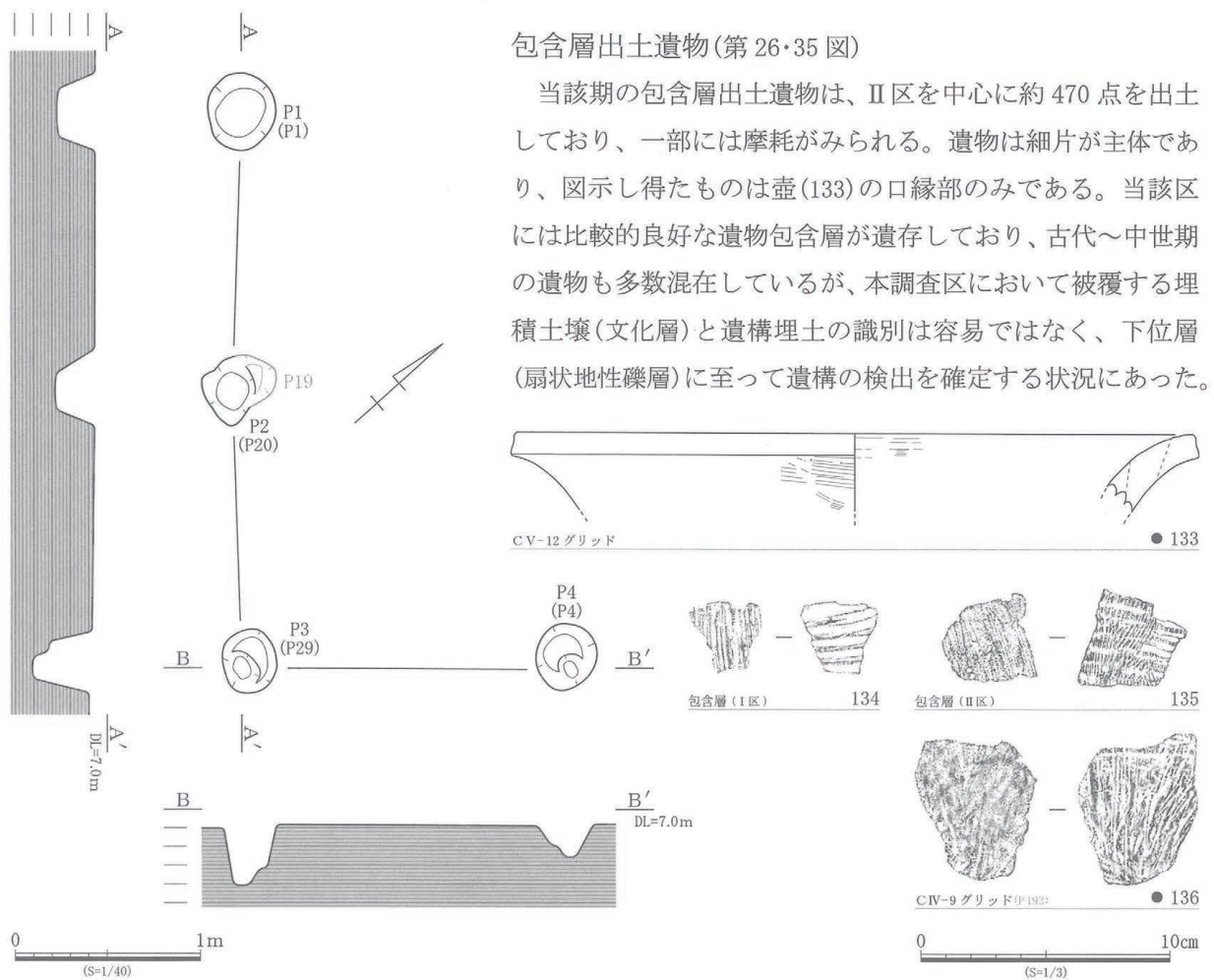
第 25 図 P 86・101・282 平面図・遺構断面図 (S=1/40)/ 出土遺物 (120～132 : S=1/3)

掘立柱建物跡(SB)

SB 1 (第26図)

調査区A I/B I・IIグリッドに位置し、検出高は6.93mを測る。北端は調査区外に展開していると考えられ、建物規模は不明である。現況での長軸(桁行)、短軸(梁行)方向に即した柱間寸法は、桁行(間)で約1.5m、梁行で約1.8mを測り、棟(桁行)方向はN-48°-Wを指向している。柱穴群の平面形状は円形状を基本とし、径約30~40cm前後、深さ約20~30cm前後を測り、掘削深度は一様ではない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とするが、半截による断面調査では柱痕跡等の有無は確認できなかった。

本遺構は発掘作業中に柱筋の通りに留意するなどして抽出した柱穴列であり、掘立柱建物跡を構成する柱穴群の可能性を残す事例として報告している。



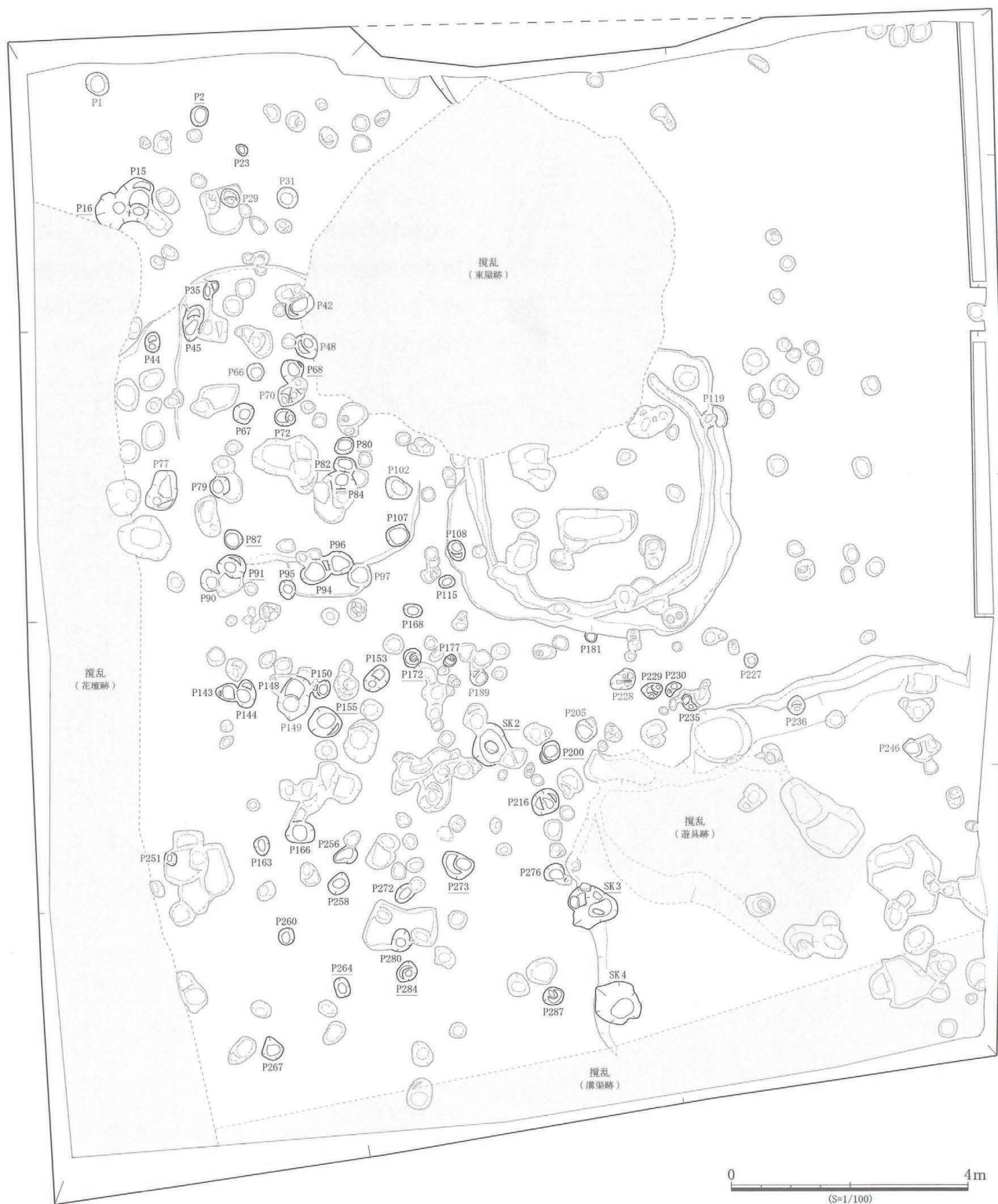
第26図 SB1 平面図・遺構断面図 (S=1/40)/ 包含層出土遺物 (133~136 : S=1/3)

遺構番号	平面形状 (概形)	規模 (cm)			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	出土遺物 (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ					
SB 1 P1	歪円形状	41	37	21	6.932	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	弥生土器 1点 土師質土器 2点	P1
SB 1 P2	不整円形状	31	28	23	6.943	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P19	弥生土器 2点	P20
SB 1 P3	歪円形状	34	30	33	6.908	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	弥生土器 2点 土師質土器 1点	P29
SB 1 P4	円形状	35	33	18	6.916	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	—	P4

第5表 SB1 ピット状遺構(主柱穴)計測表

第5節 古代～中世期の遺構と遺物

本調査区において古代～中世期を示唆する主な遺構は、数基の土坑状遺構とピット状遺構約50個を検出している。分布には粗密がみられ、調査区西半を中心に偏在して検出が認められるが、遺構の多くは重複しており、当該期における相互の先後関係の把握については困難を伴う。



第27図 古代～中世土器片等出土遺構 (S=1/100)

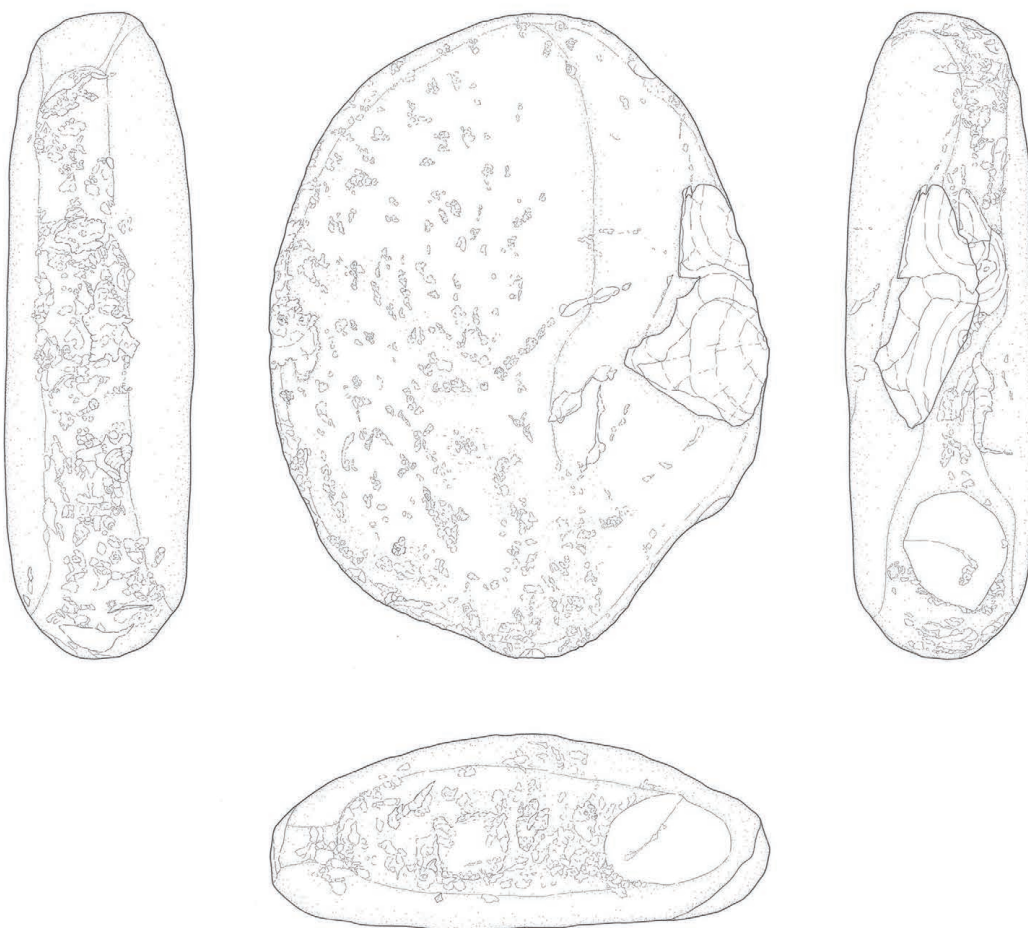
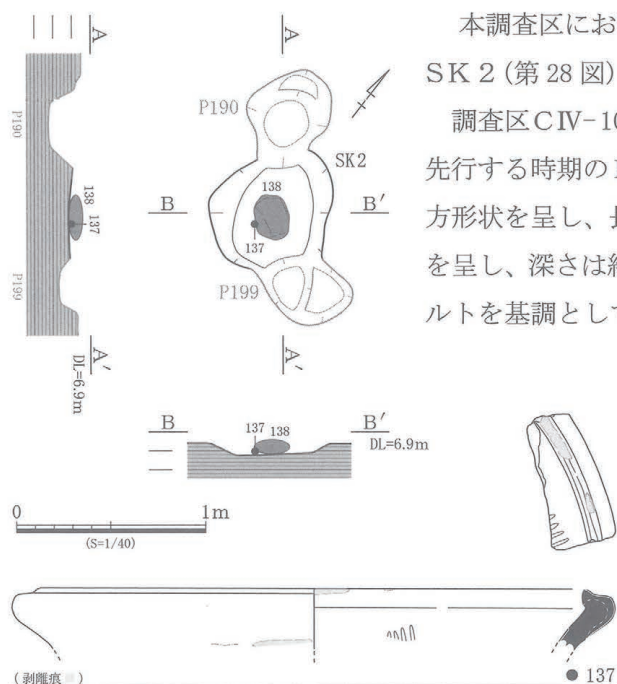
土坑状遺構(SK)

本調査区においては、形態・機能共に捉え難い様相を呈している。

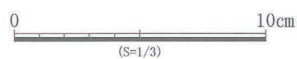
SK 2 (第 28 図)

調査区CIV-10・11 グリッドに位置する。検出高は 6.85mを測り、先行する時期の P190・199 と重複関係を有している。平面形態は不整形を呈し、長・短軸径共に約 70 cm 前後を測る。断面形態は凹状を呈し、深さは約 10 cm 前後を遺存している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としており、先行期との土色(性)の判別は困難を伴う。

遺物は須恵器片 1 点、土師器片 1 点、土師質土器片 7 点の他、摩耗した弥生土器片 2 点を出土している。重ね焼きによる剥離痕が観察される播鉢状の須恵器片(137)は、その形状から非在地系の可能性が指摘されている。また底面中央附近からは、石錘の可能性を残す礫石器(138)を検出している。



● 138



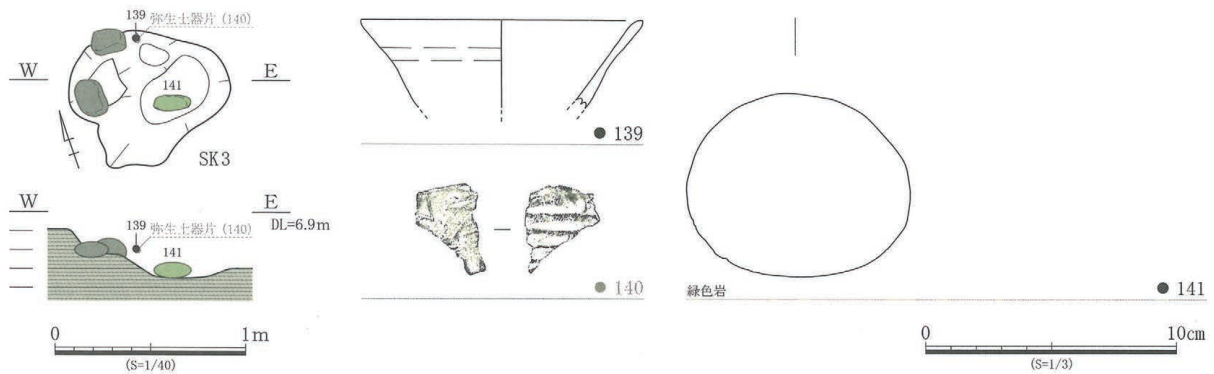
第 28 図 SK2 平面図・遺構断面図 (S=1/40) / 出土遺物 (137・138 : S=1/3)

SK 3 (第 29 図)

調査区CV-4・8グリッドに位置する。検出高は 6.80 mを測り、性格不明の凹状地形と重複関係を有している。平面形態は不整形状を呈し、長軸径 85 cm、短軸径 73 cm、深さ約 25~30cm前後を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は土師質土器片 3 点と弥生土器片 11 点を出土している。多くは細片であり、何れも摩耗がみられる。図示し得た土師質土器の坏(139)に共伴して弥生土器片(140)が出土しており、遺構の埋没過程で時期差を伴う遺物が擾乱等による変位も含めて混在している状況が看取できる。また底面からは、周辺に産出する扇状地性礫群とは異なる礫石器(141)を検出している。

本遺構は、平面及び断面形態から切合関係を有していると思われ、埋置された棒状礫(141)は先行する時期の所産の可能性を含んでいる。



第 29 図 SK 3 平面図・遺構断面図 (S=1/40) / 出土遺物 (139 ~ 141 : S=1/3)

ピット状遺構(P)

本調査区では時期不明を含めて多数のピット状遺構を検出している。古代~中世期の遺物を出土するなど当該期の可能性を含む遺構は約 50 個を抽出できるが、発掘作業中において規則性を把握することは容易ではなかった。重複関係を有している遺構も多く存在しており、擾乱等により弥生土器片等が混入している状況も散見されるなど、当該期及び弥生後期後葉の遺構が混在している状況が看取できる。

遺構の平面形状は概形で円形状を基本とし、径は 30 cm 台を測るものが約 5 割を占めている。断面形は立柱を意図した形状を呈するものが多いが、検出面から底面までの高低差が低床な遺構は柱穴として根入れが不十分な印象を受け、固定力(自立性)に不安が残る。これは遺構群の掘方上部を土層に削平された可能性に加え、調査区を被覆する埋積土壌(遺物包含層)や堅穴住居状遺構等の覆土と、当該期の遺構埋土の識別が判然とせず、下位層において検出に至った状況等が要因の一つとして考えられる。

現状では建物状配置等の企劃的な位置関係を有する柱穴列を抽出することは困難を伴い、復元作業には変則的な平面形の可能性も考慮すると共に、構成する柱穴群の属性や同時性にも留意する必要がある。

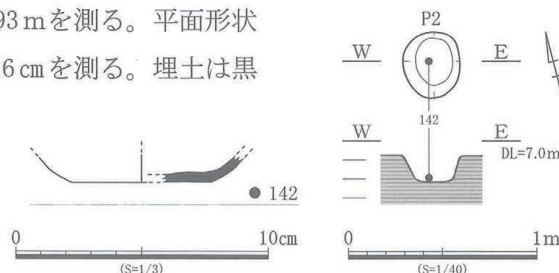
須恵器片出土の主なピット状遺構

本調査区において須恵器片を出土したピット状遺構は約 10 個を検出している。出土状況等から遺構の上限を示す資料として、大凡の時期比定の依拠としている。

P2 (第 30 図)

調査区BI-13・14グリッドに位置する。検出高は 6.93 m を測る。平面形状は円形状を呈し、現状で長径 35 cm、短径 31 cm、深さ 16 cm を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、検出面で観察される灰褐色シルトは上位層(作土層)の影響が考えられる。

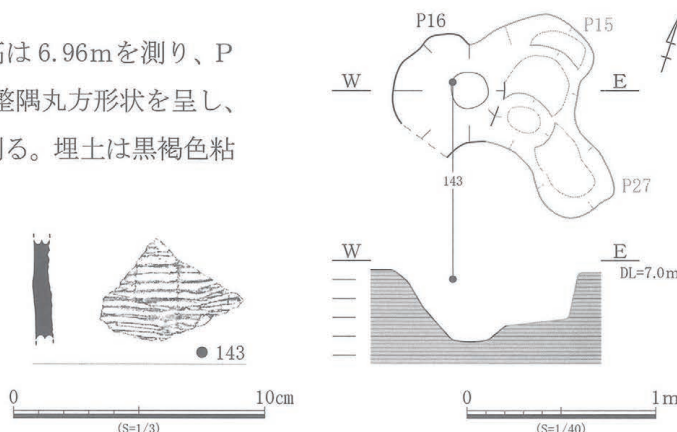
遺物は須恵器片 1 点(142)と、弥生土器片 6 点を出土している。



P16 (第 30 図)

調査区AⅡ-8グリッドに位置する。検出高は 6.96 m を測り、P15 と重複関係を有している。平面形状は不整隅丸方形形状を呈し、現状で長径 58 cm、短径 54 cm、深さ 40 cm を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、灰褐色シルト(作土層)が混入している。

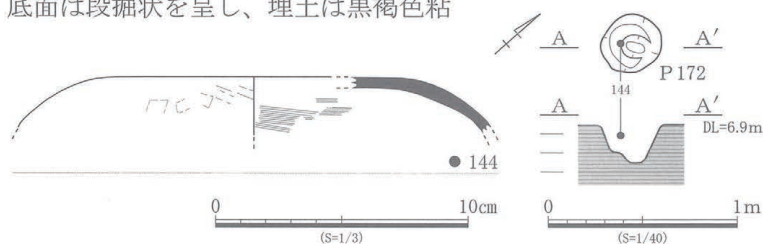
遺物は須恵器片 1 点(143)、土師質土器片 2 点、弥生土器片 13 点を出土しており、同片の多くは摩耗がみられる。



P172 (第 30 図)

調査区CⅣ-1グリッドに位置する。検出高は 6.85 m を測る。平面形状は円形状を呈し、現状で長径 32 cm、短径 29 cm、深さ 20 cm を測る。底面は段掘状を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

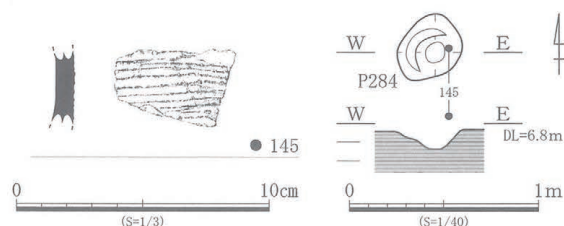
遺物は須恵器片 1 点(144)、土師質土器片 1 点、弥生土器片 1 点を出土している。



P284 (第 30 図)

調査区CⅤ-9グリッドに位置する。扇状地性礫層から検出しており、検出高は 6.76 m を測る。平面形状は不整楕円形状を呈し、現状で長径 38 cm、短径 30 cm、深さ 11 cm を測る。底面は段掘状を呈しているが、現況では柱穴に適した遺存状態とは捉え難い。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

検出面の上位層(文化層)から須恵器片(145)を出土しており、関連についての可能性は考慮できる。

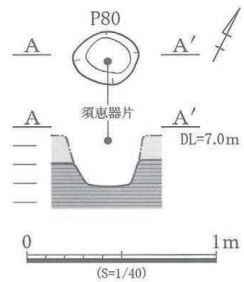


第 30 図 P2・16・172・284 平面図・遺構断面図 (S=1/40)/ 出土遺物 (142 ~ 145 : S=1/3)

P80(第31図)

調査区BⅢ-8グリッドに位置する。ST2の底面から検出しており、検出高は6.82mを測る。平面形状は亜円形状を呈し、現状で長径34cm、短径28cm、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

検出面の上位層(遺構廃絶後堆積層)から須恵器片を出土しており、先後関係等から本遺構に伴う遺物の可能性を残す事例として報告している。



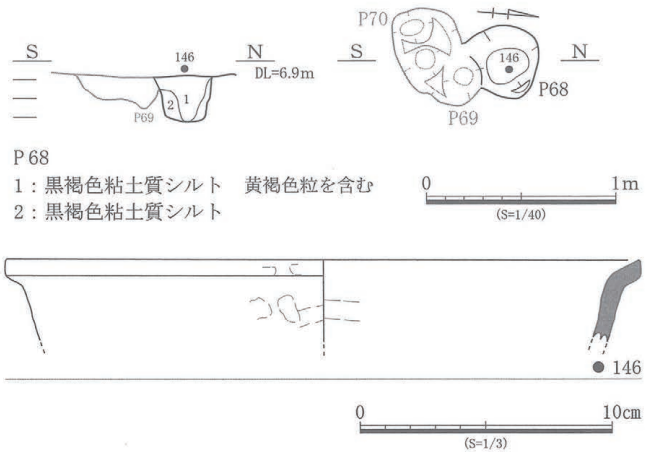
中世土器片出土の主なピット状遺構

本調査区において当該期の可能性を有するピット状遺構は約40個を検出しているが、殆どが単一埋土であり、土層の類別化による遺構群の時期差は判然としない。主に土師質土器片や瓦質土器片の出土を時期比定の依拠とするが、多くは細片で摩耗もみられるなど、埋積状況(擾乱等)には考慮が必要である。

P68(第31図)

調査区BⅡ-15/BⅢ-3グリッドに位置する。ST2の底面から検出しており、検出高は6.81mを測る。P69と重複関係を有しており、土層断面観察等により後事の遺構と考えられる。平面形状は円形状を呈し、現状で径約40cm、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、半截による断面調査で柱痕跡を観察できた。

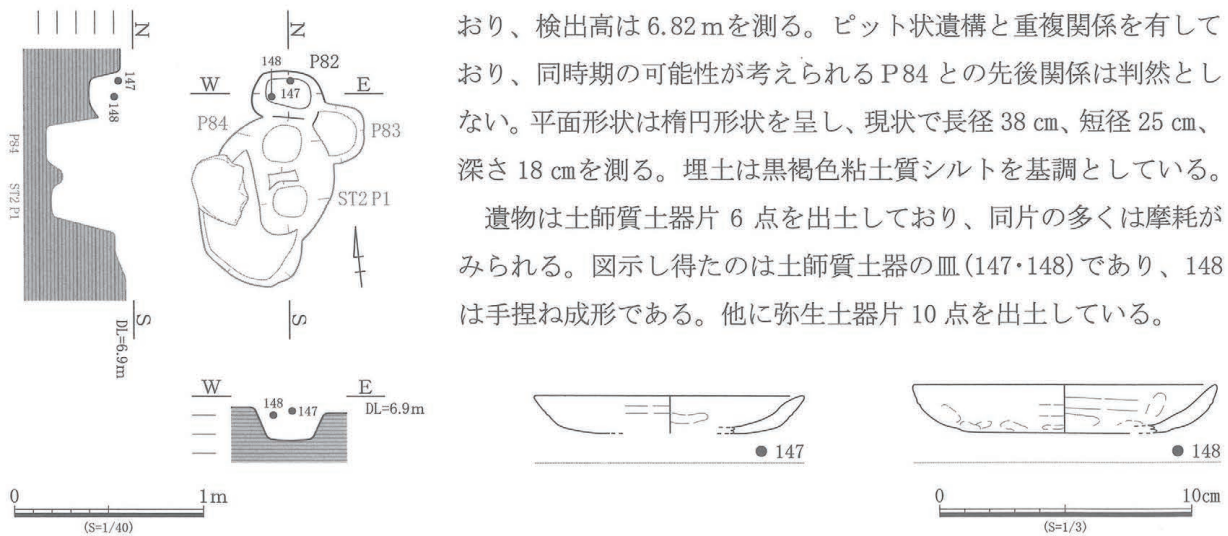
遺物は検出面の上位から瓦質土器片(146)を出土しており、本遺構に伴出する遺物として取り上げている。他に弥生土器片13点出土している。



P82(第31図)

調査区BⅢ-8グリッドに位置する。ST2の底面から検出しており、検出高は6.82mを測る。ピット状遺構と重複関係を有しており、同時期の可能性が考えられるP84との先後関係は判然としない。平面形状は楕円形状を呈し、現状で長径38cm、短径25cm、深さ18cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

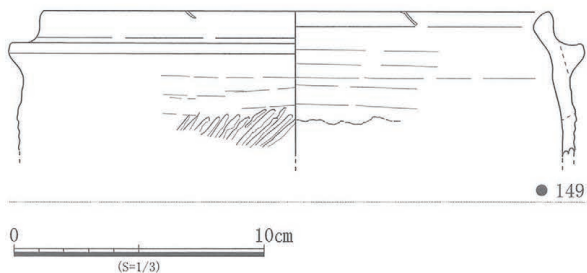
遺物は土師質土器片6点を出土しており、同片の多くは摩耗がみられる。図示し得たのは土師質土器の皿(147・148)であり、148は手捏ね成形である。他に弥生土器片10点を出土している。



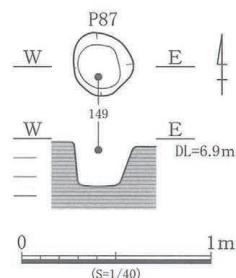
第31図 P80・68・82 平面図・遺構断面図 (S=1/40)/ 出土遺物 (146~148 : S=1/3)

P 87(第 32 図)

調査区BⅢ-10グリッドに位置する。ST 2の底面から検出しており、検出高は6.86mを測る。平面形状は円形状を呈し、現状で長径34cm、短径32cm、深さ



23cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、比較的多くの炭化材片を検出している。

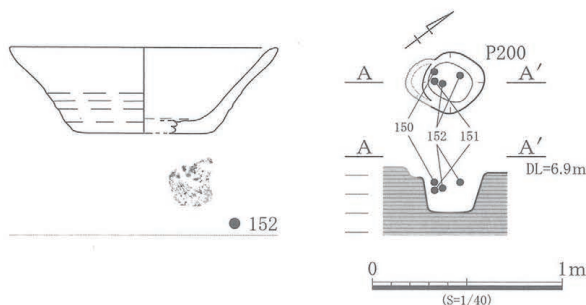
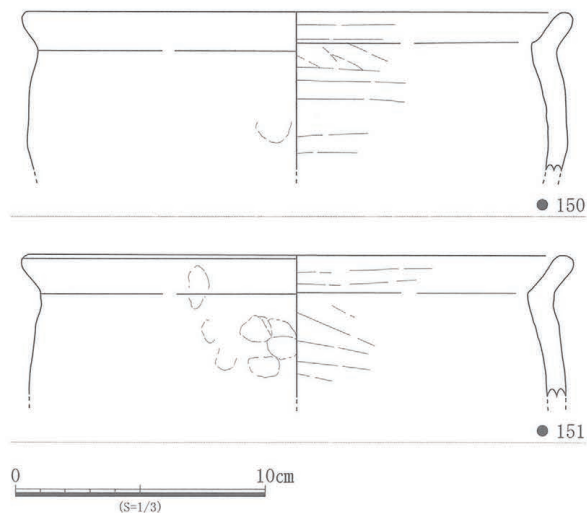


遺物は土師質土器片を出土しており、図示したのは播磨型の羽釜(149)である。

P 200(第 32 図)

調査区CⅣ-11グリッドに位置する。検出高は8.82mを測り、低床なピット状遺構と重複関係を有している。平面形状は円形状を呈し、現状で長径32cm、短径30cm、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

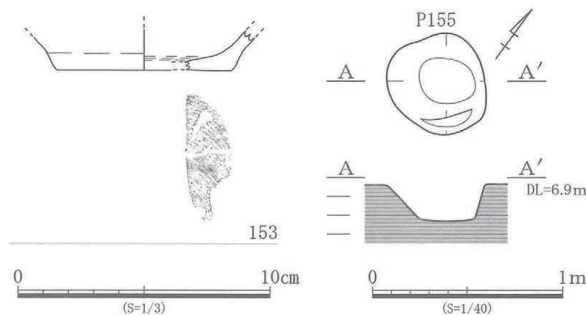
遺物は土師質土器片10点と、混入の可能性が考えられる弥生土器片1点を出土している。図示したのは土師質土器の鍋(150・151)と坏/皿(152)であり、鍋は同一個体の可能性を含んでいる。また同遺物は重なった状態で出土しており、意図的に埋置した可能性も考えられる。



P 155(第 32 図)

調査区BⅣ-8・12グリッドに位置する。扇状地性礫層から検出しており、検出高は6.87mを測る。平面形状は不整円形状を呈し、現状で長径56cm、短径51cm、深さ21cmを測る。平面規模に比して、半截による断面調査でも柱痕跡等の確認はできなかった。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は土師質土器片9点と、混入の可能性が考えられる弥生土器片1点を出土している。図示したのは土師質土器の坏の底部(153)である。

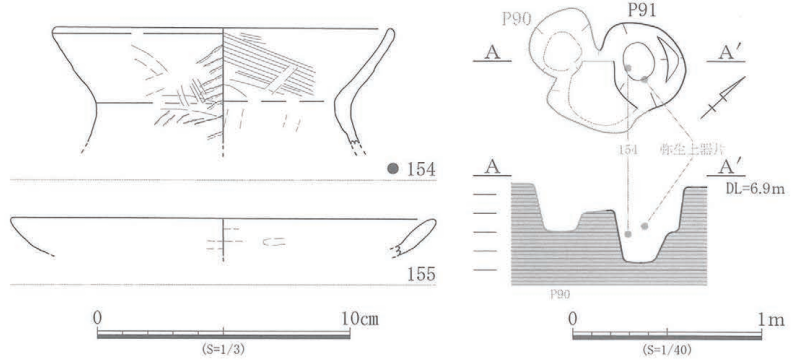


第 32 図 P 87・200・155 平面図・遺構断面図 (S=1/40)/ 出土遺物 (149 ~ 153 : S=1/3)

P91(第33図)

調査区BⅢ-14グリッドに位置する。検出高は6.84mを測り、土坑状遺構と重複関係を有している。平面形状は垂円形状を呈し、現状で長径48cm、短径44cm、深さ41cmを測る。埋土は黄褐色粒を多留する黒褐色粘土質シルトを基調とし、焼土粒と多量の炭化物(材)を検出している。

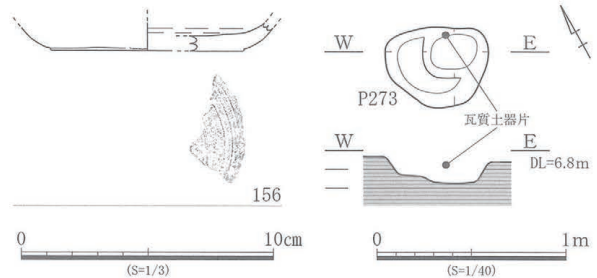
遺物は須恵器片1点、土師器片1点、土師質土器片2点、瓦質土器片1点の他、摩耗した弥生土器片4点を出土している。図示したのは土師質土器の皿(155)と弥生後期後葉を示唆する甕の口縁部(154)であり、出土状況から弥生土器片は混入または先行する遺構の廃絶に伴う遺物の可能性が考えられる。



P273(第33図)

調査区CⅤ-2グリッドに位置する。扇状地性礫層から検出しており、検出高は6.76mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、現状で長径55cm、短径44cm、深さ14cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

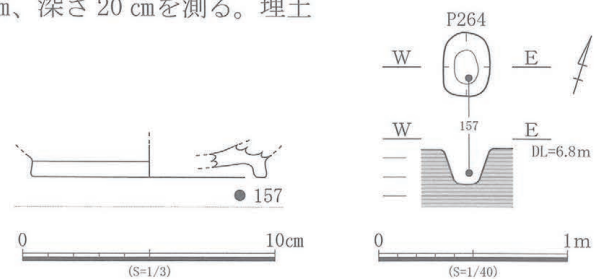
遺物は土師質土器片4点と瓦質土器片1点を出土しており、同片の多くは摩耗がみられる。図示したのは土師質土器の坏の底部(156)である。他に混入の可能性が考えられる弥生土器片1点を出土している。



P264(第33図)

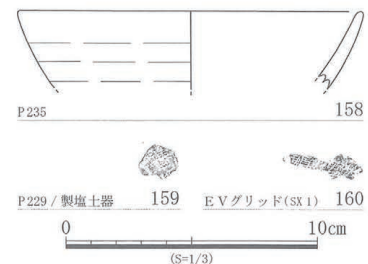
調査区BⅤ-12グリッドに位置する。扇状地性礫層から検出しており、検出高は6.75mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、現状で長径34cm、短径25cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は土師質土器片2点と、混入の可能性が考えられる弥生土器片1点を出土しており、同片は摩耗がみられる。図示したのは土師質土器の椀の底部(157)である。

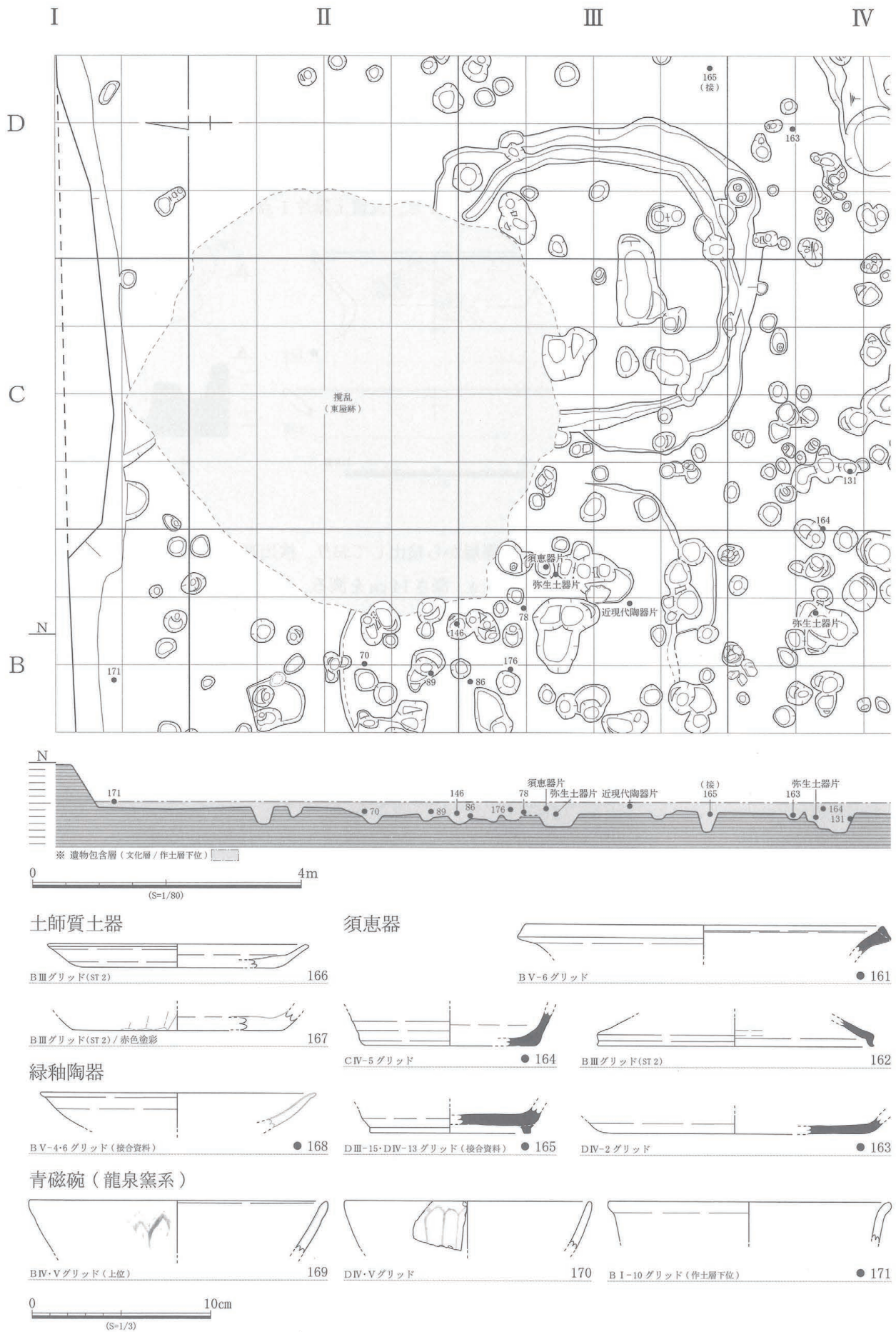


包含層出土遺物(第34・35図)

当該期の包含層出土遺物は、Ⅱ区を中心に須恵器片約30点、土師器片約10点、土師質土器片約200点の他、瓦質土器片や青磁片(貿易陶磁器)などを出土している。遺物は細片を主体とし、一部に摩耗がみられるなど先行期の遺物と同様の出土状況を呈している。

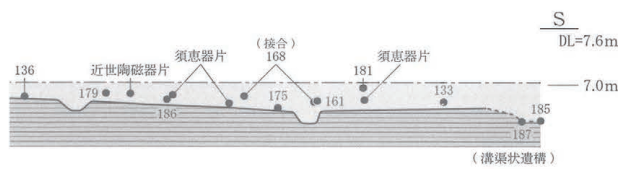
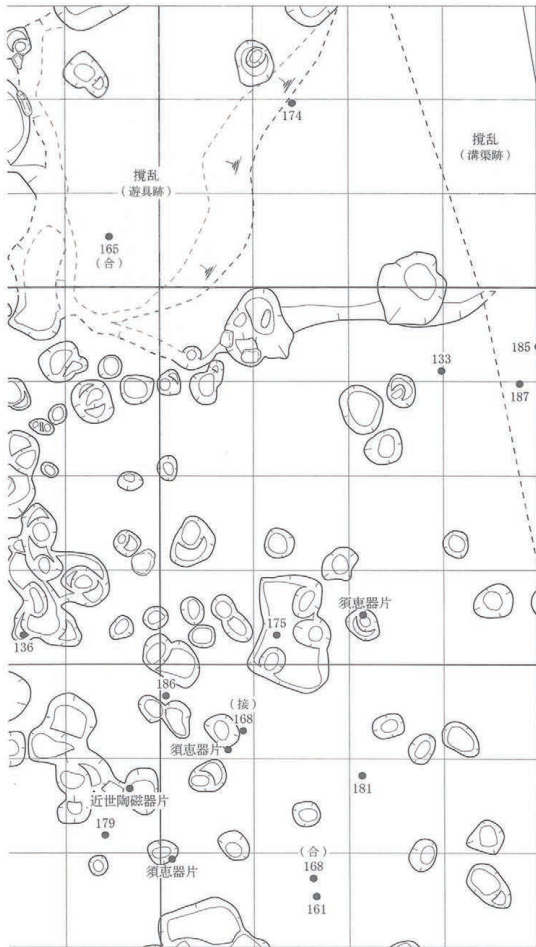


第33図 P91・273・264 平面図・遺構断面図(S=1/40)/出土遺物(154~160:S=1/3)

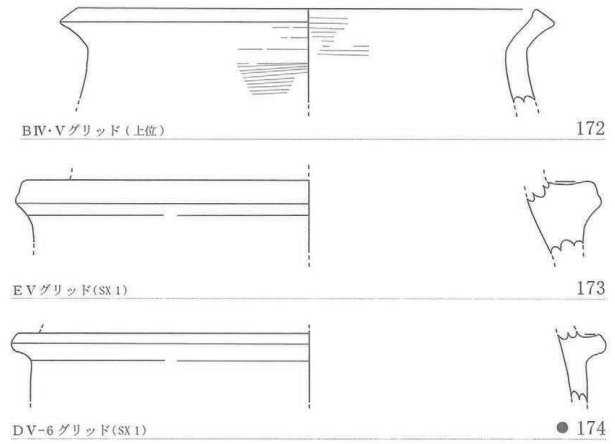


第34図 包含層遺物出土状況図1(S=1/80)/出土遺物1(161~171:S=1/3)

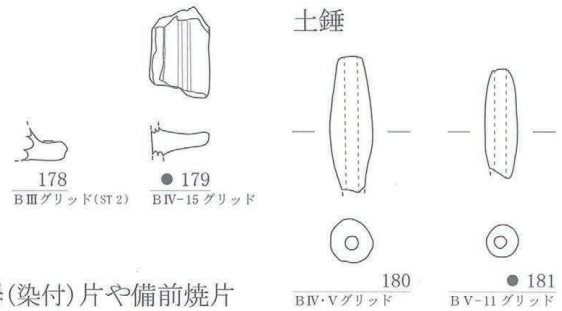
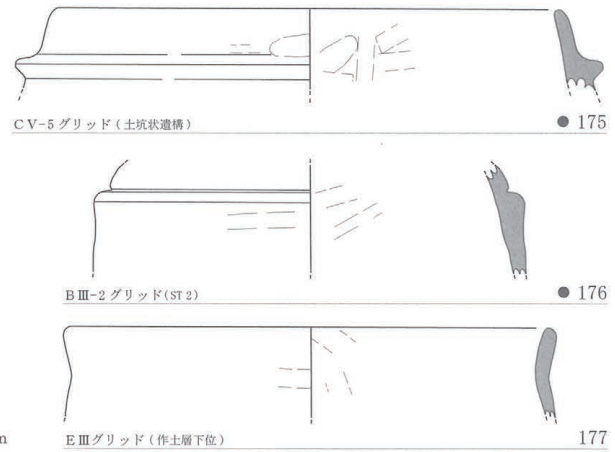
V



土師器 (煮炊具 : 172 ~ 174・178・179)



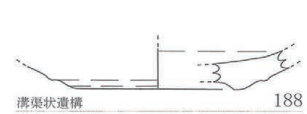
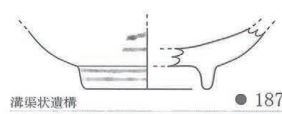
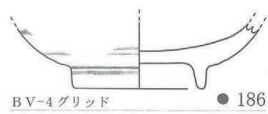
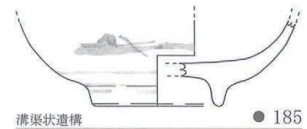
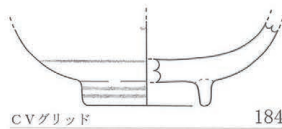
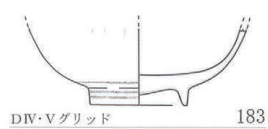
瓦質土器 (煮炊具 : 175 ~ 177)



第6節 近世期の遺構と遺物

包含層出土遺物 (第35図)

作土層下位を含む当該期の包含層出土遺物は、陶磁器(染付)片や備前焼片など十数点を出土している。一部は調査区南端に所在する溝渠状遺構(攪乱)から銭貨(寛永通寶 : 182)などと伴出しており、開鑿(/埋没)年代の可能性を示唆している。また型紙技法など近代以降の所産と考えられる陶磁器類約30点の他、青磁・白磁片等数点を出土している。



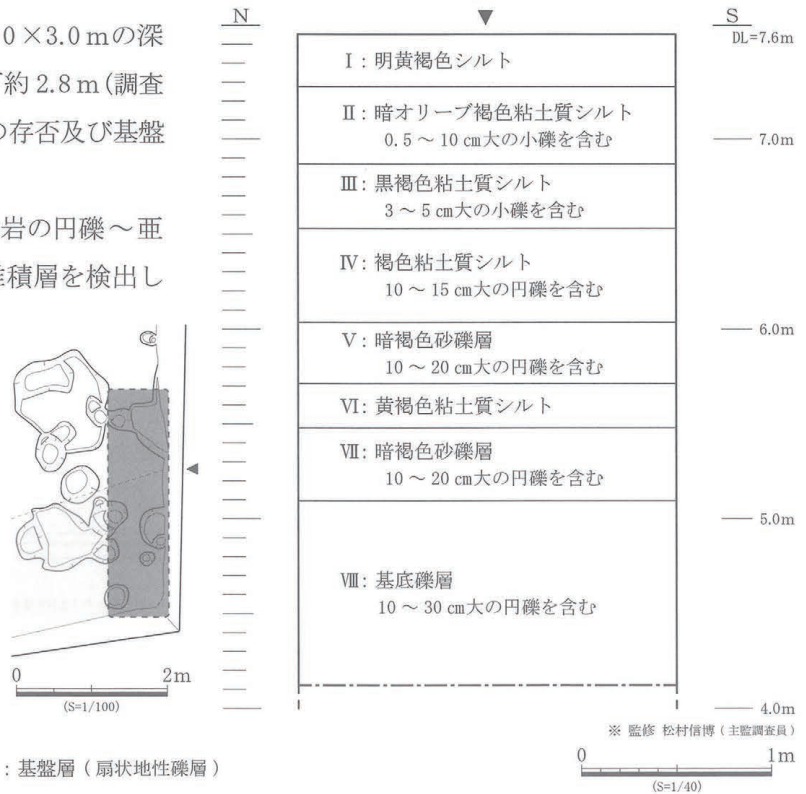
第35図 包含層遺物出土状況図2 (S=1/80) / 出土遺物2 (172 ~ 188 : S=1/3・182 : S=1/2)

第7節 下層確認調査

調査終了後、発掘区南東端に約1.0×3.0mの深掘トレンチを設定し、遺構検出面下約2.8m(調査限界)まで重機掘削を行い、文化層の存否及び基盤層の堆積状況を観察した。

中位段丘を形成する主に粗細粒砂岩の円礫～亜円礫(玉石)で構成される河成砂礫堆積層を検出したが、海成砂の被覆は確認できなかった。色相が暗褐色を呈する砂礫層と黄褐色粘土質シルトの累積を認めたが、成層構造等の精査は掘削状況から深部の観察は困難であり、目視による分層に留めた。

下層確認調査における基本層序は以下の通りである。



基本層序

I・II層：造成土 III層：文化層 IV～VIII層：基盤層(扇状地性礫層)

第36図 下層確認トレンチ

遺構番号	平面形状(概形)	規模			検出高(m)	埋土(土色・土性)	重複関係	遺構位置(グリッド)	出土遺物(破片点数)	遺物番号
		長径	短径	深さ						
P2	亜円形状	35	31	16	6.928	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	B I-13・14	弥生土器 6点 須恵器(摩耗) 1点	142
P3	楕円形状	34	25	6	6.919	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	B I-15	—	
P5	亜円形状	20	18	5	6.908	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	B I-16	弥生土器 1点	
P6	円形状	30	30	13	6.932	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	B I-16	—	
P7	楕円形状	30	20	9	6.917	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	C I-13	—	
P8	円形状	28	27	15	6.913	暗褐色粘土質シルト / 黒褐色粒含	—	C I-16	—	
P9	楕円形状	41	19	14	6.862	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	D I-11	弥生土器(摩耗) 1点	
P10	円形状	33	31	14	6.897	暗褐色粘土質シルト / 黒褐色粒含	P11	D I-13	—	
P11	楕円形状	25	20	15	6.901	暗褐色粘土質シルト / 黒褐色粒含	P10	D I-13・14	—	
P12	亜円形状	37	(23)	10	6.895	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	E I-9	—	
P13	亜円形状	40	32	10	6.883	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	E I-9	弥生土器 1点	
P14	亜円形状	41	34	9	6.874	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	E I-10	弥生土器 1点	126
P15	亜円形状	73	63	33	6.939	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P16・27	A II-4・8 B II-1・5	弥生土器(摩耗) 5点 土師質土器(摩耗) 4点	

※ () は残存値 / 単位: cm

第6表 ピット状遺構 計測表1

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P 16	亜円形状	58	54	40	6.956	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P 15	AⅡ-8	弥生土器(摩耗) 13点 須恵器 1点 土師質土器(摩耗) 1点	143
P 17	楕円形状	38	(18)	15	6.949	黒褐色粘土質シルト	—	AⅡ-16	—	
P 18	亜円形状	22	19	10	6.945	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-1	—	
P 19	亜円形状	33	28	9	6.940	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P 20	BⅡ-1	—	
P 21	亜円形状	26	22	8	6.930	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅠ-13 BⅡ-1	—	
P 22	円形状	26	24	14	6.942	灰色シルト / 黄褐色粒・炭化物含	—	BⅡ-1・2	—	
P 23	楕円形状	23	17	9	6.922	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-2	土師質土器 1点	
P 24	亜円形状	38	32	11	6.922	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-4	—	
P 25	亜円形状	33	29	3	6.935	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-4	—	
P 26	楕円形状	47	31	26	6.945	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-5	弥生土器(摩耗) 4点	
P 27	楕円形状	(49)	39	24	6.954	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P 15	BⅡ-5	—	
P 28	亜円形状	39	33	20	6.909	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	土坑状遺構	BⅡ-6	弥生土器(摩耗) 10点	
P 30	楕円形状	35	22	4	6.948	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-6・7	弥生土器 1点	
P 31	亜円形状	37	35	26	6.942	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-7	弥生土器(摩耗) 5点 土師質土器(摩耗) 1点	
P 32	亜円形状	29	24	16	6.947	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-7	—	
P 33	楕円形状	30	23	9	6.950	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BⅡ-5・9	弥生土器 1点	
P 34	亜円形状	25	22	7	6.950	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	BⅡ-9	—	
P 35	楕円形状	36	19	14	6.843	黒褐色粘土質シルト	ST 2 土坑状遺構	BⅡ-10	弥生土器 1点 土師質土器 1点	
P 36	円形状	38	34	11	6.820	黒褐色粘土質シルト	ST 2	BⅡ-10	弥生土器 8点	
P 37	円形状	35	35	15	6.830	黒褐色粘土質シルト	ST 2	BⅡ-10	弥生土器 20点	123 124 129
P 38	円形状	20	19	8	6.925	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P 39	BⅡ-10	—	
P 39	円形状	30	29	24	6.930	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	P 38・40	BⅡ-10・11	—	
P 40	円形状	21	(13)	10	6.908	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	ST 2/P 39	BⅡ-10・11	—	
P 41	楕円形状	48	31	14	6.810	暗褐色シルト	ST 2/P 42	BⅡ-11	弥生土器 10点	117
P 42	楕円形状	53	34	18	6.820	黒褐色シルト	ST 2/P 41	BⅡ-11・15	弥生土器(焦状) 17点 土師質土器 2点	
P 43	円形状	22	22	3	6.822	黒褐色粘土質シルト	ST 2	BⅡ-11・15	—	
P 44	楕円形状	35	25	14	6.910	黒褐色粘土質シルト	ST 2	BⅡ-13	土師質土器(摩耗) 2点	
P 45	楕円形状	63	32	15	6.899	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	BⅡ-9・13	弥生土器 10点 土師質土器 1点 青磁 1点	
P 46	楕円形状	33	(28)	12	6.832	黒褐色粘土質シルト	ST 2 P 3	BⅡ-14	—	

第7表 ピット状遺構 計測表2

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P47	円形状	26	25	10	6.802	黒褐色粘土質シルト	ST2/P48	BII-15	弥生土器 7点	128
P48	亜円形状	45	38	26	6.815	黒褐色粘土質シルト	ST2/P47	BII-15	弥生土器 土師質土器 8点	6点
P49	円形状	28	25	12	6.861	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DII-7	—	
P50	円形状	27	27	—	6.861	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DII-11	—	
P51	円形状	25	24	7	6.841	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DII-11	—	
P52	不整形形状	46	44	16	6.841	暗褐色粘土質シルト	—	DII-15	—	
P53	円形状	25	24	8	6.849	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DII-15	—	
P54	亜円形状	26	22	11	6.858	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DII-15・16	弥生土器 1点	
P55	円形状	28	25	9	6.873	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DII-16	—	
P56	亜円形状	31	25	10	6.881	黒褐色シルト / 黄褐色粒含	—	DII-16	—	
P57	円形状	36	32	7	6.893	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	EII-11・15	—	
P58	楕円形状	54	42	30	6.890	黒褐色粘土質シルト	ST2	AIII-4	—	
P59	亜円形状	39	(34)	10	6.859	黒褐色粘土質シルト	ST2	AIII-8	—	
P60	円形状	58	55	37	6.850	黒褐色粘土質シルト	ST2	AIII-12	弥生土器 炭化物 1点 少量	
P61	楕円形状	46	36	19	6.897	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-1	弥生土器 1点	125
P62	亜円形状	29	24	13	6.877	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-1	—	
P63	楕円形状	35	24	17	6.862	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-1	弥生土器 7点	
P64	亜円形状	41	34	17	6.840	黒褐色粘土質シルト	ST2/P65	BIII-1・2	弥生土器 13点	
P65	楕円形状	67	50	14	6.799	黒褐色粘土質シルト	ST2/P64	BIII-2	弥生土器 4点	127
P66	円形状	30	29	13	6.818	黒褐色粘土質シルト	ST2	BII-14・15 BIII-2・3	弥生土器 6点 土師質土器 1点	132
P67	円形状	37	35	18	6.819	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-2	弥生土器 1点 土師質土器 1点	
P68	円形状	40	40	24	6.812	黒褐色粘土質シルト	ST2/P68	BII-15 BIII-3	弥生土器 13点 瓦質土器(摩耗) 1点	146
P69	楕円形状	33	22	15	6.792	黒褐色粘土質シルト	ST2/P68・70	BIII-3	—	
P70	亜円形状	44	36	13	6.803	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	ST2/P69	BIII-3	弥生土器 12点 土師質土器(摩耗) 4点	130
P71	円形状	25	22	10	6.808	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-3	弥生土器 5点	
P72	亜円形状	35	30	8	6.821	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-3	土師質土器(摩耗) 1点	
P73	円形状	26	26	14	6.805	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-3・4	弥生土器 4点	
P74	楕円形状	54	43	9	6.827	黒褐色粘土質シルト	ST2/P75	BIII-4	弥生土器 3点	
P75	楕円形状	30	19	10	6.807	黒褐色粘土質シルト	ST2/P74	BIII-4・8	弥生土器 1点	
P76	楕円形状	50	40	10	6.871	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-1・5	—	
P77	楕円形状	67	50	34	6.841	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-5・9	弥生土器 7点 土師質土器(摩耗) 2点	
P78	亜円形状	30	25	11	6.790	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-6	弥生土器 1点	
P79	円形状	33	33	23	6.851	黒褐色粘土質シルト	ST2 土坑状遺構	BIII-6・10	弥生土器(焦状) 6点 須恵器 1点 土師質土器(摩耗) 2点	
P80	亜円形状	34	28	15	6.822	黒褐色粘土質シルト	ST2	BIII-8	須恵器 1点	

第8表 ピット状遺構 計測表3

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P81	円形状	26	23	13	6.794	黒褐色粘土質シルト	ST2	BⅢ-8	弥生土器(焦状) 22点	118 119
P82	楕円形状	38	25	18	6.817	黒褐色粘土質シルト	ST2/P83	BⅢ-8	弥生土器 10点 土師質土器(摩耗) 6点	147 148
P83	亜円形状	33	(27)	11	6.795	黒褐色粘土質シルト	ST2/P82・84	BⅢ-8	—	
P84	楕円形状	39	30	41	6.844	黒褐色粘土質シルト	ST2/P83	BⅢ-8	弥生土器 3点 土師質土器 1点	
P85	不整形形状	81	70	20	6.890	黒褐色粘土質シルト	ST2	AⅢ-12 BⅢ-9	弥生土器 1点	
P86	楕円形状	69	37	13	6.867	黒褐色粘土質シルト	ST2	BⅢ-10	弥生土器 6点	120
P87	円形状	34	32	23	6.864	黒褐色粘土質シルト	ST2	BⅢ-10	土師質土器 1点 炭化物 少量	149
P88	楕円形状	33	23	8	6.848	黒褐色粘土質シルト	ST2	BⅢ-11・15	—	
P89	亜円形状	37	30	28	6.841	黒褐色粘土質シルト /黄褐色粒含	—	BⅢ-13	—	
P90	亜円形状	38	34	24	6.835	黒褐色粘土質シルト /黄褐色粒含	土坑状遺構	BⅢ-14	弥生土器 3点 土師質土器(摩耗) 3点	
P91	亜円形状	48	44	41	6.843	黒褐色粘土質シルト /黄褐色粒含	土坑状遺構	BⅢ-14	弥生土器(摩耗) 4点 須恵器 1点 土師器 1点 土師質土器(摩耗) 2点 瓦質土器(摩耗) 1点	154 155
P92	円形状	24	22	14	6.878	黒褐色粘土質シルト /黄褐色粒含	—	BⅢ-14	—	
P93	亜円形状	28	(20)	14	6.828	黒褐色粘土質シルト	ST2/P94	BⅢ-15	—	
P94	円形状	44	41	27	6.879	黒褐色粘土質シルト	P93/他	BⅢ-15・16	弥生土器 4点 須恵器 2点 土師器 1点 土師質土器(摩耗) 5点	
P95	亜円形状	33	27	30	6.876	黒褐色粘土質シルト /黄褐色粒含	—	BⅢ-15	土師質土器(摩耗) 1点	
P96	円形状	42	36	27	6.864	黒褐色粘土質シルト	ST2	BⅢ-16	弥生土器 5点 須恵器 1点 土師質土器(摩耗) 1点	
P97	円形状	44	41	26	6.872	黒褐色粘土質シルト	—	BⅢ-16	弥生土器 7点 土師質土器(摩耗) 1点	
P98	円形状	25	24	21	6.822	黒褐色粘土質シルト /黄褐色粒含	ST2	CⅢ-5	弥生土器 3点	
P99	亜円形状	(17)	21	6	6.783	黒褐色粘土質シルト	P100・101	CⅢ-5	—	
P100	亜円形状	(16)	20	10	6.833	黒褐色粘土質シルト	P99・101	CⅢ-5	—	
P101	亜円形状	22	20	13	6.836	黒褐色シルト (黒ボク土)	P99・100	CⅢ-5	弥生土器 1点	121
P102	楕円形状	46	35	23	6.832	黒褐色シルト 暗褐色シルト /黄褐色粒含	ST2	CⅢ-5・9	弥生土器 15点 土師質土器(摩耗) 2点	
P103	亜円形状	29	(23)	9	6.766	黒褐色粘土質シルト	ST1	CⅢ-6	—	
P104	円形状	21	21	8	6.778	黒褐色粘土質シルト	P105	CⅢ-6	—	
P105	楕円形状	(14)	18	6	6.778	黒褐色粘土質シルト	P104	CⅢ-6	弥生土器 1点	
P106	円形状	25	23	15	6.814	黒褐色シルト (黒ボク土)	—	CⅢ-9	—	
P107	円形状	41	37	21	6.788	黒褐色粘土質シルト	ST2	CⅢ-9	弥生土器(摩耗) 7点 土師器(焦状) 2点	
P108	楕円形状	36	27	18	6.762	黒褐色粘土質シルト	ST1	CⅢ-10・14	弥生土器 5点 土師質土器 3点	
P109	円形状	24	21	17	6.725	黒褐色粘土質シルト	ST1	CⅢ-10・14	弥生土器 2点	

第9表 ピット状遺構 計測表4

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P110	楕円形状	46	34	11	6.705	黒褐色粘土質シルト	ST1	CIII-11	弥生土器(摩耗) 1点	
P111	亜円形状	26	21	7	6.702	黒褐色粘土質シルト	ST1	CIII-12	—	
P112	円形状	25	24	12	6.767	黒褐色粘土質シルト	Pit 状遺構	CIII-13	—	
P113	楕円形状	28	(20)	7	6.791	黒褐色粘土質シルト	P114	CIII-13	—	
P114	楕円形状	23	16	23	6.851	黒褐色粘土質シルト	P113	CIII-13	—	
P115	亜円形状	27	22	6	6.784	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	CIII-14	弥生土器(摩耗) 3点 土師質土器(摩耗) 1点	
P116	楕円形状	45	34	12	6.728	黒褐色粘土質シルト	ST1	CIII-15・16	弥生土器 1点	
P117	楕円形状	35	18	14	6.846	黒褐色粘土質シルト	ST1	CIII-15・16 CIV-3・4	弥生土器 1点	25
P118	円形状	46	46	32	6.765	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	ST1	DIII-2	弥生土器 8点	
P119	亜円形状	46	42	21	6.861	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	ST1	DIII-2	弥生土器 12点 土師質土器(摩耗) 4点	
P120	楕円形状	39	(26)	13	6.866	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	P121	DIII-3	—	
P121	不整形形状	29	21	13	6.870	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	P120	DIII-3	弥生土器 12点	
P122	亜円形状	32	28	5	6.860	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-3	弥生土器 1点	
P123	円形状	30	27	6	6.856	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-3	—	
P124	楕円形状	35	27	13	6.703	黒褐色粘土質シルト	ST1	DIII-5	弥生土器(焦状) 5点	
P125	楕円形状	27	21	6	6.683	黒褐色粘土質シルト	ST1	DIII-5・6	—	
P126	円形状	35	35	8	6.856	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-7	弥生土器(摩耗) 1点	
P127	楕円形状	34	27	7	6.695	黒褐色粘土質シルト	ST1	DIII-9・10	弥生土器 1点	
P128	円形状	46	43	19	6.676	黒褐色粘土質シルト	ST1	DIII-13	弥生土器 4点	
P129	円形状	30	27	10	6.870	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-11・16	—	
P130	円形状	37	34	25	6.853	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-16	—	
P131	楕円形状	34	25	5	6.872	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-16 EIII-13	弥生土器(摩耗) 2点	
P132	亜円形状	29	24	4	6.871	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	DIII-16	—	
P133	円形状	34	34	10	6.873	黒褐色シルト / 黄褐色粒含	—	EIII-1	—	
P134	亜円形状	37	31	7	6.857	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	EIII-5	—	
P135	亜円形状	33	28	7	6.843	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	EIII-13	弥生土器(摩耗) 1点	
P136	円形状	23	22	14	6.878	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-2	—	
P137	円形状	33	32	16	6.862	黒褐色シルト (黒ボク土)	—	BIV-2	—	
P138	亜円形状	38	32	16	6.841	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	BIII-15 BIV-3	—	
P139	楕円形状	36	25	16	6.878	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-3	—	
P140	円形状	30	27	14	6.878	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BIV-4	—	
P141	亜円形状	38	32	21	6.887	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BIII-15 BIV-4	—	
P142	亜円形状	38	33	17	6.875	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-2・6	—	

第10表 ピット状遺構 計測表5

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P 143	亜円形状	37	31	21	6.857	黒褐色粘土質シルト	P 144	BIV-6	弥生土器(摩耗) 1点 土師質土器(摩耗) 2点	
P 144	楕円形状	47	32	26	6.871	暗褐色粘土質シルト	P 143	BIV-6	土師質土器(摩耗) 2点	
P 145	円形状	30	28	12	6.893	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-3・7	—	
P 146	楕円形状	46	(29)	14	6.868	黒褐色粘土質シルト	P 148	BIV-7	—	
P 147	楕円形状	36	(21)	23	6.892	黒褐色粘土質シルト	P 148	BIV-7	—	
P 148	方形状	45	44	25	6.884	黒褐色粘土質シルト	P 146・147 P 149	BIV-7	弥生土器 1点 土師質土器 4点	
P 149	亜円形状	53	44	30	6.863	黒褐色粘土質シルト	P 148	BIV-7	弥生土器 3点 土師質土器(摩耗) 5点	
P 150	楕円形状	35	25	22	6.883	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-8	土師質土器(摩耗) 2点	
P 151	亜円形状	(20)	20	7	6.882	黒褐色粘土質シルト	P 152	BIV-4・8	—	
P 152	亜円形状	49	42	32	6.878	黒褐色粘土質シルト	P 151	BIV-8	弥生土器(摩耗) 1点	
P 153	楕円形状	50	34	17	6.858	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-8 CIV-5	弥生土器 1点 土師質土器 1点	
P 154	円形状	36	35	10	6.860	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-8	—	
P 155	円形状	56	51	22	6.869	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-8・12	弥生土器 1点 土師質土器(摩耗) 9点	153
P 156	円形状	20	20	14	6.866	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-6・10	—	
P 157	楕円形状	28	18	13	6.865	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	BIV-10	—	
P 158	円形状	38	34	9	6.863	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-12	—	
P 159	楕円形状	74	52	18	6.856	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-12	—	
P 160	楕円形状	64	(37)	14	6.856	黒褐色粘土質シルト	P 161・165	BIV-12	—	
P 161	方形状	(54)	54	10	6.852	黒褐色粘土質シルト	P 160	BIV-12・16	—	
P 162	円形状	20	20	9	6.801	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-14	—	
P 163	楕円形状	32	25	6	6.786	暗褐色粘土質シルト	—	BIV-14・15 BV-2・3	—	
P 164	亜円形状	35	30	12	6.826	黒褐色粘土質シルト	P 165	BIV-15	—	
P 165	円形状	57	50	24	6.830	黒褐色粘土質シルト	P 160・164	BIV-11・15	—	
P 166	楕円形状	50	37	23	6.780	黒褐色粘土質シルト	—	BIV-15	土師質土器 1点	
P 167	楕円形状	30	24	11	6.794	黒褐色粘土質シルト	P 256	BIV-16	—	
P 168	楕円形状	32	24	18	6.836	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	CIV-1	土師質土器(摩耗) 1点	
P 169	円形状	34	34	13	6.856	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-1	—	
P 170	円形状	23	23	16	6.882	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	CIV-1	弥生土器(摩耗) 1点	
P 171	楕円形状	26	18	5	6.864	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-1・2	—	
P 172	円形状	32	29	20	6.847	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-1	弥生土器 1点 須恵器 1点 土師質土器 1点	144
P 173	円形状	16	16	10	6.844	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	CIV-2	—	
P 174	楕円形状	27	18	13	6.870	黒褐色粘土質シルト / 灰褐色シルト混	—	CIV-2	—	
P 175	不整形	34	34	3	6.877	黒褐色粘土質シルト	P 176	CIV-2	—	
P 176	楕円形状	40	30	39	6.860	黒褐色粘土質シルト	P 175	CIV-2	—	
P 177	楕円形状	24	18	6	6.881	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-2	土師質土器 1点	
P 178	楕円形状	33	26	19	6.836	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-2・3	弥生土器 1点	
P 179	楕円形状	39	26	14	6.802	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-3	弥生土器 1点	

第 11 表 ピット状遺構 計測表 6

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P 180	亜円形状	28	23	4	6.823	黒褐色粘土質シルト / 黄褐色粒含	—	CIV-3・4	—	
P 181	円形状	20	16	2	6.833	暗褐色粘土質シルト	ST 1	CIV-4	土師質土器(摩耗) 1点	
P 182	楕円形状	42	29	14	6.822	黒褐色粘土質シルト	P 183	CIV-5	—	
P 183	楕円形状	46	36	12	6.830	黒褐色粘土質シルト	P 182・188	CIV-5・6	—	
P 184	亜円形状	34	28	21	6.857	黒褐色粘土質シルト	P 185	CIV-5	弥生土器(摩耗) 6点	131
P 185	円形状	24	21	9	6.857	黒褐色粘土質シルト	P 184	CIV-5・9	—	
P 186	楕円形状	20	16	12	6.864	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-6	—	
P 187	楕円形状	23	16	12	6.866	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-6	—	
P 188	亜円形状	22	14	6	6.861	黒褐色粘土質シルト	P 183	CIV-6	—	
P 189	楕円形状	28	21	10	6.867	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-6	弥生土器 5点 土師質土器(摩耗) 4点	
P 190	不整形	54	43	18	6.854	黒褐色粘土質シルト	SK 2	CIV-6・10	—	
P 191	円形状	26	23	12	6.860	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-6・7	—	
P 192	楕円形状	(34)	(13)	6	6.844	黒褐色粘土質シルト	P 205	CIV-8	—	
P 193	楕円形状	45	30	8	6.858	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	CIV-9	弥生土器 1点	(136)
P 194	円形状	30	28	6	6.866	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-10	—	
P 195	円形状	32	30	13	6.803	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	CIV-10	—	
P 196	楕円形状	47	35	26	6.845	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-10	—	
P 197	円形状	39	36	9	6.826	黒褐色粘土質シルト	P 198	CIV-11	弥生土器(摩耗) 7点	
P 198	亜円形状	25	(11)	3	6.803	黒褐色粘土質シルト	P 197	CIV-11	—	
P 199	楕円形状	49	36	10	6.830	黒褐色粘土質シルト	SK 2	CIV-11	弥生土器(摩耗) 1点	
P 200	円形状	32	30	24	6.822	黒褐色粘土質シルト	Pit 状遺構	CIV-11	弥生土器 1点 土師質土器(摩耗) 10点	150 151 152
P 201	楕円形状	19	14	13	6.841	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-11	—	
P 202	円形状	13	13	9	6.828	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-11	—	
P 203	円形状	13	12	9	6.836	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-11	—	
P 204	亜円形状	23	19	11	6.834	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-11	—	
P 205	亜円形状	44	35	10	6.841	黒褐色粘土質シルト	P 192	CIV-8・12	弥生土器 12点 土師質土器(摩耗) 3点	
P 206	亜円形状	34	28	13	6.825	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-12	—	
P 207	円形状	18	16	19	6.819	暗褐色粘土質シルト	—	CIV-12	—	
P 208	亜円形状	46	38	15	6.823	黒褐色粘土質シルト	P 218	CIV-12・16	弥生土器 9点	
P 209	楕円形状	(19)	42	6	6.821	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	CIV-9・13	弥生土器(摩耗) 2点	
P 210	楕円形状	51	40	12	6.804	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-13	—	
P 211	亜円形状	28	23	8	6.804	暗褐色粘土質シルト	—	CIV-13	—	
P 212	楕円形状	38	28	11	6.781	暗褐色粘土質シルト	P 257	CIV-13	—	
P 213	円形状	27	24	6	6.788	暗褐色粘土質シルト	—	CIV-13	—	
P 214	円形状	27	26	12	6.822	暗褐色粘土質シルト	—	CIV-14	—	
P 215	楕円形状	27	20	5	6.790	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-14・15	—	
P 216	亜円形状	48	42	20	6.813	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-15	弥生土器(摩耗) 4点 土師質土器 2点 須恵器(焼不) 1点	
P 217	亜円形状	37	31	11	6.831	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-15	—	
P 218	楕円形状	42	(14)	9	6.820	黒褐色粘土質シルト	P 208	CIV-16	—	
P 219	円形状	27	25	12	6.799	黒褐色粘土質シルト	—	CIV-16	—	
P 220	楕円形状	20	13	17	6.858	黒褐色粘土質シルト	ST 1	DIV-1	—	

第 12 表 ピット状遺構 計測表 7

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P 221	円形状	25	23	23	6.865	黒褐色粘土質シルト	—	DIV-1	—	
P 222	円形状	20	18	10	6.827	黒褐色粘土質シルト	—	DIV-1	—	
P 223	円形状	16	16	5	6.817	黒褐色粘土質シルト	—	DIV-1・2	—	
P 224	円形状	28	28	11	6.817	黒褐色粘土質シルト	P 225	DIV-2	弥生土器(摩耗) 2点	
P 225	亜円形状	(14)	18	7	6.818	黒褐色粘土質シルト	P 224	DIV-2	—	
P 226	楕円形状	25	18	21	6.810	黒褐色粘土質シルト	—	DIV-2・3	弥生土器(摩耗) 2点	
P 227	円形状	24	23	8	6.803	暗褐色粘土質シルト	—	DIV-3	弥生土器 7点 土師質土器(摩耗) 1点	
P 228	楕円形状	45	36	18	6.820	黒褐色粘土質シルト	—	DIV-5	弥生土器 9点 土師質土器(摩耗) 1点	
P 229	楕円形状	36	28	12	6.857	黒褐色粘土質シルト	—	DIV-5	製塩土器 1点	159
P 230	楕円形状	29	15	17	6.840	暗褐色粘土質シルト	—	DIV-5・6	土師質土器(摩耗) 6点	
P 231	亜円形状	16	13	—	6.831	暗褐色粘土質シルト	—	DIV-5	—	
P 232	楕円形状	23	14	8	6.830	暗褐色粘土質シルト	Pit 状遺構	DIV-5	—	
P 233	亜円形状	17	14	27	6.835	暗褐色粘土質シルト	P 234	DIV-6	弥生土器 1点	
P 234	亜円形状	33	27	15	6.819	暗褐色粘土質シルト	P 233	DIV-6	弥生土器 1点	
P 235	楕円形状	32	19	9	6.811	暗褐色粘土質シルト	—	DIV-6	弥生土器 1点 土師質土器 1点	158
P 236	円形状	33	29	9	6.703	黒褐色粘土質シルト	SX 1	DIV-7・8	弥生土器 1点 土師質土器(摩耗) 1点	
P 238	楕円形状	46	28	8	6.827	黒褐色粘土質シルト	P 239	DIV-9	—	
P 239	楕円形状	35	20	13	6.817	黒褐色粘土質シルト	P 238	DIV-9	弥生土器(摩耗) 2点	
P 241	方形状	36	36	21	6.477	灰色粘土質シルト	SX 1 / P 242	DIV-15	弥生土器(摩耗) 1点	
P 242	亜円形状	(20)	26	9	6.472	灰色粘土質シルト	SX 1 / P 241	DIV-15	—	
P 243	楕円形状	28	20	6	6.855	黒褐色粘土質シルト	—	EIV-1	—	
P 244	亜円形状	(14)	20	8	6.642	黒褐色粘土質シルト	SX 1 / P 245	EIV-5	—	
P 245	楕円形状	48	36	45	6.608	黒褐色粘土質シルト	SX 1 / P 244	EIV-6	—	
P 247	楕円形状	35	25	16	6.576	黒褐色粘土質シルト	SX 1	EIV-10	—	
P 248	亜円形状	28	24	4	6.551	黒褐色粘土質シルト	SX 1	EIV-10	—	
P 249	楕円形状	37	28	11	6.564	黒褐色粘土質シルト	SX 1	EIV-14	—	
P 250	楕円形状	(23)	18	13	6.569	黒褐色粘土質シルト	SX 1	EIV-14・15	弥生土器 1点	
P 251	楕円形状	35	21	18	6.755	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	BV-1	弥生土器 1点 土師質土器 3点	
P 252	楕円形状	40	32	18	6.780	暗褐色粘土質シルト	土坑状遺構	BV-1	—	
P 253	楕円形状	30	21	9	6.765	灰褐色砂質シルト	—	BV-1	—	
P 254	楕円形状	36	26	6	6.764	暗褐色粘土質シルト	—	BV-2・3	—	
P 255	楕円形状	42	31	7	6.767	暗褐色粘土質シルト	—	BV-3	—	
P 256	楕円形状	41	31	5	6.759	暗褐色粘土質シルト	P 167	BV-4	土師器 1点	
P 257	亜円形状	(46)	43	10	6.780	暗褐色粘土質シルト	P 212	BV-4 CV-1	—	
P 258	楕円形状	39	30	18	6.761	黒褐色粘土質シルト	—	BV-4	土師器 1点	
P 259	方形状	42	37	9	6.784	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	BV-5	—	
P 260	円形状	30	28	15	6.725	黒褐色粘土質シルト	—	BV-7	土師質土器(摩耗) 1点	
P 261	亜円形状	(29)	35	14	6.793	暗褐色粘土質シルト	P 262	BV-9	—	
P 262	方形状	42	42	21	6.750	暗褐色粘土質シルト	P 261	BV-9	—	
P 263	楕円形状	35	27	16	6.757	黒褐色粘土質シルト	—	BV-10・11	—	
P 264	楕円形状	34	25	20	6.750	黒褐色粘土質シルト	—	BV-12	弥生土器(摩耗) 1点 土師質土器(摩耗) 2点	157

第 13 表 ピット状遺構 計測表 8

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P265	楕円形状	34	24	9	6.761	暗褐色粘土質シルト	—	BV-12	—	
P266	楕円形状	55	32	11	6.771	黒褐色粘土質シルト	—	BV-14	—	
P267	不整形形状	41	38	26	6.779	黒褐色粘土質シルト	—	BV-15	土師質土器(摩耗) 3点	
P268	楕円形状	44	29	7	6.775	暗褐色粘土質シルト	—	BV-16	—	
P269	亜円形状	30	25	6	6.767	暗褐色粘土質シルト	—	CV-1	—	
P270	亜円形状	29	25	2	6.784	暗褐色粘土質シルト	—	CV-1	—	
P271	円形状	28	25	13	6.757	黒褐色粘土質シルト	P272	CV-1	—	
P272	楕円形状	36	26	11	6.747	黒褐色粘土質シルト	P271	CV-1	土師質土器 1点	
P273	楕円形状	55	44	14	6.755	黒褐色粘土質シルト	—	CV-2	弥生土器 1点 土師質土器(摩耗) 4点 瓦質土器(摩耗) 1点	156
P274	楕円形状	26	20	9	6.773	黒褐色粘土質シルト /灰色シルト混	—	CV-3	—	
P275	円形状	28	26	7	6.821	黒褐色粘土質シルト	—	CV-3・4	—	
P276	楕円形状	35	28	11	6.791	黒褐色粘土質シルト	P277	CV-3・4	土師質土器 2点	
P277	楕円形状	27	17	5	6.806	黒褐色粘土質シルト	P276	CV-4	—	
P278	楕円形状	25	20	21	6.811	黒褐色粘土質シルト	SX1	CV-4	—	
P279	円形状	28	26	7	6.698	暗褐色粘土質シルト	土坑状遺構	BV-8 CV-5	—	
P280	亜円形状	40	34	9	6.749	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	CV-5	土師器 1点 土師質土器 3点	
P281	楕円形状	42	30	5	6.720	暗褐色粘土質シルト	土坑状遺構	CV-5	—	
P282	円形状	33	32	16	6.795	暗褐色粘土質シルト /灰色シルト混	—	CV-6	弥生土器 1点	122
P283	楕円形状	43	35	19	6.781	黒褐色粘土質シルト	土坑状遺構	CV-5・6	弥生土器(摩耗) 1点	
P284	楕円形状	38	30	11	6.761	暗褐色粘土質シルト	—	CV-9	須恵器 1点	
P285	円形状	40	35	20	6.750	黒褐色粘土質シルト	—	CV-11	—	
P286	亜円形状	53	44	9	6.799	黒褐色粘土質シルト	—	CV-11	弥生土器(摩耗) 1点	
P287	亜円形状	36	31	16	6.734	黒褐色粘土質シルト	—	CV-11・12	土師質土器(摩耗) 1点	
P288	楕円形状	43	34	15	6.706	黒褐色粘土質シルト	—	CV-13	—	
P289	楕円形状	30	26	7	6.698	灰色シルト	—	CV-14	—	
P291	円形状	60	56	21	6.555	黒褐色粘土質シルト	SX1/P293	DV-7・8	弥生土器 1点	
P292	亜円形状	(23)	41	8	6.538	黒褐色粘土質シルト	SX1/P293	DV-8	—	
P294	楕円形状	(24)	27	9	6.512	黒褐色粘土質シルト	SX1/P297 土坑状遺構	EV-1・5	—	
P295	楕円形状	43	25	14	6.550	黒褐色粘土質シルト	SX1/P296 土坑状遺構	EV-2	—	
P296	亜円形状	29	(20)	5	6.579	黒褐色粘土質シルト	SX1/P295 土坑状遺構	EV-2	弥生土器(摩耗) 2点	
P298	亜円形状	52	44	12	6.532	黒褐色粘土質シルト	SX1	EV-5・6	弥生土器 1点	
P299	方形状	57	(30)	6	6.556	黒褐色粘土質シルト /灰色シルト混	土坑状遺構 溝渠状遺構	EV-2	—	
P300	楕円形状	55	40	22	6.578	黒褐色粘土質シルト /灰色シルト混	土坑状遺構 溝渠状遺構	EV-6・10	—	
P301	円形状	(28)	35	9	6.553	黒褐色粘土質シルト /灰色シルト混	土坑状遺構 溝渠状遺構	EV-10	—	
P302	楕円形状	56	(32)	13	6.537	黒褐色粘土質シルト	溝渠状遺構	EV-10・11	—	
P303	円形状	19	18	10	6.534	黒褐色粘土質シルト	溝渠状遺構	EV-10	—	
P304	円形状	35	33	8	6.510	暗褐色粘土質シルト	溝渠状遺構	EV-14	—	
P305	楕円形状	54	43	13	6.682	黒褐色粘土質シルト	溝渠状遺構	CIV-1	—	

第14表 ピット状遺構 計測表9

遺物觀察表

遺物観察表凡例

1. 貿易陶磁器の分類は大略において『土佐神社西遺跡・土佐神社』（高知市教委 2006）所収一覧（小野分類）に準拠した。
2. 煮炊具の分類は大略において『中近世土器の基礎研究 21』（日本中世土器研究会 2007）所収「四国の土製甕・羽釜・鍋」（吉成承三）に準拠した。
3. 近世陶磁器については浜田恵子氏（高知市教委）に御教示を頂いた。
4. 法量（ ）は残存値、[] は復元値である。

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
4 (第14図)	ST1	弥生土器 壺	—	(2.2)	—	内) 橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面はナデ調整。内面はハケ調整をナデで消す。口縁部は外反する。	二重口縁壺の可能性
5 (第14図)	ST1	弥生土器 壺	[14.0]	(3.5)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はナデ調整。口縁部は僅かに内傾し、端部は丸状に面を取る。	二重口縁壺の可能性
6 (第14図)	ST1	弥生土器 壺	[24.0]	(1.2)	—	内) 橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はナデ調整。口縁部はラッパ状に外反し、端部は面を取って若干下方に狭み出す。	広口壺の可能性
7 (第14図)	ST1	弥生土器 壺	[25.1]	(1.7)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はナデ調整。口縁部はラッパ状に外反し、端部は面を取って若干下方に肥厚する。	広口壺の可能性
8 (第14図)	ST1 (床面)	弥生土器 壺	[20.6]	(2.2)	—	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整をナデで消す。内面は横ハケ調整。口縁部はラッパ状に外反し、端部は凹状を呈して上下に拡張する。	広口壺の可能性
9 (第14図)	ST1 P6	弥生土器 壺	[16.8]	(1.4)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面はハケ、内面はナデ調整。口縁部はラッパ状に外反し、端部は上下に拡張する。	広口壺の可能性
11 (第14図)	ST1	弥生土器 甕	[14.0]	(3.3)	—	内) にぶい褐 外) にぶい褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面に叩目痕。内面に指頭圧痕。口縁部は「く」字形に外反し、口唇部に刻目状痕。	
12 (第14図)	ST1 (下位)	弥生土器 甕	[12.6]	(2.6)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部は「く」字形に外反する。ユビオサエによる成形。	
13 (第14図)	ST1	弥生土器 甕	[18.4]	(3.0)	—	内) 黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面に叩目痕。内面はハケ調整。口縁部は「く」字形に外反し、端部は面を取る。	全体的に摩耗
14 (第14図)	ST1 (上位)	弥生土器 (胸部)	—	(13.9)	—	内) 灰黄褐 外) 灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をユビオサエで消す。	内面に煤け
15 (第14図)	ST1	弥生土器 (底部)	—	(10.9)	[4.6]	内) 灰黄 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。下胸部を粗いハケ、上胸部を細いハケで調整を行う。内面はユビオサエ・ナデ調整。外底面に叩目痕。底部は平底状。	
16 (第14図)	ST1 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(1.8)	3.1	内) 橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内底面はナデ調整。外底面にケズリ痕。底部は平底状。	
17 (第14図)	ST1	弥生土器 (底部)	—	(2.1)	3.1	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内底面にケズリ痕。底部は平底状。	
18 (第14図)	ST1	弥生土器 (底部)	—	(1.9)	4.3	内) 浅黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部は丸底状。	
19 (第14図)	ST1 (4層)	弥生土器 (底部)	—	(2.6)	[2.4]	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内底部はハケ調整。器表に亀裂。底部は丸底化。	
20 (第14図)	ST1 (4層)	弥生土器 (底部)	—	(1.8)	2.8	内) 淡黄 外) 灰白/暗灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内底部はナデ調整。底部は形骸化した平底状。	外面に煤け
21 (第14図)	ST1 (4層)	弥生土器 (底部)	—	(2.0)	3.7	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内底面はハケ調整。底部は丸底化。	
22 (第14図)	ST1 P5	弥生土器 (底部)	—	(1.8)	3.4	内) 暗灰黄 外) 暗灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は平底状。	内底面にお焦げ
23 (第14図)	ST1	弥生土器 高坏	—	(2.9)	—	内) 浅橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。円柱状の脚部外面にミガキ。内面に絞り痕。分割成形。	ミニチュア土器?
24 (第14図)	ST1 (4層)	弥生土器 高坏	—	(2.3)	[14.0]	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。脚部内外面はハケ調整。脚端部は面を取り、ハケ調整。	
25 (第14図)	P117	弥生土器 高坏	—	(2.5)	[21.0]	内) 明黄褐 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。脚部外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。脚端部は面を取り、ハケ調整。	
26 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[15.8]	6.2	4.8	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面はハケ調整。口縁端部が僅かに凹状を成す。底部は丸底化。	全体的に若干摩耗
27 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[20.0]	(4.0)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面はハケ調整。口縁部外面は横ナデ調整。端部は丸く収める。	外面に煤け
28 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	—	(3.3)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面は叩目をナデ消す。内面上端は横ハケ以下縦ハケ調整。端部は面を取る。	
29 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[13.5]	6.9	—	内) 黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部内外面にケズリ。口縁端部は僅かに凹状を呈す。底部は丸底状。	全体的に若干摩耗
30 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[16.4]	(2.7)	—	内) 灰黄褐 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面は横ハケ、内面はミガキ調整。口縁端部は面を取る。	
31 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[12.6]	(3.4)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面は叩目をナデで消す。内面はハケ調整。口縁端部は丸く収める。	全体的に若干摩耗
32 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[15.4]	(4.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面に叩目痕。内面はハケ調整。口縁端部は面を取り、僅かに外方に張り出す。ユビオサエによる成形。	外面に煤け 壺の可能性を含む
33 (第15図)	ST1	弥生土器 高坏	[16.6]	(2.6)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部内外面はナデ調整。端部は丸状に面を取る。	
34 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[10.6]	(2.7)	—	内) 浅黄 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面は叩目をナデで消す。内面はナデ調整。	全体的に摩耗 浅鉢の可能性
35 (第15図)	ST1	弥生土器 鉢	[13.5]	(2.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部内面はハケ調整。口縁端部は僅かに凹状を成す。	
36 (第15図)	ST1 (4層)	弥生土器 鉢	[17.0]	(3.0)	—	内) にぶい黄橙 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面は叩目をハケで消す。内面は横ハケ調整後、ミガキ。口縁端部は面を取る。	

第15表 遺物観察表 2 (弥生土器・他)

遺物観察表

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
37 (第15図)	ST1 (4層)	弥生土器 鉢	4.8	3.3		内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。ユビオサエ・ユビナデ調整。底部は丸底状。手握ね成形。	ミニチュア土器
38 (第15図)	ST1	弥生土器 支脚	—	(4.8)	—	内) にぶい黄褐 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。内面に絞り痕。手握ね成形。	
39 (第15図)	ST1	弥生土器 支脚	—	(3.8)	—	内) にぶい黄 外) にぶい黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面に指頭圧痕。手握ね成形。	
40 (第15図)	ST1 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(7.3)	—	内) にぶい黄橙 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はユビナデ調整。	外面に煤け
41 (第15図)	ST1 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(4.1)	—	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をナデで消す。	
42 (第15図)	ST1 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(3.5)	—	内) にぶい黄橙 外) 黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	内面に煤け
43 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(6.8)	—	内) 褐灰 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をユビナデで消す。	
44 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(3.8)	—	内) 明赤褐 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
45 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(3.6)	—	内) にぶい黄褐 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面は横ハケ調整。	
46 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(8.2)	—	内) にぶい黄褐 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整。	
47 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(3.8)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をナデで消す。内面はハケ調整。	
48 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(3.2)	—	内) 灰褐 外) にぶい赤褐	チャート・雲母片等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
49 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(5.0)	—	内) にぶい黄橙 外) 明黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はユビナデ調整。	
50 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(4.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をナデで消す。	全体的に摩耗
51 (第15図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(4.0)	—	内) にぶい黄橙 外) 黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部内外面はハケ調整。	
52 (第16図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(5.5)	—	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をナデで消す。	内外面に煤け
53 (第16図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(4.6)	—	内) 黄灰 外) 黄橙	細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をユビナデで消す。	
54 (第16図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(3.5)	—	内) にぶい黄橙 外) 明赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
55 (第16図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(5.1)	—	内) 黄褐 外) 暗灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面は粗いハケ調整。	
56 (第16図)	ST1	弥生土器 (胴部)	—	(6.1)	—	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面にケズリ痕。	
57 (第16図)	ST1 (床面)	弥生土器 (胴部)	—	(4.9)	—	内) 橙 外) 褐灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面にケズリ痕。	
58 (第16図)	ST1 (4層)	弥生土器 (胴部)	—	(2.5)	—	内) 浅黄 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
59 (第16図)	ST1 (4層)	弥生土器 (底部)	—	(2.5)	—	内) 黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
60 (第16図)	ST1 (壁溝)	弥生土器 (胴部)	—	(5.1)	—	内) 黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
61 (第16図)	ST1 P3	弥生土器 (胴部)	—	(5.6)	—	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
70 (第18図)	ST2 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(6.0)	—	内) にぶい黄橙 外) 黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はユビナデ調整。	
71 (第18図)	ST2 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(6.1)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
72 (第18図)	ST2	弥生土器 (胴部)	—	(4.9)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整をナデで消す。	
73 (第18図)	ST2	弥生土器 (胴部)	—	(3.6)	—	内) にぶい黄褐 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	外面に煤け
74 (第18図)	ST2 中央土坑	弥生土器 (胴部)	—	(3.0)	—	内) 黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面はタタキ目をハケで消す。内面はハケ調整。	
75 (第18図)	ST2 中央土坑	弥生土器 甕	—	(2.7)	—	内) にぶい橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁端部は面を取り、逆L字形に外反。	
76 (第18図)	ST2 P3	弥生土器 (胴部)	—	(7.1)	—	内) 橙 外) 黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はハケ調整をナデで消す。	
78 (第20図)	ST2	弥生土器 壺	[19.4]	(3.6)	—	内) にぶい黄褐 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ、内面はナデ調整。口縁部はラッパ状に外反し、端部は上下に拡張して櫛描波状文を施す。	広口壺の可能性

第16表 遺物観察表 3 (弥生土器・他)

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
79 (第20図)	ST2	弥生土器 甕	—	(2.8)	—	内) 明赤褐 外) 明赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面は叩目をハケで消す。内面は→の横ナデ調整。口縁部は「く」字形に外反する。	
80 (第20図)	ST2	弥生土器 甕	—	(5.9)	—	内) 灰黄褐 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。口縁部は外反する。	
81 (第20図)	ST2	弥生土器 鉢	[13.6]	(3.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面は叩目をナデ消す。内面はハケ調整。口縁部は丸く取める。	
82 (第20図)	ST2	弥生土器 鉢	[14.6]	(4.2)	—	内) にぶい赤褐 外) にぶい赤褐	精選された胎土。体部内外面はナデ調整。口縁部は丸く取める。	
83 (第20図)	ST2	弥生土器 鉢	—	(3.7)	—	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部内外面はナデ調整。内面にヘラミガキ。口縁部は面を取る。粘土帯成形痕。	
84 (第20図)	ST2	弥生土器 鉢	—	(4.3)	—	内) にぶい橙 外) にぶい黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部内面はハケ調整。口縁部は面を取る。	
85 (第20図)	ST2 (床面)	弥生土器 (底部)	—	(1.8)	[4.0]	内) にぶい黄橙 外) 橙	細・粗粒砂を含む。底部外面にユビオサエ。内底部はハケ調整。外底部に叩目痕。底部は平底状。	
86 (第20図)	ST2 (床面)	弥生土器 (底部)	—	(1.9)	4.6	内) にぶい橙 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内面はハケ調整。底部は平底状。	外面に煤け
87 (第20図)	ST2 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(1.5)	[5.0]	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内面はハケ調整。底部は平底状。	
88 (第20図)	ST2 (上位)	弥生土器 土製品	—	—	—	内) 黒褐 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。焼成後穿孔痕。	内面に煤け 転用品の可能性
89 (第20図)	ST2	弥生土器 支脚	—	—	—	内) 外) にぶい黄橙	精選された胎土。受部(角状突起)。手捏ね成形。	
90 (第20図)	ST2 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(3.2)	—	内) 橙 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	外面に煤け
91 (第20図)	ST2 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(4.9)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整。	
92 (第20図)	ST2 (上位)	弥生土器 (胴部)	—	(4.4)	—	内) 灰白 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
93 (第20図)	ST2 (胴部)	弥生土器 (胴部)	—	(4.0)	—	内) 橙 外) 明赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
94 (第20図)	ST2 (下位)	弥生土器 (胴部)	—	(4.8)	—	内) 黄灰 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整。	
95 (第20図)	ST2 (下位)	弥生土器 (胴部)	—	(4.8)	—	内) 灰黄褐 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整。	外面に煤け
96 (第20図)	ST2 (下位)	弥生土器 (胴部)	—	(5.2)	—	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面はナデ調整。	外面に煤け
97 (第20図)	ST2 (下位)	弥生土器 (胴部)	—	(4.5)	—	内) 橙 外) 赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	外面に煤け
99 (第21図)	SX1 (胴部)	弥生土器 (胴部)	—	—	—	内) 橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面に叩目痕。内面は粗いハケ調整。	土製品の可能性
100 (第22図)	SX1 (上位)	弥生土器 高坏	[6.0]	(4.1)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。坏部内外面に指頭圧痕。脚部外面はハケ調整。内面に絞り痕。手捏ね成形。	ミニチュア土器
101 (第22図)	SX1 (底部)	弥生土器 (底部)	—	(2.5)	3.7	内) 黄橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部は平底状。	
102 (第22図)	SX1 (最下層)	弥生土器 (底部)	—	(3.1)	[2.6]	内) 橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内面にユビオサエ。底部は平底状。	内外面に煤け
103 (第22図)	SX1	弥生土器 鉢	[17.0]	(6.3)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。口縁部は面を取る。	
104 (第22図)	SX1 P6 (P240)	弥生土器 (胴部)	—	(3.5)	3.0	内) にぶい橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内底面はハケ調整、ユビナデ。外底面にケズリ痕。底部は平底状。	搬入品の可能性
105 (第22図)	SX1 P6 (P240)	弥生土器 (胴部)	—	(3.0)	—	内) 橙 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	外面に煤け
106 (第22図)	SX1 P5 (P290)	弥生土器 (胴部)	—	(4.5)	—	内) 灰褐 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面にケズリ痕。	
107 (第23図)	SX1 (礫層)	弥生土器 (胴部)	—	(7.7)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整。	外面に煤け
108 (第23図)	SX1 (礫層)	弥生土器 (胴部)	—	(5.0)	—	内) 灰黄褐 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	外面に煤け
109 (第23図)	SX1 (礫層)	弥生土器 (胴部)	—	(8.8)	—	内) にぶい赤褐 外) 淡黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はユビナデ調整。	外面に煤け
110 (第23図)	SX1	弥生土器 (胴部)	—	(5.5)	—	内) 明黄褐 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整。	
111 (第23図)	SX1	弥生土器 (胴部)	—	(9.3)	—	内) にぶい黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
112 (第23図)	SX1	弥生土器 (胴部)	—	(4.5)	—	内) 黒 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胴部外面は叩目をハケで消し、ミガキ調整。内面はハケ調整。	内面に煤け

第17表 遺物観察表 4 (弥生土器・他)

遺物観察表

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
113 (第23図)	SX1	弥生土器 (胸部)	—	(4.6)	—	内) にぶい黄褐 外) 明赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
114 (第23図)	SX1	弥生土器 (胸部)	—	(5.2)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面はハケ調整。内面はナデ調整。	
115 (第23図)	SX1	弥生土器 (胸部)	—	(3.5)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
116 (第23図)	SX1 SK1	弥生土器 甕	—	(3.8)	—	内) 橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	
117 (第24図)	P41	弥生土器 (底部)	—	(2.2)	[7.4]	内) 橙 外) 明黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面は叩目をハケで消す。内底面にユビオサエ。底部は平底状。	
118 (第24図)	P81	弥生土器 壺	[27.7]	(2.6)	—	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部内外面は横ナデ調整。外面はハケ調整。口縁部は外反し、端部は面を取る。	広口壺の可能性
119 (第24図)	P81	弥生土器 (底部)	—	(2.7)	[3.0]	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内面はナデ調整。	外面に煤け
120 (第25図)	P86	弥生土器 (底部)	—	(1.9)	[4.6]	内) にぶい橙 外) 浅黄	雲母片等の細粒砂を含む。底部外底面にヘラミガキ。内底面に↑のケズリ・指頭圧痕。底部は平底状。	外面に煤け 搬入品の可能性
121 (第25図)	P101	弥生土器 (底部)	—	(3.3)	[3.4]	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に叩目痕。内面はナデ調整。	
122 (第25図)	P282	弥生土器 (底部)	—	(2.6)	1.7	内) 灰黄褐 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面に指頭圧痕。内底面に板状原体による放射状の調整痕。底部は丸底状。	
123 (第25図)	P37	弥生土器 (底部)	—	(2.6)	[5.6]	内) 浅黄橙 外) 淡黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部外面は粗いハケ調整と沈線状の棒状圧痕。内底部はナデ調整。底部は形骸化した平底状。	
124 (第25図)	P37	弥生土器 鉢	[29.0]	(4.9)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面はナデ調整。内面はハケ調整後、ミガキ。口縁端部は面を取る。	全体的に若干摩耗
125 (第25図)	P61	弥生土器 鉢	[14.6]	(2.7)	—	内) 橙 外) 明赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。体部外面はナデ調整。内面にヘラミガキ。口縁端部はハケ状原体で面を取る。	
126 (第25図)	P14	弥生土器 壺	[20.0]	(2.8)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部は外反し、端部は面を取って僅かに下方へ拡張する。	
127 (第25図)	P65	弥生土器 壺	[12.4]	(3.7)	—	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部は直口気味に僅かに外反し、端部は面を取る。	
128 (第25図)	P47	弥生土器 (胸部)	—	(5.1)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
129 (第25図)	P37	弥生土器 (胸部)	—	(4.5)	—	内) 橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整からのヘラミガキ。	外面に煤け
130 (第25図)	P70	弥生土器 (胸部)	—	(4.4)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面に叩目痕。内面はナデ調整。	外面に煤け
131 (第25図)	P184	弥生土器 (胸部)	—	(4.1)	—	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整をナデで消す。	
132 (第25図)	P66	弥生土器 (胸部)	—	(5.3)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。	外面に煤け
133 (第26図)	包含層 (CV-12)	弥生土器 壺	[27.4]	(3.1)	—	内) 黒褐 外) 黒褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は一の横ハケ、内面はナデ調整。口縁部は外反し、端部は面を取る。	広口壺の可能性
134 (第26図)	包含層 (I区)	弥生土器 (胸部)	—	(3.5)	—	内) 浅黄橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面に叩目痕。内面はハケ調整。	
135 (第26図)	包含層 (II区)	弥生土器 (胸部)	—	(4.1)	—	内) 橙 外) 黒褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面はナデ調整後、ヘラミガキ。	外面に煤け
136 (第26図)	包含層 (P193)	弥生土器 (底部)	—	(6.3)	—	内) 浅黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をハケで消す。内面は↑のヘラケズリ。	
140 (第29図)	SK3	弥生土器 (胸部)	—	(4.1)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面に叩目痕。内面はナデ調整。	全体的に若干摩耗
154 (第33図)	P91	弥生土器 甕	[13.4]	(4.6)	—	内) にぶい黄 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面はハケ調整。口縁部は「く」字形に外反し、端部は丸く取める。	全体的に摩耗
2 (第5図)	野口遺跡	弥生土器 甕	[12.8]	(7.4)	—	内) 浅黄 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。口縁部内面はハケ調整。胸部内面はヘラケズリ。口縁部は「く」字形に外反し、端部は面を取る。	外面に煤け
189 (第38図)	野口遺跡	弥生土器 甕	[20.0]	(5.6)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部は直口気味に外傾し、端部は丸状に面を取る。	
190 (第38図)	野口遺跡	弥生土器 器台	[21.6]	(4.4)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい橙	雲母片等の細粒砂を含む。外面はハケ調整。内面にヘラミガキ。口縁部はラッパ状に外反し、端部は粘土帯を貼付して上下に拡張する。2条の凹線と竹管文を施す。	内面に煤け 搬入品の可能性 高坏状裝飾器台?
191 (第38図)	野口遺跡	弥生土器 (底部)	—	(7.8)	2.7	内) 淡黄 外) 淡黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。胸部外面は叩目をヘラミガキで調整。内底部はユビナデ・指頭圧痕。底部は形骸化した平底状。	外面に煤け
192 (第38図)	野口遺跡	弥生土器 (底部)	—	(2.3)	2.7	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部内外面ハケ調整。底部は平底状で、外底面に棒状工具による文様状圧痕。	
193 (第38図)	野口遺跡	弥生土器 支脚	—	(6.0)	[13.5]	内) 淡黄 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。脚部内外面にユビナデ・ユビオサエ。手捏ね成形。	外面に煤け

第18表 遺物観察表 5 (弥生土器・他)

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径			
10 (第14図)	ST1 (上位)	土師器 甕	[18.0]	(2.6)	—	内) 橙 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部内外面はハケ状原体による調整。口縁部は屈曲し、端部は面を取る。	
137 (第28図)	SK2	須恵器 描鉢	[21.6]	(2.4)	—	内) 黄灰 外) 黒	口縁内端は僅かに突出し、内面に4本の条線(描目)を施す。口縁部上端に重ね焼きによる剥離痕。外面に被灰(自然釉)。	非在地系の可能性 (池澤氏の御教示)
139 (第29図)	SK3	土師質土器 坏	[11.2]	(4.5)	—	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。体部は逆「ハ」字形に開き、外面にロクロ目痕。口縁端部は丸く収める。	全体的に摩耗
142 (第30図)	P2	須恵器 坏	—	(1.1)	[5.5]	内) 黄灰 外) 黄灰	精選された胎土。内外面はナデ調整。底部は平底。	全体的に摩耗
143 (第30図)	P16	須恵器 (胴部)	—	(4.0)	—	内) 灰 外) オリーブ灰	精選された胎土。胴部外面に平行叩目痕。内面はナデ調整。	
144 (第30図)	P172	須恵器 蓋	—	(2.3)	—	内) 灰 外) 黄灰	精選された胎土。天井部内面はハケ調整。	
145 (第30図)	P284	須恵器 (胴部)	—	(2.9)	—	内) 灰黄 外) 灰	精選された胎土。胴部外面は平行叩目をハケ状原体で調整。	
146 (第31図)	P68	瓦質土器 鍋	[25.1]	(3.2)	—	内) 灰黄 外) 灰	精選された胎土。口縁部は屈曲し、端部は面を取る。外面に指頭圧痕。	焼成不良 全体的に摩耗
147 (第31図)	P82	土師質土器 皿	[10.6]	1.5	[6.0]	内) にぶい橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。	内底面に煤け
148 (第31図)	P82	土師質土器 皿	[12.0]	1.9	[8.0]	内) 橙 外) 橙	回転ナデ調整(外面に工具状の圧痕)。外面下半に指頭圧痕。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部断面が僅かに先細る形状。	
149 (第32図)	P87	土師質土器 羽釜	[20.0]	(5.7)	—	内) にぶい褐 外) にぶい褐	チャート・雲母片等の細粒砂を含む。体部外面鏝下に平行叩目痕。内外面はナデ調整。口縁部は僅かに内傾し、端部は面を取る。内面は横ナデにより凹状を成す。	外面に炭化物付着 搬入品の可能性 番磨型/16C代
150 (第32図)	P200	土師質土器 鍋	[21.0]	(6.2)	—	内) 淡黄 外) 淡黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はナデ調整。外面に指頭圧痕。口縁部は屈曲し、端部は丸く収める。	外面に炭化物付着 151と同一個体?
151 (第32図)	P200	土師質土器 鍋	[20.8]	(5.6)	—	内) 淡黄 外) 淡黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はナデ調整。外面に指頭圧痕。口縁部は屈曲し、端部は丸く収める。	外面に炭化物付着 150と同一個体?
152 (第32図)	P200	土師質土器 坏/皿	[10.6]	3.5	[5.6]	内) 橙 外) 橙	ベタ底から体部が斜上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げられる。内外面にロクロ目痕。底部回転糸切り痕。	全体的に摩耗
153 (第32図)	P155	土師質土器 坏	—	(1.6)	[7.0]	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。底部内外面にロクロ目痕。底部回転糸切り痕。	全体的に若干摩耗
155 (第33図)	P91	土師質土器 皿	[14.0]	(1.5)	—	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。ナデ調整。	
156 (第33図)	P273	土師質土器 坏	—	(1.1)	[7.6]	内) にぶい橙 外) 橙	精選された胎土。内底部に渦巻状成形痕。底部回転糸切り痕。	全体的に若干摩耗
157 (第33図)	P264	土師質土器 碗	—	(1.3)	[9.2]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。底部外縁端部に輪高台を有し、接合部は僅かに凹状を呈す。分割成形。	
158 (第33図)	P235	土師質土器 坏	[13.6]	(3.1)	—	内) 灰黄 外) 灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁端部は丸く収める。	
159 (第33図)	P229	製塩土器 (胴部)	—	—	—	内) にぶい橙 外) 浅黄橙	細・粗粒砂を含む。内面に布目圧痕。	
160 (第33図)	包含層 (EV)	製塩土器 (胴部)	—	—	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面に布目圧痕。	
161 (第34図)	包含層 (BV-6)	須恵器 甕	[19.8]	(1.6)	—	内) 黄灰 外) 黄灰	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁端部は面を取る。	
162 (第34図)	包含層 (BIII)	須恵器 蓋	[15.2]	(1.6)	—	内) 灰 外) 灰	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。端部は凹状を成し、下端を張り出す。	
163 (第34図)	包含層 (DIV-2)	須恵器 皿	—	(1.1)	[15.2]	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り痕。	
164 (第34図)	包含層 (CIV-5)	須恵器 坏	—	(2.0)	[9.4]	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。回転ナデ調整。底部は平底。	
165 (第34図)	包含層 (攪乱)	須恵器 坏	—	(1.5)	[4.5]	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。回転ナデ調整。底部外縁端部に貼付輪高台。	接合資料
166 (第34図)	包含層 (BIII)	土師質土器 皿	[14.2]	1.3	[10.6]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁端部は丸く収める。	
167 (第34図)	包含層 (ST2)	土師器 皿	—	(1.1)	[11.7]	内) 明赤褐 外) にぶい黄橙	精選された胎土。底部外面に板状原体による圧痕。内底面端部は僅かに凹状を成す。内底部赤色塗彩(酸化鉄)※。	※藤方氏の御教示
168 (第34図)	包含層 (BV)	緑釉陶器 皿	[15.4]	(1.9)	—	内) オリーブ黄 外) オリーブ	精選された胎土(陶質)。回転ナデ調整。口縁端部は端反り気味に外反。	洛西産の可能性 9C後半~10C初頭
169 (第34図)	包含層 (上位)	青磁 碗	[16.6]	(2.9)	—	内) オリーブ黄 外) オリーブ黄	胎土はやや粗く灰黄色。全面に施釉し、貫入がみられる。口縁端部は丸く収める。外面に鎬蓮弁文を施す。	龍泉窯系 I 5b類 13C後半~14C前半
170 (第34図)	包含層 (DIV・V)	青磁 碗	[13.6]	(2.7)	—	内) 灰オリーブ 外) 灰オリーブ	胎土は密で灰黄褐色。全面に薄く施釉し、僅かに貫入がみられる。口縁端部は丸く収める。外面に細(剣先)蓮弁文を施す。	龍泉窯系 B 4類 15C前半
171 (第34図)	作土層 (下位)	青磁 碗	[12.4]	(2.0)	—	内) 灰オリーブ 外) 灰オリーブ	胎土は密で灰色。全面に薄く施釉し、貫入がみられる。口縁部は端反りし、端部は丸く収める。残存部無文。	龍泉窯系 D 類 14C前半~16C
172 (第35図)	包含層 (上位)	土師器 甕	[18.1]	(3.7)	—	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部内外面は横ハケ調整。口縁部は屈曲し、端部は面を取って僅かに上下に肥厚する。	

第19表 遺物観察表 6 (中世土器・他)

遺物観察表

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径			
173 (第35図)	包含層 (SX1)	土師器 羽釜	[22.6]	(2.9)	—	内) 灰黄褐 外) 灰黄褐	チャート等の細粒砂を含む。鏝の断面は台形状を呈し、端部は僅かに凹(沈線)状を成す。	摂津型 10C後半～11C前半
174 (第35図)	包含層 (SX1)	土師器 羽釜	—	(2.9)	—	内) 黄灰 外) 灰	精選された胎土。外面はナデ調整。鏝端部は面を成す。	摂津型 10C後半～11C前半
175 (第35図)	包含層 (土坑状)	瓦質土器 羽釜	[19.9]	(3.2)	—	内) 灰 外) 灰	チャート等の細粒砂を含む。内外面にユビオサエ。ナデ調整。鏝端部は丸く収める。	13C後半～14C前半
176 (第35図)	包含層 (ST2)	瓦質土器 羽釜	—	(4.3)	—	内) 黄灰 外) 黄灰	チャート等の細粒砂を含む。鏝部は退化し、接合部に沈線状痕。	焼成不良 全体的に摩耗
177 (第35図)	作土層 (下位)	瓦質土器 鏝	[19.0]	(3.6)	—	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。口縁部は僅かに外反する。	全体的に摩耗 土佐型の可能性
178 (第35図)	包含層 (ST2)	土師器 羽釜	—	(2.9)	—	内) 外) 橙	チャート等の細粒砂を含む。	摂津型の可能性
179 (第35図)	包含層 (BIV-15)	土師器 羽釜	—	(1.1)	—	内) 外) 暗灰黄	精選された胎土。鏝部外面はハケ状原体による調整。端部は丸く収める。	

第20表 遺物観察表 7 (中世土器・他)

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径			
183 (第35図)	包含層 (BIV-V)	陶磁器 碗	—	(3.0)	3.8	内) 灰白 外) 灰白	器面に雨降り文を施す。底部外面に1条、高台外面に二重界線の染付。畳付に釉剥ぎを認める。	17C末～18C前半
184 (第35図)	包含層 (CV)	陶磁器 碗	—	(3.3)	[5.0]	内) 灰白 外) 灰白	陶胎染付。底部外面に1条、高台外面に二重界線の染付。畳付に重ね焼きによる釉剥ぎを認める。	肥前産 17C末～18C前半
185 (第35図)	包含層 (溝渠状)	陶磁器 碗	—	(3.4)	[5.0]	内) 灰白 外) 灰白	陶胎染付。底部外面に1条、高台外面に二重界線の染付。畳付に釉剥ぎを認める。	18C前半
186 (第35図)	包含層 (BV-4)	陶磁器 碗	—	(2.6)	[5.2]	内) 灰白 外) 灰白	陶胎染付。器面に山水文を施す。底部外面に1～2条、高台外面に二重界線の染付。畳付に釉剥ぎを認める。	
187 (第35図)	包含層 (溝渠状)	陶磁器 碗	—	(2.4)	[5.0]	内) 灰白 外) 灰白	陶胎染付。底部外面に1条、高台外面に二重界線の染付。畳付に釉剥ぎを認める。	
188 (第35図)	包含層 (溝渠状)	土師質土器 皿	—	(1.6)	[7.0]	内) にぶい赤褐 外) にぶい黄橙	精選された胎土。底部外面に1条の微隆起状の稜線。削り出し高台。	

第21表 遺物観察表 8 (近世陶磁器・他)

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量 (cm)				(g/kg)	重量	色調	特徴	備考
			全長	全幅	全厚	重量					
3 (第12図)	ST1 中央土坑	礫石器 (砥石)	15.9	9.5	6.7	1083g	内) 外)	砂岩。3面に研磨され凹面(使用面)を成し、条線状の擦痕を認める。端部及び一部使用面に敲打痕。	鍍金関連石の可能性		
62 (第16図)	ST1 (床面)	礫石器	15.4	7.4	4.2	662g	内) 外)	砂岩。円礫(小判状)。			
63 (第16図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	16.6	7.6	5.0	913g	内) 外)	砂岩。円礫(棒状)。両端に敲打痕(磨耗痕)。			
64 (第16図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	14.1	6.4	3.1	416g	内) 外)	砂岩。円礫(小判状)。敲打痕(磨耗痕)。			
65 (第16図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	17.1	7.0	5.0	742g	内) 外)	砂岩。円礫(棒状)。両端に敲打痕(磨耗痕)。			
66 (第17図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	9.2	6.2	4.3	590g	内) 外)	砂岩。円礫(棒状)。両端に敲打痕。酸化鉄付着。			
67 (第17図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	14.4	6.1	3.9	500g	内) 外)	砂岩。円礫(棒状)。両端に敲打痕。周縁に磨耗痕。			
68 (第17図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	18.1	6.7	3.6	649g	内) 外)	砂岩。円礫(小判状)。打割痕。端部に鉄錆状付着?			
69 (第17図)	ST1 (床面)	礫石器 (叩石)	16.7	7.0	3.4	569g	内) 外)	砂岩。円礫(小判状)。敲打痕(磨耗痕)。			
77 (第19図)	ST2 (床面)	礫石器 (台石)	40.5	29.9	14.7	24kg	内) 外)	粗粒砂岩。主上面は僅かに平滑で、周縁部に敲打痕(磨耗痕)。			
98 (第20図)	ST2 中央土坑	礫石器	18.5	17.2	4.6	2053g	内) 外)	砂岩。円礫(円盤状)。打割痕。周縁部に磨耗痕。平坦面に煤け、被熱痕。			
138 (第28図)	SK2 (底面)	礫石器	25.6	19.9	7.6	5000g	内) 外)	砂岩。亜円礫(円盤状)。打割痕。平坦面及び周縁部に敲打痕(整形加工痕?)。打割痕(抉り状?)。	石錘の可能性		
141 (第29図)	SK3 (底面)	礫石器	22.3	9.0	7.3	2301g	内) 外)	緑色岩。亜円礫(棒状)。使用痕なし。			
180 (第35図)	包含層	土錘	(5.4)	1.7	1.7	(12g)	内) 外) 灰白/黄灰	チャート等の細粒砂を含む。ナデ調整。紡錘形。端部欠損(使用痕の可能性)※。	外面に煤け ※池澤氏の御教示		
181 (第35図)	包含層	土錘	4.3	1.3	1.3	(6g)	内) 外) にぶい赤褐	精選された胎土。ナデ調整。円筒形。端部欠損(使用痕の可能性)※。	外面に煤け ※池澤氏の御教示		

第22表 遺物観察表 9 (石器・他)

第IV章 総括

第1節 射場屋敷遺跡における弥生後期後葉の様相

弥生後期後葉を示唆する竪穴住居状遺構などを検出した当遺跡は、物部川下流域東岸に形成される野市台地縁辺部(扇端部)に展開する弥生後期末～古墳初頭にかけての吉川町域の遺跡群(野口遺跡・南中曾遺跡等)との関連性が考慮され、対象地はその位置的中心附近に所在していると考えられる。

物部川下流域周辺の調査事例の蓄積により、当該期の土器編年や集落研究における変遷等の分析が整いつつあるが、本調査区では検出範囲や遺存状況などから十分な成果は得られず、有用な資料の提供には至らなかった。対象地における当該期の様相については概略するに留め、後事を俟ちたい。

(1) 出土遺物

弥生土器

本調査区における当該期の器種構成は壺、甕、高坏、鉢などであり、全出土遺物(約3,600点)における割合は約8割を占める。出土した土器片の殆どは叩き技法による成形が顕在化してくる時期(ヒビノキ式土器)に相当し、概して刷毛や撫^{ハケ}で^{ナデ}による調整が看取できるが、遺物の多くは細片であり調整範囲の観察は限定的である。遺構出土の遺物においても一括資料の埋存は僅少であり、組成比率は判然としない。

壺：本調査区における壺(口縁部)の割合は2割未満であり、その多くが広口壺である。口縁部はラップ状に外反し、端部は上下に拡張して凹状を呈するものや、肥厚して面を取るものなどがある。78(ST2)は口縁部外面に櫛描波状文を施すなどの加飾がみられ、ヒビノキⅡ式後半段階の特徴を示している。またST1から在地産と考えられる二重口縁壺の可能性を有する土器片を出土しているが、口縁部が僅かに内傾するもの(5：ヒビノキⅡ式)と外反するもの(4：ヒビノキⅢ式)がみられる。

甕：本調査区における甕(口縁部)の割合は約1割と僅少であるが、形状及び煤状炭化物の付着等が認められるなどの可能性を有する胴・底部を含めると実数は増加すると思われる。口縁部は「く」字形に外反し、長胴形の胴部は中位乃至中上位に最大径を有すると考えられ、外面の叩目をハケ調整で消している場合が多い。底部は小径な平底を基調とするなど概してヒビノキⅡ式の範疇に含まれると類推される。

高坏：本調査区における高坏(坏部・脚部)の割合は1割未満であり、器形による出土比率では最少である。23(ST1)は分割成形と考えられる小型の高坏である。坏部が接合部から剥離しており形状は不明であるが、脚部のヘラミガキは顕著である。100(SX1)は手捏ね成形のミニチュア土器と考えられ、覆土上位から出土するなど遺構廃絶に伴う祭祀性を含む意図的な埋置の可能性も考慮される^①。

鉢：本調査区における鉢(口縁部)の割合は約3割を占めており、器形による出土比率では最多である。叩き技法による成形が主であり、外面の叩目をハケやナデ調整で消している場合が多い。底部は不安定な丸底状を呈するなど、ナデ潰すことにより尖底化を指向する傾向がみられる^②。ST1出土の26・29は復元度が比較的高く、出土状況から一括廃棄の可能性を有するなど廃絶時期を窺える稀少な資料である。

支脚：本調査区において弥生後期後葉を示唆する竪穴住居状遺構から、僅少ながら土製支脚を出土している。何れも指頭圧痕が顕著であり、成形は粗雑な印象を受ける。脚部は中空を呈し、安定(重厚)感に欠けている。当遺跡で出土した支脚に完存する資料は無く全体の形態は判別できないが、38(ST1)は片口状で傾斜を持つ受け部を形成し、焼成は比較的堅緻である。県内での出土例は県東部を中心に弥生後期終末～古墳初頭にかけての集落遺跡に集中している傾向が指摘されている⁽¹⁰⁾。

石器

本調査区では砥石や叩石などの石器類(礫石器)十数点を出土している。これらは弥生後期後葉に位置付けられる竪穴住居状遺構などから見つかっており、ST 1からは全体の7割を超える9点を出土している。石材は物部川に産出される砂質を母岩とする円～超円礫であり、色相は概して灰色系を呈しているなど、形状や材質に一定の共通(規格)性が窺われる。大部分は自然礫(素材)の状態で用いており、使用・加工等により大きく剥落(欠損)している例は無く、出土した礫石器はほぼ完形を保っている。

砥石(3)：石材は砂岩を用い、不整形形状を呈している。研磨により3面が凹状を呈するなど多面を使用している。また側面及び使用面の一部に敲打痕がみられ、叩石と兼用していた可能性が考えられる。

叩石(62～69)：石材は全て砂岩の自然礫を用いている。円磨度は高く形状は棒状または扁平状を呈している例が多い。加工(成形)痕は無く周縁部に敲打痕及び擦痕等の使用痕(磨耗痕)が観察されるのみである。

台石(77)：ST 2の中央土坑の傍から、台石状の礫石器を据置いた状態で検出している。周縁部に磨耗痕がみられ、主上面は平滑で石皿状を呈しているが、用途及び遺構との関連性についても不明である。

(2)遺構

竪穴住居状遺構

本調査区において検出した竪穴住居状遺構は出土遺物の帰属時期から弥生後期後葉に位置付けられる。平面形態で隅丸形状を基調とし、床面中央から南寄りの位置に土坑状の中央ピットが設けられている配置も当該期の構造的特徴として指摘されている⁽⁹⁾。何れも4本主柱による上部構造(上屋)を想定でき、規模においても床面積が約20㎡以上を測る中型の住居跡と考えられるなど均等化が図られているが、検出位置が近接しており存続期間には先後関係を有すると思われる、遺跡内の住居状遺構の相互関係にも留意したい。またST 1では東側面に盛土によるとみられる高床部(ベッド状遺構)の存在を把握しているが、物部川流域の諸例とは異なる手法であり、ベッド状遺構の可能性も含めた検討が必要となる。

(3)小括

物部川下流域東岸(香南市吉川町域)での弥生後期後葉を示唆する遺物は野口遺跡や南中曾遺跡等の出土例で立証されていたが、遺構を伴う集落の存在は判然としていなかった状況において、今回の調査により当地域に集落跡が埋存することが明らかとなった。当時は県内でも遺跡数が増加する時期に該当し、要因には拠点集落となる田村遺跡群(南国市)の衰滅に起因する周辺地域への分布が指摘されている⁽¹⁰⁾。

本調査区での成果は竪穴住居及びピット状遺構のみの検出に留まり、限定された調査範囲から具体的

な集落構造を復原することは能わなかったが、接続する野口遺跡との時期的な併行関係を考慮すれば、周辺に集落跡が遺存している可能性は高いと推測され、埋蔵文化財包蔵地範囲の再検討が課題となる。

土器型式では概してヒビノキⅡ式(後半段階)の範疇に纏まり、主要な器種別の組成比率は不明瞭ながら当該期の一般的な傾向とほぼ一致していると推定され、当遺跡の興起として捉え得る。住居状遺構の改築に累世的な継続性が示唆されるが、以降の営為は確認できず弥生終末～古墳初頭には廃絶する集落と考えられる。背景には物部川段丘縁辺部への偏在化(集住)や自然環境の不安定化等に対応した、移行期における考古学的事象を伴う香宗川流域への意図的な社会的再編などの可能性が推論される⁽⁵⁾。

付. 野口遺跡出土の弥生土器

「昭和 57 年 10 月 19 日 野口遺跡の概要の紹介

高知県教育委員会文化振興課主事 角谷和男

(略)野口遺跡は、香美郡吉川村大字吉原小字西野口に所在する弥生時代後期終末～古墳時代前期前頭の時期の遺跡であり、現状は畑である。当地は、ちょうど吉川村と野市町との境界付近で、吉川村の中心地から西北方向の端部に位置している。

同遺跡は、古物部川の開析により形成した高位扇状地上に立地し、西方約 30mの所で比高 1m ぐらいの段差のある低位扇状地へ移行する。この低位扇状地は、弥生時代には、古物部川の氾濫原であった。

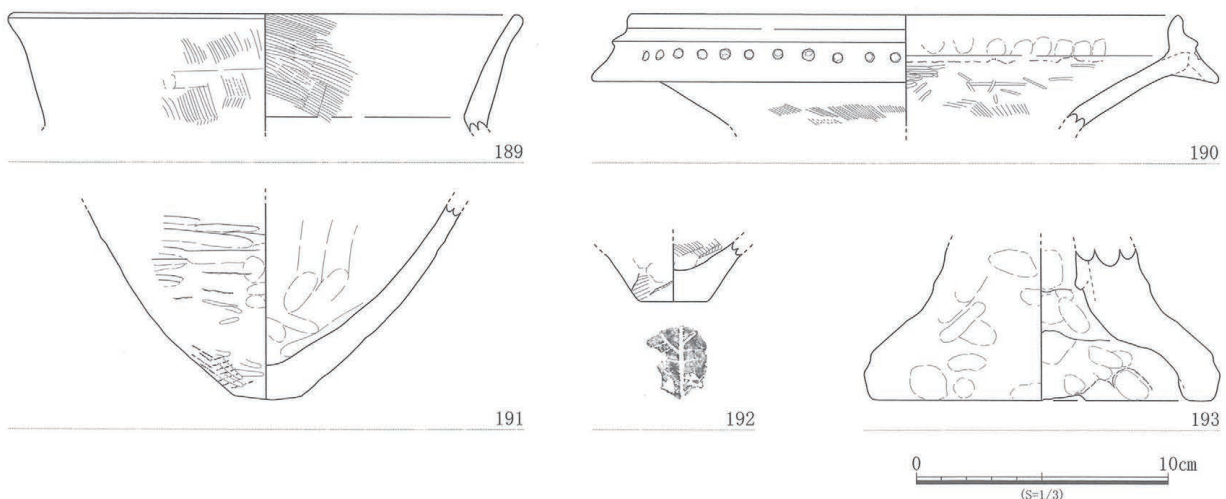
もし、発掘調査を実施すれば、高位扇状地では弥生時代後期終末の時期の集落跡が、そして、低位扇状地では水田跡等の遺跡が検出されるかもしれない。

野口遺跡からは、弥生時代後期終末～古墳時代前期前頭の時期の遺物が大半を占めているが、中世の土師質の土鍋等の遺物が出土しているため、弥生時代後期と中世の複合遺跡であると考えられる。

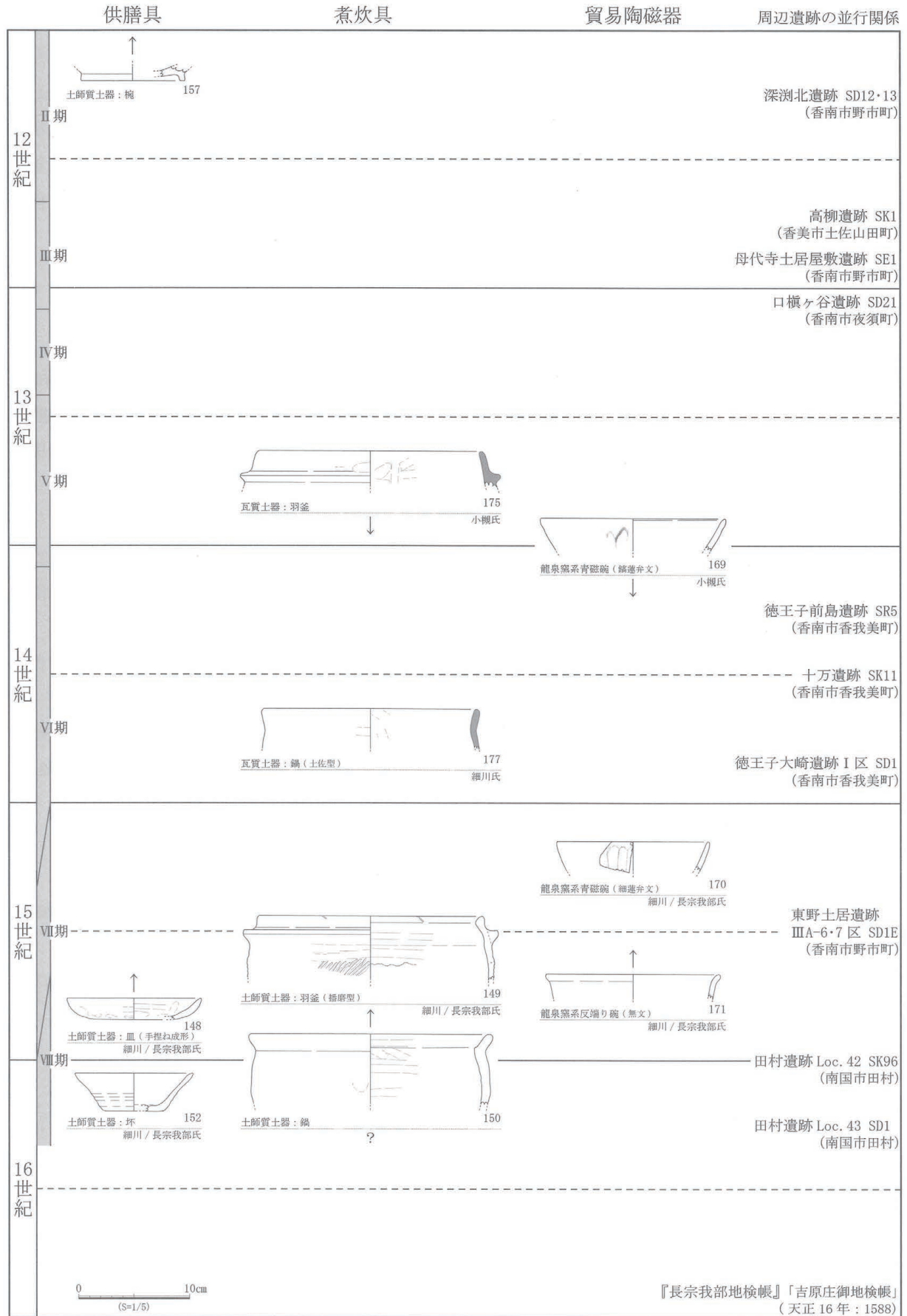
出土した遺物を器形別にみると、貯蔵用の壺形土器・煮沸用の甕形土器(2・189・191)・物を盛る高坏形土器・浅鉢形土器・椀形土器、祭祀用の特殊壺をのせる器台形土器(190)、土器を支える土製支脚(193)等の多様な遺物が出土している。

ちょうど、弥生時代後期終末の時期には、土器づくりに機能化が進み、器種が豊富になると共に、壺形土器の個体数が激減する傾向がある。今回の資料でも、同様の結果がみられた。」

『吉川村史』吉川村史編纂委員会 1999 年より抜粋(加筆)



第 37 図 野口遺跡出土遺物 (189 ~ 193 : S=1/3)



※1 時期区分は池澤俊幸氏による論考を参照した。※2 姓氏は当該期の吉原庄における大凡の支配権者を示す。※3 矢印は時期修正の可能性を示す。

第38図 射場屋敷遺跡 中世土器編年案 (S=1/5)

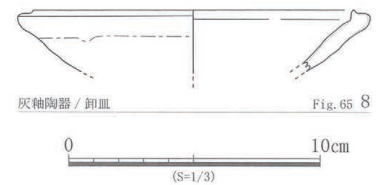
第2節 射場屋敷遺跡における古代～中近世期の土器様相

当遺跡の所在する香南市吉川町吉原には吉原庄の歴史が伝えられており、鎌倉初期から室町期にかけて営まれた同庄の主要部は吉原城跡周辺に展開していたと考えられている⁷⁰。調査対象地はその西方(西木戸)に位置しており、「射場屋敷」の遺称から当該期の埋蔵文化財が遺存している可能性が予察された。

然るに本調査で得られた出土遺物や検出遺構は、調査範囲や埋積状況等を考慮しても質・量共に一定量を得ず、当該期の土器研究に有用な資料を提供しているとは言い難い現状であった。当遺跡の性格について明確な位置付けを行う事は困難であるが、若干の考察を試み概括としたい。遺物の分類については遺構出土の遺物が僅少で、多くは包含層(文化層)からの出土であり、型式に基づく相互の共伴関係や、層位による相対的な出土状況を把握できる資料は乏しく、帰属時期の編年観については検討の余地が残り意を尽くせていない。本節では図化し得た遺物を概略するに留め、土器様相の纏めとしたい。

(1) 須恵器(貯蔵具・供膳具・他)

本調査区から出土した須恵器は何れも細片若しくは限定的部位の残片に留まるため、形態復元による編年付けは困難を伴う。特記として137(SK2)は還元焰焼成で生産されており、船戸遺跡⁷¹(四万十市)出土の瀬戸系灰釉陶器片(第39図)に形状が似通っているなど課題が残る。



第39図 船戸遺跡出土遺物

(2) 製塩土器

製塩土器と考えられる遺物は細片2点(159/P229・160)のみであり、形態及び法量等は不明であるが、内面に布目痕を有していることから型造りである可能性が考えられる。

(3) 緑釉陶器

本調査区において緑釉陶器は包含層接合資料で1点(168)を出土している。外面は黄緑色、内面はオリブ色に発色し、釉層は薄く部分的に着釉の風化・剥落が看取できる。胎土は陶質であり、口縁部は端反り気味に外反している。洛西窯若しくは篠窯と考えられ、平安京Ⅱ期中～新段階に位置付けられる。

(4) 土師質土器(土師器)

土師質土器は坏、皿、煮炊具等を出土しており、当該期の出土遺物における割合は9割以上を占める。供膳具に関しては殆どが回転台成形で底部回転糸切りを製作手法の基調としている。土師質土器とは轆轤(回転台)を用いて成形し、施釉せず低火度で酸化焰焼成された中世土器の一つとして捉えられており、本報告書においてもその名称を使用しているが、土師器との区別における概念規定は明確ではないとされる⁷²。搬入品(京都系土師器)の出土は確認していないが、在地の土師器製作技法としては非主流と考えられる手捏ね土器を僅少なながら出土している。 ※[]は復元値を示す

坏：152(P200)はベタ底から体部が斜上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げで内外面にロクロ目痕を有している。法量は口径[10.6]cm、器高3.5cm、底径[5.6]cmを測る。また157(P264)は輪高台を有しており、椀形態の様相を呈しているが、体部の剥離状態から分割成形技法の可能性も考えられる。

皿：回転ナデ調整によるものと(147/P82・166)と、それに加え体部外面下半に指頭圧痕を有するもの(148/P82)の2形態がみられる。法量は前者が口径[10.6~14.2]cm、器高1.4cm(平均値)、底径[6.0~10.6]cmであり、手捏ね成形とみられる後者は口径[12.0]cm、器高1.9cm、底径[8.0]cmを測る。

煮炊具：摂津型(10世紀後半~11世紀前半)と考えられる鏝部(173・174)と播磨型(15世紀代)とみられる口縁部(149/P87)を出土している。150・151(P200)は丸みを帯びた胴部から口縁部が短く外反し、胴部外面には炭化物が付着していた。二つは形状が類似しており、また重複して出土していることなどから同一個体の可能性も考えられる。同遺物はピット状遺構から中世後期に比定するとみられる土師質土器片(152)と伴出しているが、帰属時期を遡る所産の可能性を考慮し、出土状況については検討の余地が残る。

(5) 瓦質土器

瓦質土器は鉄釜の模倣形態と考えられる煮炊具(羽釜)を中心にみられるが、出土遺物における割合は僅少である。殆どが包含層出土遺物であり、共伴関係は把握し難い。13世紀後半に出現するとされる三足羽釜形態の脚部は確認していないが、鏝部は退化する傾向がみられる(176)。また14世紀中葉~後葉にかけて出現するとされる「土佐型鍋」は包含層(作土層下位)から1点出土している。当遺跡から出土した瓦質土器は炭素の吸着が不十分であり、焼成不良もみられるなど在地産の可能性が考えられる。

(4) 貿易陶磁器

本調査区において貿易陶磁器(青磁)は試掘調査出土遺物(1)を含めて細片で4点を確認しており、何れも包含層(文化層)からの出土である。2点は口縁上部片の特徴から刻花蓮弁文青磁碗と考えられ、169は13世紀後半~14世紀前半頃にかけての龍泉窯系青磁碗(鎬蓮弁文)である。外面の胎壁には蓮弁の浮彫りがみられるが、残存する範囲では弁稜の刻出が比較的不顕著である。170は15世紀前半頃を指標とする同系青磁碗(細蓮弁文)で、釉調は薄く片切彫りによる剣先蓮弁文がみられる。171は14世紀前半~16世紀にかけての無文の端反り碗で作土層下位(包含層最上位)から出土している。

(5) 土錘

土錘は包含層から円管状土錘数点を出土している。何れも端部が欠損しており実用した痕跡が窺われる。180は古代からの系譜を引く紡錘形の管状土錘であり、181は体色がにぶい赤褐色を呈し、焼成が堅緻であることから近世以降の所産の可能性が考えられる。土錘の出土は漁網(漁撈生産業)の存在を示しており、香南市域では曾我遺跡や下ノ坪遺跡など河川に近傍する遺跡からの出土例が報告されているが、弥生時代以降に通見する形態の土製品であり、時代推定の依拠を欠くところから本節に収めている。

(6) 近世陶磁器

近世期の所産と考えられる陶磁器類の多くは、包含層及び南端に所在する溝渠状遺構(攪乱)からの出土であり、遺物の帰属時期は概して17世紀末~18世紀前半頃の範疇に求められる。多くは陶胎染付碗であり、底部外面に1条、高台に2条の界線の染付を施し、畳付けに釉剥ぎを認めるが、口縁部の形態は何れも不明であり、出土状況から廃棄による埋存が考えられる。当遺跡における近世期の遺物は僅少であり、当該地の耕作地化に伴う営為の可能性を示唆するに留まる。

(7) 錢貨

(182) 法量/錢径:2.6cm 孔径:0.6cm 錢厚:0.1cm 質量:1.9g 備考:緑青

本調査区から出土した古銭は溝渠状遺構(攪乱)から銅銭(寛永通寶)を1枚出土している。「寛永通寶」は近世の代表的な錢貨で、寛永3年(1626)～明治2年(1869)まで約240年間に亘って各地で鑄造されている貨幣である。182は面文が「コ」頭通・「ハ」貝寶の新寛永と想定でき、背面上に「佐」(広佐)文字が鑄込まれていることから、享保2年(1717)を初鑄とする佐渡鑄錢(享保官錢)の可能性が考えられる⁽¹⁰⁾。

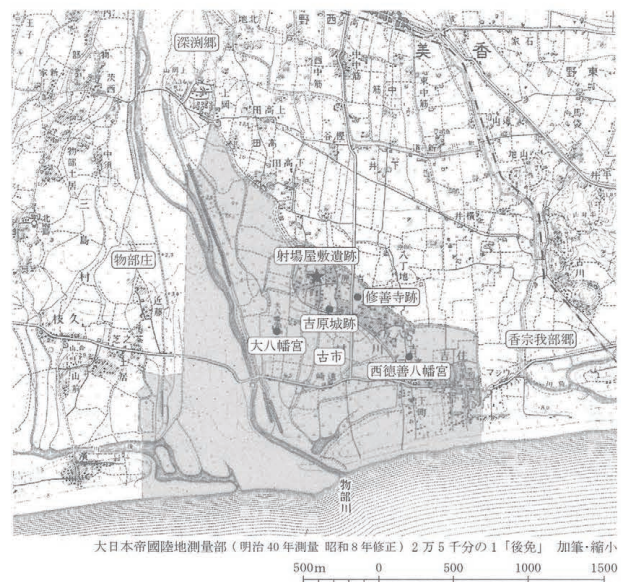
第3節 射場屋敷遺跡からみた吉原庄の景観

吉原庄は物部川河口東岸を中心に所在した荘園で、荘域はほぼ旧吉原村(現香南市吉川町吉原)に相当する。東部は香宗我部郷古川分(吉川町古川)、北部は深淵郷(野市町)、西部は物部庄(南国市)に接しており、南に土佐湾(外洋)を臨んで複数列の浜堤帯が発達し、潟湖性の後背湿地を形成している環境に存立する。

第38図に示した編年案は、南四国における広域流通品(搬入品)の動向や各地域の様相を土器編年⁽¹¹⁾により時期区分した池澤俊幸氏の考究⁽⁶⁾を参照して作成した当遺跡出土遺物の概念図である。本節ではこれに準拠して当該期遺物の考察によって得られた年代観に基づき、遺跡の背後にある歴史的状勢や文献資料及び既往の論考等の一端を応用して先行期及び吉原庄の中世的景観の復原を試案し、総括としたい。

現存史料における吉原庄の初見は、鎌倉初期の建久9年(1198)の「吉原御庄」に対する土佐国留守所下文案(「壬生文書」)であり、文意から当庄が国衙領を切り宛てて立荘した可能性が示唆されている⁽⁷⁾。物部川下流域東岸(吉川町域)では段丘下の沖積扇状地に、同一方位を有する方格状地割(条里的地割)の名残とみられる痕跡が不明瞭ながら断続的に遺されており、『長宗我部地検帳』(「吉原庄御地検帳」)にも「大坪」(固有名詞坪)のホノギが記されている。当地の地割は西岸広域に展開している「香長条里」と指向性が近似しており、延伸による統一性(連続的分布)が指摘されている⁽¹²⁾。本調査区からは古代～中世にかけての溝状遺構は検出しておらず、当該期の地割方向を把握することは能わなかったが、僅少ながら律令期に遡る遺物が埋存しており、緑釉陶器片や赤色塗彩土師器片、製塩土器片等の出土は、当地に官衙的要素を含む建物群が存置した可能性を示唆する資料として捉え得る。また傍証ながら「ミヤケタ」のホノギも『地検帳』に記載されており、一帯の地目は耕作地となっているが律令国家成立以前の地方統治機構としての「屯倉」^{みやけ}を想起させ、当該地が先行期から重要な地域であったことを窺わせる遺称と推測される。

当庄の成立時期は不明ながら、前記の留守所下文案から高倉院法華堂を本家、官務小槻氏を領家とする荘園として成立し、貞応2年(1223)及び天福2年(1234)の譲状(「諸国荘保文書」)などにより、鎌倉期を通じて小槻氏伝領の荘郷として営為されていたと考えられる。これらの文書が記された12世紀末～13世紀初葉(Ⅲ期)の動向は、遺跡の立地に古代後期の枠組みを継承しながら、物流の急増による中世的様相の劃期を呈しているが、下ノ坪遺跡などの廃絶により物部川下流域での出土頻度は概して低調となり、本調査区においても目立っ



第40図 吉原庄略図 (S=1/50,000)

た遺物は出土していない。13世紀中葉以降に続くⅤ期は、搬入品に器種及び量的な減少傾向がみられる中で、浦戸湾周辺や仁淀川河口附近など海運等の拠点や関連遺跡の優越が指摘されており、本調査区での当期の主な遺物として、瓦質土器の羽釜や龍泉窯系青磁碗(錦蓮弁文)などが出土している。

南北朝の動乱に小槻氏は、建武3年(1336)の院宣(「壬生文書」)により北朝方から知行の安堵状を得て存続を期するが、「観応の擾乱」(1350~1352)等を経て土佐に入国した細川氏(頼益流)は、守護代として田村庄(南国市)周辺を基盤に権勢を在地深化(領国化)させていく(「最御崎寺文書」「吸江寺文書」他)。細川氏の守護代所として存在した田村城館は、西偏していた物部川旧派流に臨む自然堤防に立地していたと想定されている。河口附近の浜堤背後の旧潟湖は「大湊」と古称され、後身の町場が流路を介して守護代館と一体となって機能し、細川氏権力を支えていたと考えられている⁽¹³⁾。当該期はⅥ期に相当し、貿易陶磁器を始めとする搬入品の汎四国的な減少期に当たり、先期より盛行を継続した遺跡群の消長がある中で、田村遺跡の台頭がみられ始めるなど、拠点遺跡への集中化が進行する。また備前焼はⅥ期後半から急増して一定の流通量を占めるようになるが、本調査区の出土遺物に中世陶器の製品は殆ど流入しておらず、貿易陶磁器の出土傾向と同様に当庄の衰退を考える上で、消極的ながら一つの根拠となる可能性が考慮される。また瓦質土器(「土佐型鍋」)の出土状況は、細川氏(北朝方)の支配領域に多く分布していることが指摘されており、14世紀後半に田村城館を擁する香長平野周辺の再編が行われたと考えられている⁽¹⁴⁾。

細川氏の入封後、長宗我部氏や香宗我部氏など近郷の有力国人が帰属し、地勢的に吉原庄は守護勢力の影響下に置かれ、14世紀末には長宗我部氏の属領へ変転すると通史は伝えている。吉原城跡も旧河道に指向して河成堆積扇状地の扇端部に占地しており、要因として物部川河口周辺の水運掌握が背景にあると考えられる⁽¹⁵⁾。また同氏は当庄に所在する修善寺の警固となっており(『土佐国編年紀事略』)、寺社奉行的な任を管掌したとされる(『南国市史』)。真言宗号金照山光明院修善寺は吉原宇修善寺屋敷に造営され、開基は不詳ながら五台山竹林寺(高知市)の末寺として古伝されるが、宝永4年の大潮(津波)により旧記等を流失し、明治4年(1871)には廃寺となる(『吉原村誌』)。跡地に遺存する五輪塔群は室町後期から江戸初期以前の年代観が付与されている。長宗我部氏が当庄の主体となる15世紀代(Ⅶ期)は、Ⅵ期より続く城館及び有力寺院関連遺跡への搬入品集中が増加する時期とされ、本調査区では15世紀前半に盛行する龍泉窯系青磁碗(細蓮弁文)や、15世紀後半から主流となる「播磨型」土師器釜などが僅少ながら出土している。続く15世紀後半~16世紀前半(Ⅷ期)以降の動向は、海運に依拠する集落の支配機構や地域権力による城館群の再編を示唆しており、当遺跡は「弓場」(『地検帳』)比定地の可能性を残して終焉する。

河川流域に拡がる地域経済圏は、消費地を擁する河口または下流域に海路と河川水運を結節する集散地を存立させて沿岸部に海運機能を附随する例がみられ、物部川下流域でも不安定な河口部を避け近接する浜堤背後の潟湖に湊を成立させていたと考えられている。渡河点(船着場)に形成された津は、河川に直交する道路沿いに集落(市町)を展開していたとされ⁽¹⁶⁾、吉原の沖積低地(遠崎)には旧河道(埋没流路)に面して「古市」の小字が遺されているが、16世紀末には既に古称であることが『地検帳』から読み取れる。

地形環境の変化(河口閉塞等)や、寒冷化に伴う海退などの影響も地域権力構造を変質させる要因を成した可能性が指摘されており⁽¹⁷⁾、微地形の起伏などに留意した旧地形の把握や、地籍図等に遺された小字の検証も含めた包蔵地範囲の再検討が課題と考える。中世吉原庄の景観は、政務的主体となる吉原城や修善(繕)寺などの寺社群が段丘縁辺部に存立し、水理に利した市立を継受して幹線道(下街道)が成立する人為的要素と、砂堆及び潟湖性湿地(芳原)を形成する物部川河口水域の自然的要因で構成されると考察でき⁽¹⁸⁾、当地の様相は多角的な視座で空間的具現化することで有機的に関連付けられると試案する。

第4節 射場屋敷遺跡周辺(香南市域)の主な中世集落関連遺跡

深淵北遺跡

野市町父養寺に所在し、河口から約5km上流の標高約22m前後を測る物部川東岸の新时期扇状地に立地している。古代末から中世前期に成立していたと考えられ、11世紀後半～12世紀代の遺物を主体とする溝を伴う掘立柱建物跡を検出している。また貿易陶磁器(同安窯系青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類)の出土がみられ、川に面した立地から「郡津」の可能性も想定されており、亀山窯跡(野市町佐古)との関連が指摘されている。

母代寺土居屋敷遺跡

野市町母代寺に所在し、標高約33～34m前後を測る山麓堆積地形に立地している。12世紀後半を中心とする12世紀前半～13世紀後半にかけての集落遺跡であり、包含層からは14世紀前半～16世紀後半の遺物も出土している。貿易陶磁器(龍泉窯系・同安窯系青磁碗、白磁碗Ⅳ類等)や滑石製石鍋(同転用温石)、楠葉型瓦器碗など広域流通品の出土がみられ、井戸跡から廃絶儀礼に用いたと考えられる瓦類、須恵器(甕)等を出土するなど、周辺に所在する深淵北遺跡や亀山窯跡との関連が指摘されている。

東野土居遺跡

野市町東野・土居地区に所在する東西約1.5kmに及ぶ比較的広範囲な包蔵地を有する遺跡である。当遺跡は河成堆積扇状地(野市台地)に立地しており、弥生終末から古墳初頭及び後期の集落跡を検出しているが、中心となる遺構・遺物は中世に帰属するものが大半を占めている。中世遺構は調査区の全域から検出しており、区画溝を伴う掘立柱建物跡や土坑がみられ、概ね13～16世紀代の範疇に帰属するが、その中心時期は14～15世紀代と考えられている。字「野々土居」において検出した溝跡は幅約5m、深さ約1mで凡そ方半町の規模を測っており、重壕屋敷(土居)城を形成していた可能性を示唆している。

十万遺跡

香我美町十万に所在し、標高約13m前後を測る香宗川左岸の丘陵縁辺部の微高地に立地している。縄文晩期から近世初頭にかけての遺構を検出しているが、遺跡の盛行期は古代(8世紀中葉～後葉)の官衙関連遺構(掘立柱建物跡)と中世(14～15世紀)の環濠屋敷群の成立に求められる。14世紀代の土坑から廃棄された未ロクロ成形の土師器皿を含む供膳具を出土している。

徳王子大崎遺跡

香我美町徳王子に所在し、徳王子・香我美丘陵の南端部に形成された小規模な段丘面と、丘陵を浸蝕して形成された岸本川の谷底低地末端部に立地している。本遺跡では弥生前期前葉及び後期後葉から終末にかけての遺構を確認しているが、中世の主な遺構は屋敷を区画していたと考えられる数条の溝跡を検出している。出土遺物から概ね13～15世紀代の遺構と考えられ、土橋状遺構の可能性を有する溝跡も看取できる。

徳王子前島遺跡⁽¹⁹⁾

香我美町徳王子に所在し、丘陵西麓の小規模扇状地と大留川の谷底低地に立地している。2条の自然流路跡を中心に遺物が出土し、古代(8世紀後半～9世紀代/10世紀後半)の流路跡からは、祭祀遺物(木製品)や墨書土器など律令期の遺物が出土している。12世紀代の遺物を終見とし、13世紀初頭には流路としての機能を失ったとみられている。中世(13～14世紀後半)の流路跡からは楠葉型瓦器碗や貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられる。また瓦当を含む瓦片を出土しており、本遺跡周辺に瓦葺建物を含む集落が存在した可能性を示唆している。

クノ丸遺跡

香我美町岸本に所在し、姫倉城跡(市指定史跡)が遺存する月見山西麓の標高約5m前後を測る浜堤に立地している。弥生時代(後期)から近世に亙る約39,500点に及ぶ遺物を出土しているが、主体となるのは中世前半から中葉(12世紀後半～14世紀)にかけての供膳具及び煮炊具を中心とした土師器(土師質土器)であり、手捏ね技法の皿が纏まって出土していることも留意される。広域流通品と考えられる楠葉型瓦器碗(12世紀後半～13世紀前半)などの出土がみられ、大忍庄(権門)との関連が指摘されているが、遺跡からは集落の存在を示す遺構は検出されず、多量の土錘の出土などから漁撈等海浜部の生業の一端を提示していると思われる。出土した貿易陶磁器(龍泉窯系青磁碗、白磁碗IV・V類等)には東南アジアを所産とする可能性を有する搬入品が含まれており、広域経済圏を視野に入れた検討が望まれる。

口槇ヶ谷遺跡⁽²⁰⁾

夜須町出口に所在し、夜須川左岸の低位河成段丘を臨む山地斜面麓部に形成された開析谷の谷口部に立地している。弥生時代(中期)から近世(中～後期)に亙る複合遺跡であるが、中心となる時期は中世(13～15世紀)であり、山麓尾根上に当該期の集落が形成されていたと考えられる。標高約5m前後に立地している掘立柱建物跡に附帯するとされる溝跡から13世紀前半頃の和泉型瓦器碗を出土している。

【註】

(1) 出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治 『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター 1996年

(2) 宮里 修 「土佐の古式土師器」『古式土師器の編年的研究』四国考古学研究会 2014年

(3) 出原恵三 「南四国の竪穴住居」『犬飼徹夫先生古稀記念論集』同論集刊行会 2002年

(4) 出原恵三 『南四国から問う弥生時代像 田村遺跡』新泉社 2009年

(5) 松木武彦 「人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化」

『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 国立歴史民俗博物館 2014年

(6) 池澤俊幸 「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」『中世土佐の世界と一条氏』高志書院 2010年

(7) 山本 大 「土佐国吉原庄について」『日本歴史』第268号 吉川弘文館 1970年

(8) 出原恵三・松田直則・曾我貴行・竹村三菜・武吉眞裕 他 『船戸遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 1996年

(9) 中井淳史 『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版 2011年

(10) 大鎌淳正 『改訂増補 古銭語事典』国書刊行会 1997年

(11) 百瀬正恒・橋本久和 他 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年

(12) 大脇保彦 「土佐の条里」『高知県の研究2』清文堂 1982年

(13) 市村高男 「武家政権の盛衰と土佐国」『高知県の歴史』山川出版社 2001年

(14) 吉成承三 『天神溝田遺跡Ⅰ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2010年

(15) 池澤俊幸 「川と道と城」『西国城館論集Ⅱ』中国・四国地区城館調査検討会 2012年

(16) 市村高男 「中世日本の港町」『港町のトポグラフィ』歴史学研究会 2006年

(17) 村上 勇 「パリア海退が中世地域社会に与えた影響について」『西国城館論集Ⅰ』

中国・四国地区城館調査検討会 2009年

(18) 北山健一郎 「中世港町の地形と空間構成」『港町の原像』四国村落遺跡研究会 2007年

(19) 島内洋二 他 『徳王子前島遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2011年

(20) 下村 裕・廣田佳久 他 『口槇ヶ谷遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2008年

写真図版



図版 1
調査対象地



調査対象地 遠景 (2015. 12. 24)



錦児童公園 (2013. 5. 7)



試掘調査 (2013. 7. 11)



遊具等撤去作業中 (2014. 3. 5)



調査前風景 (2014. 3. 25)

調査 I 区



設定状態 (2014. 4. 2)



東壁 土層断面 (2014. 4. 3)



遺構検出状態 (2014. 4. 7)



調査区完掘状態 (2014. 5. 1)



遺構検出状態 (2014. 4. 7)

図版 3
ST1



遺構検出状態 (2014. 4. 7)



床面検出状態 (2014. 4. 17)



十字形畦 (バンク) 設定状態 (2014. 4. 16)



完掘状態 (2014. 4. 22)



遺物出土状態 (2014. 4. 16)

ST2



遺物出土状態 (2014. 4. 15)



十字形畦 (バンク) 設定状態 (2014. 4. 17)



床面検出状態 (2014. 4. 22)



完掘状態 (2014. 5. 1)

ピット状遺構・他



P 87 遺物出土状態 (2014. 4. 4)



P 87 炭化物出土状態 (2014. 4. 22)



P 41・42 土層断面 (2014. 4. 22)



P 102 土層断面 (2014. 4. 22)

図版 5
調査Ⅱ区



設定状態 (2014. 5. 8)



東壁 土層断面 (2014. 5. 8)



遺構検出状態 / 東 (2014. 5. 19)



遺構検出状態 / 西 (2014. 5. 27)



調査区 完掘状態 (2014. 5. 30)

SX1



遺物出土状態 (2014. 5. 9)



SX1 P5 土層断面 (2014. 5. 21)



SX1 P6 遺物出土状態 (2014. 5. 27)



完掘状態 (2014. 5. 30)

土坑状遺構・他



SK2 遺物出土状態 (2014. 5. 20)



SK3 礫出土状態 (2014. 5. 23)



P 200 遺物出土状態 (2014. 5. 21)



緑釉陶器 (2014. 5. 23)



外面

4



外面

5



8



内面

4



内面

5



9



外面

11



外面

12



裏面

9



内面

11



内面

12



13



外面

14



内面

14



外面

15



内面

15



16



底面

16



底面

17



内面

21



底面

21



22



内面: お焦け

22



底面

22



外面

23



24



外面

27



内面

23



25



内面

27

弥生土器



26



底面

26



29



底面

29



37



37



底面

37



外面

28



外面

30



外面

31



内面

28



内面

30



内面

31

弥生土器



外面

32



外面

33



外面

35



内面

32



内面

33



内面

35



外面

36



外面

38



39



内面

36



内面

38



外面

40



外面

42



外面

41



内面

42



内面

41



内面

40

弥生土器



外面 43



内面 43



外面 44



外面 45



内面 45



内面 44



外面 46



内面 46



外面 47



外面 48



外面 49



内面 47



内面 48



内面 49



外面 50



内面 50



外面 51



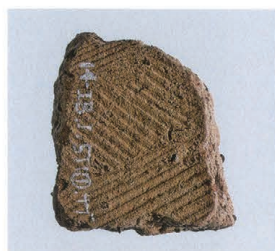
外面 52



外面 53



外面 54



内面 51



内面 52



内面 53



内面 54



外面 55



外面 57



外面 56



内面 56



内面 55



内面 57



外面 60



内面 60



外面 58



外面 59



外面 61



内面 61



内面 58



内面 59

图版 13



外面

70



外面

71



外面

72



外面

73



内面

70



内面

71



内面

72



内面

73



外面

74



内面

74



外面

75



内面

75



78



外面

76



内面

76



外面

79



外面

80



内面

80



内面

79

弥生土器



外面 81



外面 82



外面 83



外面 84



底面 85



内面 81



内面 82



内面 83



内面 84



肩部 89



内面 86



底面 86



外面 88



内面 88



内面 87



外面 90



外面 91



外面 92



底面 87



内面 90



内面 91



内面 92



外面 93



内面 93



外面 96



内面 96

图版 15



外面

94



内面

94



外面

103



外面

95



内面

95



内面

103



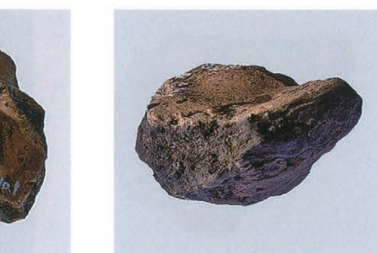
外面

97



内面

97



外面

101



外面

99

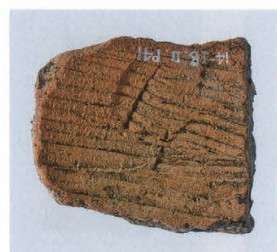


100



内面

100



内面

99



104



内面

104



底面

104



外面

105



内面

105



外面

106



内面

106

弥生土器



外面 107



内面 107



外面 108



内面 108



外面 109



内面 109



外面 110



内面 110



外面 112



内面 112



外面 111



内面 111



外面 113



内面 113



外面 114



内面 114



外面 115



内面 115



外面 116



内面 116



底面 117



118

图版 17



120



122



内面

122



底面

122



底面

120



底面

121



底面

123



126



外面

124



外面

125



外面

127



外面

130



内面

124



内面

125



内面

127



内面

130



外面

128



外面

129



外面

131



外面

132



内面

128



内面

129



内面

131



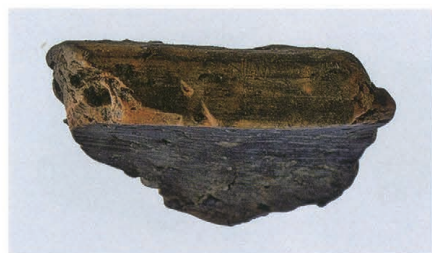
内面

132

弥生土器



外面 136



133



外面

140



内面

140



内面 136



外面 134



外面 135



外面 154



内面 134



内面 135



内面 154



外面 10



内面 10



外面 137



外面 139



内面 142



外面 143



内面 143



137

図版 19



外面 144



外面 145



外面 146



147



内面 144



内面 145



内面 146



148



外面 149



外面 150



外面 151



内面 149



内面 150



内面 151



156



153



157



152



底面 156



底面 153



内面 159



内面 160

須恵器・土師質土器・瓦質土器・製塩土器



162



内面

163



165



164



底面

163



底面

165



外面

1



外面

168



166



内面

1



内面

168



167



外面

169



外面

170



外面

171



172



内面

169



内面

170



内面

171



内面

172

図版 21



外面

175



外面

179



180



※実物大
天

182



内面

175



内面

179



181



※実物大
地

182



183



184



185



186



187



底面

188

石器



3



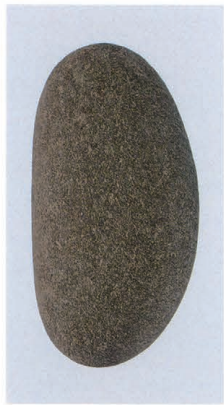
3



3



3



62



62



63



63



63



64



64



66



66



66



65



65



67



67



67



68



68



69



69



69

石器



98



138



141



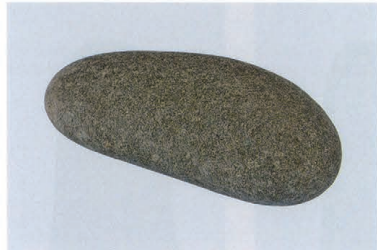
98



138



141



62



63



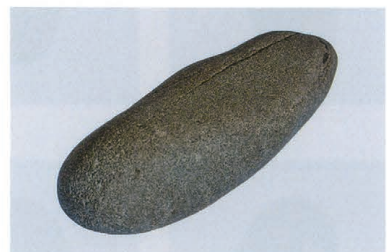
141



64



65



66



67



68



69



3



3



98

付．野口遺跡出土遺物



外面

189



192



2



内面

2



内面

189



底面

192



190



191



底面

191



193

— 調査日誌抄 —



図版 25

4月2日(水) 調査初日 調査I区 設定 / 重機・コンテナ・仮設トイレ搬入 / 表土剥除 / 他



コンテナ・仮設トイレ搬入



表土剥除

4月3日(木) 2日目 表土剥除 / 遺構検出作業 / 東壁土層断面検出 / 他



作業風景



終了作業

4月4日(金) 3日目 表土剥除 / 遺構検出作業 / 重機搬出 / 他



作業風景



重機搬出

4月7日(月) 4日目 I区 遺構検出写真 / 他



作業風景



遺構検出状態

4月8日(火)5日目 配置図作成(平板測量)/遺構精査



作業風景

4月9日(水)6日目 遺構精査/他



作業風景

4月10日(木)7日目 遺構精査/他



作業風景



終了風景

4月15日(火)8日目 遺構精査/広報取材/他



水汲み作業



広報取材

4月16日(水)9日目 遺構精査/吉川小学校 遺跡見学(香南ケーブルTV・高知新聞社取材)/他



遺跡見学



高新取材(左:松村主監調査員)

図版 27

4月17日(木) 10日目 遺構精査 / 他



作業風景

4月22日(火) 11日目 遺構精査 / 他



作業風景

4月23日(水) 12日目 遺構精査 / 他



休憩中 (2014. 4. 24)

4月24日(木) 13日目 北陵中学校 職場体験学習 / 他



職場体験学習

4月30日(水) 14日目 遺構精査 / 南国市教委視察 / 県文化財課視察 / 他



作業風景



ST2 台石状石器検出状態

5月1日(木) 15日目 I区 完掘写真 / 他



作業風景



ST1 完掘状態

5月3日(土) 現地説明会



現地説明会

5月7日(水) I区 埋め戻し作業



作業風景

5月8日(木) 16日目 調査II区 設定 / 表土剥除 / 遺構検出作業 / 東壁土層断面検出 / 他



表土剥除



作業風景

5月9日(金) 17日目 表土剥除 / 遺構検出作業 / 県埋蔵文化財センター視察 / 重機搬出 / 他



作業風景



道具手入

5月13日(火) 18日目 遺構検出作業 / 他



作業風景



コンクリート片撤去

5月14日(水) 19日目 遺構検出作業 / 他



作業風景



排土措置(隣接地に表採遺物散布)

5月16日(金) 20日目 大津中学校 職場体験学習 / 他



職場体験学習

5月19日(月) 21日目 II区 遺構検出写真(東) / 他



遺構検出作業

5月20日(火) 22日目 遺構精査 / 他(午後:雨天中止)



作業風景



終業風景

5月21日(水) 23日目 遺構精査 / 他



作業風景

5月22日(木) 24日目 遺構検出作業 / 他



作業風景

5月23日(金)25日目 三里中学校 職場体験学習 / 他



職場体験学習

5月27日(火)26日目 II区 遺構検出写真(西)/ 他



作業風景

5月28日(水)27日目 安芸市教委現場研修 / 他



現場研修

5月30日(金)28日目 II区 完掘写真 / 発掘調査終了



作業風景

6月2日(月) 下層確認調査 / II区 埋め戻し作業



作業風景



下層断面

6月3日(火) 埋め戻し作業完了 / 撤収



調査後風景



お疲れさまでした

図版 31

射場屋敷遺跡周辺の史跡



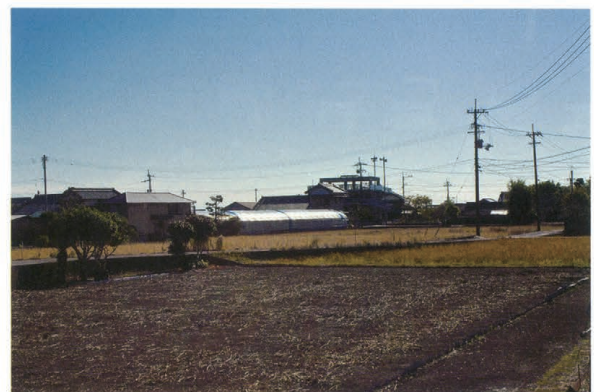
吉原城跡



修善寺廃寺跡（五輪塔群）



大八幡宮



野口遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）

津波避難タワー



報告書抄録

ふりがな	いばやしきいせき							
書名	射場屋敷遺跡							
副書名	津波避難タワー整備に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	宮地啓介							
編集機関	香南市文化財センター(香南市教育委員会)							
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 TEL 0887-54-2296							
発行年月日	2016年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′ / ″	° / ′ / ″			
いばやしき 射場屋敷 いせき 遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 よしかわちようしむら 吉川町吉原	39211	230008	33° 32′ 48″	133° 41′ 35″	平成26年 4月2日 ～ 6月3日	約300m ²	津波 避難タワー 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
射場屋敷 遺跡	集落跡	弥生後期 古代 中世 (近世)	竪穴住居状遺構 土坑状遺構 性格不明遺構 ピット状遺構 (溝渠状遺構)	弥生土器 須恵器 緑釉陶器 土師器 土師質土器 瓦質土器 青磁 近世陶磁器 石器/土製品				

高知県香南市発掘調査報告書第12集

射場屋敷遺跡

津波避難タワー整備に伴う発掘調査報告書

2016年2月

発行 高知県香南市教育委員会

香南市文化財センター

〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1

TEL 0887-54-2296

印刷 香南市野市町西野 2114-1

岩神印刷株式会社